

宮ノ沖遺跡発掘調査報告

研究紀要 第19-3号

2010(平成22)年3月

三重県埋蔵文化財センター

例　　言

1. 本書は、昭和62年度農業基盤整備事業にかかる埋蔵文化財発掘調査のうち、宮ノ沖遺跡の発掘調査結果を再整理し、まとめたものである。

2. 当時、「出口遺跡」として三重県農林水産部農村整備課（当時）等との文化財保護調整協議を行い、発掘調査を実施したものであるが、平成20年3月31日発行の松阪市遺跡地図において、遺跡番号a 252「宮ノ沖遺跡」として整理された。

3. 調査の体制等は下記による。なお、機関名は調査当時の名称による。

調査主体 三重県教育委員会

調査担当 三重県教育委員会文化課

主事 森川常厚 研修員（主事併任） 東 浩成

調査協力 三重県農林水産部農村整備課、耕地課、松阪農林事務所

松阪市教育委員会

調査場所 松阪市美濃田町字出口

調査面積 1,800 m²

調査期間 昭和62年5月7日～昭和62年6月10日

4. 本書の作成・執筆は、森川常厚が行った。

5. 図面における方位は、磁北から求めた真北を表示している。なお、磁北は6°20'西偏（昭和62年）する。

6. 本書に使用した事業計画図面は農林水産部（当時）の提供による。

7. 本書に用いた遺構表示略記号は下記による。

S A : 柱列 S B : 掘立柱建物 S D : 溝 S E : 井戸 S H : 壊穴住居
S K : 土坑 S X : 墓

目 次

I. 前言	1
II. 位置と環境	1
III. 層序	4
IV. 遺構	5
1. 奈良時代の遺構	5
2. 平安時代の遺構	9
3. 中世の遺構	15
V. 遺物	16
1. 奈良時代の遺物	16
2. 平安時代の遺物	23
3. 包含層出土遺物	24
VI. 結語	39
1. 時期	39
2. 記号	40
3. 遺構の変遷と性格	40

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	2
第2図 遺跡地形図	3
第3図 調査区位置図	3
第4図 調査区土層断面図	4
第5図 調査区平面図	6
第6図 S H16、S B10・24実測図	7
第7図 S H16カマド実測図	7
第8図 S H 3実測図	7
第9図 S B 6・13・14、S K31実測図	8
第10図 S D 8断面上層図	9
第11図 S B 4・5・7・9・23実測図	10
第12図 S B 11・12・15・17・22実測図	12
第13図 S B 25実測図	14
第14図 S E 1実測図	14
第15図 S H 3、S K18・32、S X40 出土遺物実測図	17
第16図 S K 2・19・38、S H16 出土遺物実測図	19
第17図 S K21出土遺物実測図	20
第18図 S K21出土遺物実測図	21
第19図 S D 8出土遺物実測図	23
第20図 S E 1・20、S B 4・5・12・13、S A41、S K42 出土遺物実測図	25
第21図 包含層出土遺物実測図	27
第22図 包含層出土遺物実測図	28
第23図 包含層出土遺物実測図	29
第24図 包含層出土遺物実測図	30
第25図 遺構変遷図	41

写 真 版

写真図版 1	調査区北西側全景	S B11・12
	調査区西側全景	S B13
写真図版 2	調査区南西側全景	S B15
	調査区北東側全景	S B17
写真図版 3	調査区東側全景	S B24
	調査区南東側全景	S E 1
写真図版 4	S H16	SK21
	S H16カマド	S X40
写真図版 5	S H16カマド断面	出土遺物
	S B14	出土遺物
写真図版 6	S B 4・5	墨書・記号
	S B 7	記号
写真図版 7	S B 9	記号
	S B10	記号
写真図版 8		
写真図版 9		
写真図版 10		
写真図版 11		
写真図版 12		
写真図版 13		
写真図版 14		
写真図版 15		
写真図版 16		

表 目 次

第1表 遺物観察表	31～38	第3表 遺構番号対照表	42
第2表 掘立柱建物一覧表	39		

I. 前　　言

三重県教育委員会では、国及び県にかかる各種公事業に関して、各開発部局の事業を照会し、事業予定地内の文化財の確認と、その保護に努めている。

こうした中で、三重県農林水産部農村整備課（当時）から、県営圃場整備事業堀坂川沿岸地区的照会を受け、三重県教育委員会文化課（当時）が、事業予定地内の遺跡分布調査を実施した。その結果、事業地には数箇所で遺跡の包蔵が推測された。文化課では、詳細な遺跡の実態を把握するために、昭和62年1月30日～2月3日に範囲確認調査を実施した。その結果、松阪市美濃田町字出口において遺構・遺物が確認された。この取扱いについては、その保護

に努めるよう県農林水産部・松阪農林事務所（当時）と、県教育委員会文化課で協議が重ねられ、設計変更等による保存が図られた。しかし、どうしても現状保存が困難な1,800m²については発掘調査を実施し記録保存することになった。

調査は、次年度の稲作開始までに完工する必要がある工事工程との整合から年度上半期に行うことになった。しかし、調査区周辺は減反転作による麦の作付けがあり、これへの影響を最小限に止める必要が生じた。そこで調査区を東西に分割し、まず西側半分を発掘し、その排土を東側に置き、その後、その逆を行うという工程で実施した。

II. 位置と環境

「美濃田の大仏」で知られる松阪市美濃田町は松阪市の北西側郊外に位置する。西方には紀伊山地の東端を形成する標高700m級の山地が連なり、そこから伊勢平野に向かって大規模な扇状地が複合的に発達している。宮ノ沖遺跡（11）は、その扇状地の先端部ちかく、美濃田集落の南端に位置し、標高は20m、現況は山林・畑・水田である。

さて、大仏であるが、松阪市指定文化財「銅造阿弥陀如来坐像」で像高は3mを測り、この地域では最大級の仏像である。敏太（みねだ）神社（8）の本地仏として、その別当寺である真楽寺（7）の塔頭長楽寺に江戸時代に安置されたものである。その敏太神社は延喜式に記載のある神社で真楽寺と共に美濃田集落内に鎮座する。1.5km南方には「国分寺」と伝えられ白鳳期に遡る伊勢寺庵寺（19）があり、さらに宮ノ沖遺跡近辺を古代の官道が通過していたと推測されるなど、律令制下においてはかなり開けた地域であったようである。それを裏付けるかのように、広大な面積を占める伊勢寺遺跡（15）、前沖遺跡（16）、曲遺跡（18）等、周辺で行われた発掘調査において、この時期の集落跡や三彩陶器等が出土している。ただし、これらの遺跡は律令制下において飯高郡に属し、一志郡の南端に位置する美濃田

集落とは郡を越える。一志郡側に目を向けると、白鳳寺院が集中し、発掘調査により律令期の遺構・遺物が多数検出されている雲出川水系とは様相が異なり、僅かに小野遺跡（2）で発掘調査が行われ、律令期の遺物が出土しているのみで集落の解明には至っていない。ただし、式内社である阿射加神社（5）が鎮座しており、郡端とはいえ飯高郡から引続きこの時期の集落が広がっていたことは容易に推測できる。

一時代遅って古墳時代では、一志郡に集中する前方後方墳の内、最大の向山古墳（1）は当遺跡から遠望でき、南方1.5kmの深長古墳（17）は推定径50mの円墳で首長級とされる。また、西方の山地裾部分には群集墳が分布し、中勢から南勢にかけての群集墳密集地帯の一部となっている。八重田古墳群（21）、垣内田古墳群（12）、天神山古墳群（14）、平林古墳群（20）等が発掘調査され、4世紀後半～7世紀前半までの円墳を中心とした群集墳であることが判明している。これらの他にも山腹に分布する瑞巖寺古墳群（13）、美濃田集落内では敏太神社境内を中心に分布する美濃田古墳群（9）等が知られている。

一時代降って中世では、阿射賀御厨、勾御厨等の伊勢神宮領が成立し、宮ノ沖遺跡東方に醍醐寺の

莊園「曾祢莊」が推定されている。遺跡としては、宮ノ沖遺跡に隣接する別当垣外遺跡（10）には中世の遺物が散布し、発掘調査においても既述した律令期の遺跡の多くで中世の遺構・遺物を検出している。遺跡の性格に言及できたものは少ないなかで、上ノ庄宮ノ腰遺跡（6）では曾祢莊の莊官クラスの屋敷が検出されている。

南北朝から戦国期にかけては北畠氏の勢力下にあつたよう、北畠満雅が阿坂城において北朝軍を迎え撃ったとされている。水源を絶たれた際に白米を水に見せかけて馬を洗ったという伝説から白米城とも呼ばれ、国史跡に指定されている。この阿坂城跡（4）の山麓に北畠氏の菩提寺である淨眼寺（3）がある。阿坂城と対になり北畠氏の一拠点として機能していたようで、北畠氏関係の文化財を多く所蔵している。このように中世後半では北畠氏に關係の深い地域と言える。

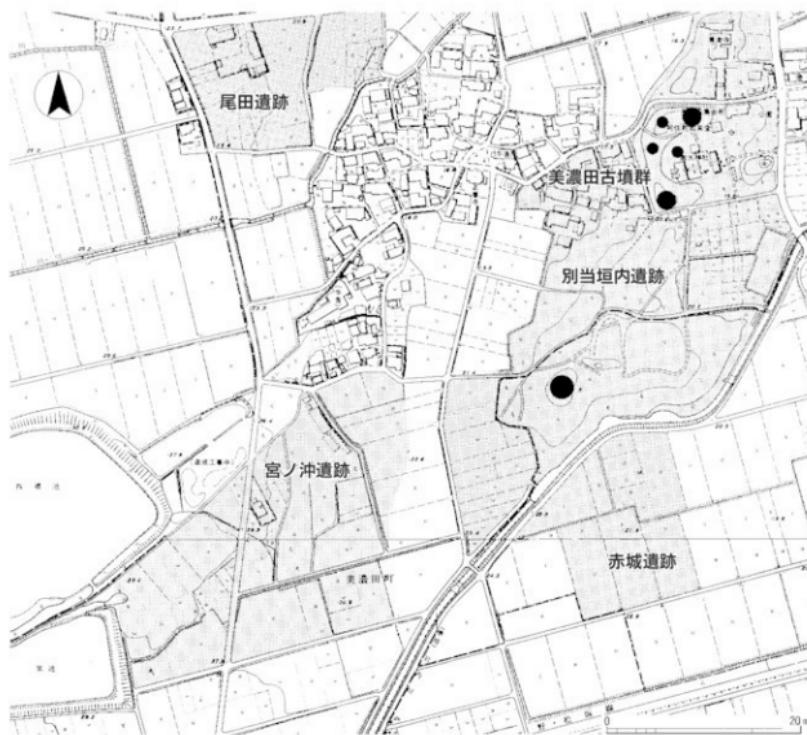
なお、丘陵端に所在する横尾中世墓群（22）では発掘調査の結果、土坑、石配区画墓等さまざまな形態の墓が検出されている。中世を通して埋葬され、墓域としての意識は近世にまで及んでいたようである。その近世には宮ノ沖遺跡周辺は紀州藩に属し、そのためか既述した大仏も紀州粉河の鑄物師によるものである。敏太神社の境内に一堂を設けられ、静かに安置されている。

【註】

- ① 上田正明編『探訪古代の道 第一巻』法藏館 1988年1月15日
- ② 三重県埋蔵文化財センター『伊勢守庵寺・下川遺跡ほか』1990.3 ほか多数
- ③ 一志町・嬉野町遺跡調査会『「一之都」の考古学』1989 ほか多数
- ④ 三重県教育委員会『昭和50年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』1976.3
- ⑤ 三重県教育委員会『昭和61年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』1989.3



第1図 遺跡位置図（1：50,000）（国土地理院「大河内」「松阪」「大仰」「松阪港」1：25,000より作成）



第2図 遺跡地形図（1：5,000）



第3図 調査区位置図（1：2,000）

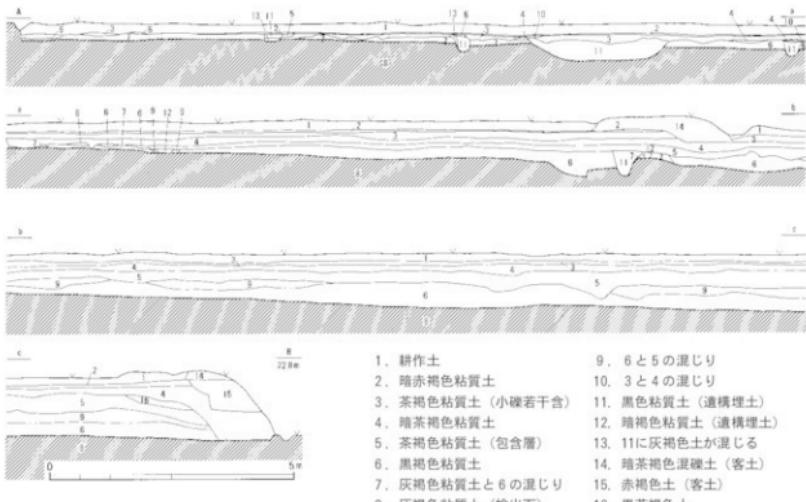
- ⑥ 三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告第2分冊2』1990.3 ほか多数
- ⑦ 三重県埋蔵文化財センター『宮ノ腰遺跡発掘調査報告1』1997.3
- ⑧ 松阪市史編さん委員会『松阪市史 第二巻 資料篇考古』1978.10.31
- ⑨ 三重県埋蔵文化財センター『宮ノ腰遺跡発掘調査報告II』1999.3
- ⑩ 下中那彦『三重県の地名 日本歴史地名大系第24巻』平凡社 1983年5月20日
- ⑪ 三重県埋蔵文化財センター『横尾塙墓群（中・近世墓）発掘調査報告』2009年3月

III. 層序

宮ノ沖遺跡は、前述のように扇状地先端部に位置するため、全体的には西から東へ向けて緩やかに傾斜している。しかし、調査区付近は水田開発を受けているため、水田一筆毎に西側は削平され、東側は盛土、水田境では低い段差を形成している。

基本層序は、耕作土（1）、水田耕作に伴う鉄分の沈殿層（2）、水田の床土（3）、暗茶褐色粘質土（4）、茶褐色粘質土（5）、いわゆる黒ボク土（6）の後、灰褐色粘質土（8）に至る。遺物包含層は茶褐色粘質土（5）のため黒ボク土上面で遺構検出を行なうべきところであるが、遺構埋土が黒ボク土と酷似しており識別が困難のため、1層下の灰褐色粘質土（8）で検出を行なった。

最も削平が激しい調査区西端では、厚さ20cmの耕作土の下に若干の黒ボク土が残存するもの直ぐに検出面となり、地表から検出面までは僅かに30cm程度である。一方、調査区東方では遺物包含層は厚さ20cm、黒ボク土は厚さ40cmに達し、東半では両者の間に1層加わる。調査区北東端では地表から検出面までは1.2mに達し、包含層下から検出面までは最大50cmの間隔が生じている。このため灰褐色粘質土（8）上面での遺構検出は不適確とする懸念が生じる。しかし、遺物の包含や遺構密度は希薄となり、遺跡東端の様相を示し、土層観察においても遺構が浮いた形跡も無かったことから、このまま灰褐色粘質土（8）上面での遺構検出を行うこととした。



第4図 調査区土層断面図 (1 : 100)

IV. 遺構

奈良時代から中世までの遺構を検出した。奈良時代は竪穴住居と掘立柱建物、平安時代は掘立柱建物を中心とする集落跡で、当遺跡の盛行する時期である。

既述したように、検出面が東に向かって傾斜しており、遺構密度も希薄となる。遺構埋土は、奈良から平安時代のものは黒褐色の有機質土であるが、中世のものは灰色味の強い暗褐色土である。

1. 奈良時代の遺構

竪穴住居2棟、掘立柱建物2棟、湧水源から発生する大溝、墓状遺構、多数の土坑を検出し、当遺跡が盛行する時期のひとつである。

(1) 竪穴住居

S H 3（第8図） 調査区北端部で南隅のみを検出した。大半は調査区外のため全体の形態は不明である。深さは検出面から30cmほどであるが、西壁の傾斜が緩く竪穴住居と推測するに疑問もある。埋土は広く焼土に覆われているが、壁や床面は焼けていない。床面に接する焼土塊は少なく、上層が焼けて落下したという状況ではなく、この焼土が何を示すのかは不明である。土師器・須恵器の各器種が出土しているが、残存度が1/2を超えるものはない。

S H 16（第6・7図） 調査区中央部で検出した一辺約2.5mの方形を呈する小型の竪穴住居である。深さは検出面から20cm程度の残存であるが、北辺中央にカマドを設けている。カマドは、馬蹄状に黄褐色粘土が残存し、粘土の高さは竪穴住居壁際が20cm、壁から離れるほどに高さを減じ、南端では10cm程度である。断面観察によると、床面上に厚さ5cm未満の白色細礫が薄く分布し、人為的に床に敷かれた可能性がある。この上に高さ20cm程度の石を支柱石として立て、この支柱石を固定するためか、黒色土混じりの暗褐色土を配する。暗褐色土は厚さ5cm程度でカマドの竪穴住居壁側半分程度に配されている。その暗褐色土の上に既述した黄褐色粘土が馬蹄状に設置されている。カマド内部は炭混じりの焼土が5cmほど堆積し、土師器甕片が散乱していた。接合の

結果、ほぼ完形となったものが長柄甕47（第16図）である。おそらくカマドに設置されていたものであろう。この他にも41・48がカマド内から出土しているが、残存度の低いものである。なお、土師器甕42（第16図）はカマドの西側に接するようにして体部完存で出土したが、これもカマドに関する備品の可能性がある。

なお、前述した白色細礫は竪穴住居壁から10cmほど手前で突然途絶える。このことから周溝は検出できなかったものの、本来は浅い周溝が存在した可能性が大きいものと考えられる。カマドの設置作業は、これらの敷土や周溝の設定が完了後、改めて行われたようである。

(2) 掘立柱建物

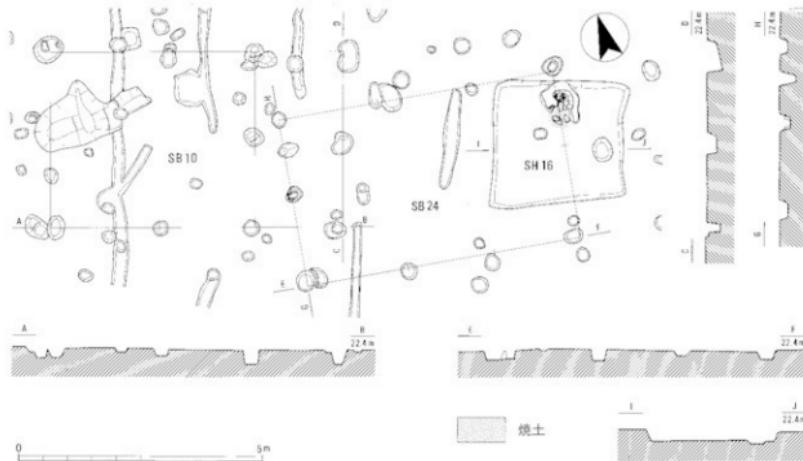
S B 6（第9図） 調査区北端で検出した。調査区外に延びる可能性もあるが、2間×2間の東西棟としておく。柱掘形は円形にちかいものもあるが、本来は一辺45cm前後の方形であったものと考えられる。柱痕跡を検出できたものがあり、それによると直径25cm前後の柱であったようである。柱間は桁行・梁行ともに等間で、柱間は狭く、高い強度を示している。中央に梢円形の深い柱穴があり、束柱の可能性もあるが、柱筋の通りが悪く断定できない。したがって、倉庫として利用されていた可能性を示すまでに止める。柱穴から奈良時代の土師器杯・甕片が出土し、竪穴状の土坑SK31と重複するが、それより後出のものである。

S B 14（第9図） 調査区西部で検出した3間×2間の東西棟と考えられる。柱掘形は、不整形なものも多いが、本来は一辺50cm前後の方形を呈するものと考えられる。掘形に重複のあるものもあり、同一規模・同一方向で建替えられている可能性もある。当遺跡のものとしては大型の柱掘形をもつが、桁行の柱間は狭く、高い強度を示す。ただし、北側桁行は等間であるが南側は極端な不等間となっている。柱痕跡を検出できたものも多く、直径20cm程度の柱であったようである。また、柱穴底部に柱の沈下痕跡を示すものもある。



0 15 m

第5図 調査区平面図 (1 : 300)



第6図 SH16、SB10・24実測図（1:100）

律令期の土師器遺片が出土しているが、この時期とする決め手に欠ける。平安時代のものとは大きく方向を違えること、柱掘形の規模に対し柱間が狭い形態がS B 6に類似することからこの時期とした。

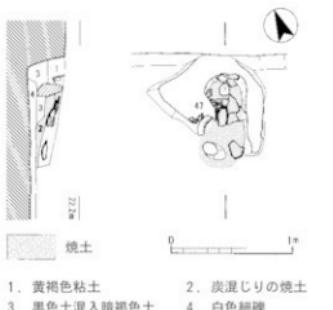
(3) 土坑

S K 2 調査区北西部で検出した直径1mの不整円形を呈する土坑である。検出面からの深さは壁近くで5cm程度、中央へ向かって徐々に深さを増し、中央部では15cmを測る鉢鉢状の形態である。土師器片等が出土したが、埋納と思われるものはない。

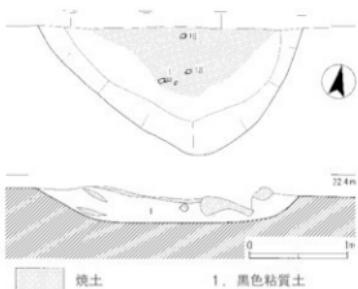
S K 18 長径140cm、短径80cmの長円形を呈する土坑である。深さは、壁周囲20cm程が検出面から10cm、中央部はさらに10cm下がる。土坑の性格は不明であるが、近隣のS K 21等と一連のものかもしれない。土師器の各器種が出土しているが、残存度の高いものはない。

S K 19 調査区南部で検出した直径3mの不整円形を呈する大型の土坑であるが、深さは検出面から15cm足らずである。南西部はS K 21と接し、これと一体の可能性も残る。平安時代に降る土師器片も少量含むが、重複するS D 36からの混入と考えている。

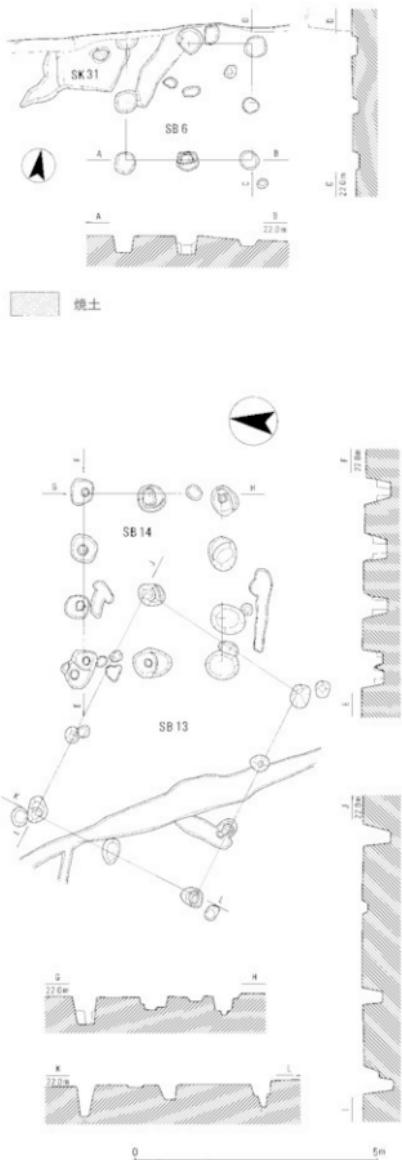
S K 21 調査区南端で検出した直径4mの円形土坑である。深さは検出面から15cm程度であるが、土



第7図 SH16カマド実測図（1:40）



第8図 SH3実測図（1:50）



第9図 SB 6・13・14、SK31実測図 (1:100)

坑内には直径1m程度の落ち込みが多数あり、多くの土坑が重複しているようである。土坑内からは奈良時代の土師器杯・皿・甕等が多数出土した。杯類には格子状の線刻があるものが多く含まれ、祭祀等に利用されたものが集中的にこの地点に投棄された可能性がある。

この地点では、包含層からも多量の土師器杯皿類の遺物の出土があり、焼土塊も含んでいた。遺構として検出面よりかなり上層から切り込んでいるものと考えられるが、包含層内で検出を試みたものの遺構として捉えることができず、包含層として処理した次第である。

S K31 (第9図) 調査区北端で検出した。調査区端での検出のため全体の形態は不明であるが、不整形を呈するものと考えられる。土坑中央付近に直径20cm程度の焼土の広がりを確認した。当初、堅穴住居を想定したが、不整形な形態のため土坑としておく。遺物の出土が無く、時期決定の根拠に欠けるが、SB 6に切られるため、これに先行するものである。

S K32 調査区北部、SD 8北側で検出した長径3m、短径2mの楕円形の土坑である。深さは検出面から25cmであるが、南半は円形に一段深く35cmである。土師器や製塙土器の小片が出土しており、根拠に乏しいものの、この時期とした。

S K37 調査区南部で検出した。長辺1.6m、短辺1.2mの長方形の土坑である。深さは検出面から10cm程度で土師器杯・皿類の小片が出土するに止まる。SK 38と接するが、切り合い関係からSK 38より後出のものである。

S K38 調査区南部で検出した。長径4m、短径1.2mの溝状の土坑である。深さは検出面から15cm程度で、土師器杯・皿、須恵器蓋等の小片が出土するのみである。SK 37と接するが、切り合い関係からSK 37より先行するものである。

S K39 調査区南端で検出した。長径1.2m、短径1mの楕円形の土坑である。深さは検出面から20cm程度で、土師器皿、須恵器小片等が出土するに止まる。

S K43 調査区南部、SK 37の北西側で検出した。長辺80cm、短辺20cm、検出面からの深さ5cm程度の

小土坑である。焼しを施さない平瓦片や土器器蓋小片が出土したのみである。

(4) 溝

S D 8 (第10図) 調査区中央部を東西に延びる溝であるが、西半と東半では大きく様相が異なる。

西側は幅2m、検出面からの深さ80cmを測る大溝で、壁は垂直ちかく立つ。西端の底に直径60cmほどの楕円形の土坑がある。底からさらに30cmほど落ち込み、土器器杯(133・134)が出土したが残存度が低く、埋納されたものとは思えない。現状ではこの土坑から湧水があり、緩やかに東へ向けて流れ出る。埋土は5層に分かれ、最下層は厚さ20cmの粘質土であるが、その上層は若干の砂質分を含む粘質で、弱い流水があったことを示す。その上が粘質土、さらには砂質土を含む粘質土、最上層が粘質土となり、弱い流水と渓みを繰り返し、自然に埋没していったようである。なお、西端近くでS D 28が注ぎ込む。

20mほど東進した地点で、急に幅60cmに狭まる。幅を減じた後も、深さは変化せず調査区外へ続いている。ただし、検出面が傾斜しているため、検出面からの実測深は40cmを測ることになる。埋土は黒褐色粘質土で分層はできなかった。

以上の状況から、清水が湧き出るS D 8は、井戸として利用できるものである。しかし、その形状は水を貯める施設のようにもみえ、これを利用した湧水の祭祀等が行われた可能性もある。しかし、祭祀を連想させる遺物としては、記号を付けた土器器が2点(135・136)出土したに止まる。他には意味不明の線刻を施した土器器の高杯(143)、墨書を施した土器器が2点出土しているが祭祀に関連付けることができない。また、溝が狭まる地点に堰等の施設も検出できなかった。

S D 28 調査区北西端で検出した。調査区外から若干蛇行しながら南下する。幅20cm程度であるが、深さは検出面から15cmを測る比較的深いものである。南下した先がS D 8と接するが、接続部分の幅が、40cmほど広がり、深さも30cmほど増すことから、S D 8に合流していたことが分かる。律令期の土器器小片が出土したのみで時期決定の決め手に欠けるが、上述した形状からS D 8へ流れ込んでいたものと考えられ、この時期とした。

(5) 墓

S X 40 (写真図版11) 調査区南東部で検出した小規模な土坑である。直径60cm前後の楕円形を呈し、深さは検出面から40cmちかくを測る深いもので壁は垂直にちかい。土坑内西寄りの検出面ちかくで須恵器蓋が正立状態で検出され、蓋の付近では焼土の広がりも確認された。このことから、蓋に須恵器が用いられた木製容器が埋納され、木製容器のみが腐滅したものと推測した。しかし、断面観察を行ったが、容器の痕跡は検出できなかった。なお、焼土は1mmほどの厚さがあるのみで、土坑内には混入しておらず、土器片の出土もなかった。また、埋土には薄い白色粘土層が断片的に混入していたが、これの意味するところは不明である。

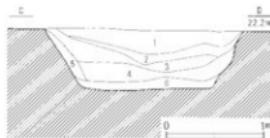
上述のように墓とする根拠は不十分であるが、一応ここで報告する。

2. 平安時代の遺構

掘立柱建物14棟、柱列1条、井戸2基等を検出した。掘立柱建物と井戸で構成される集落跡の様相を呈し、最も盛行する時期である。

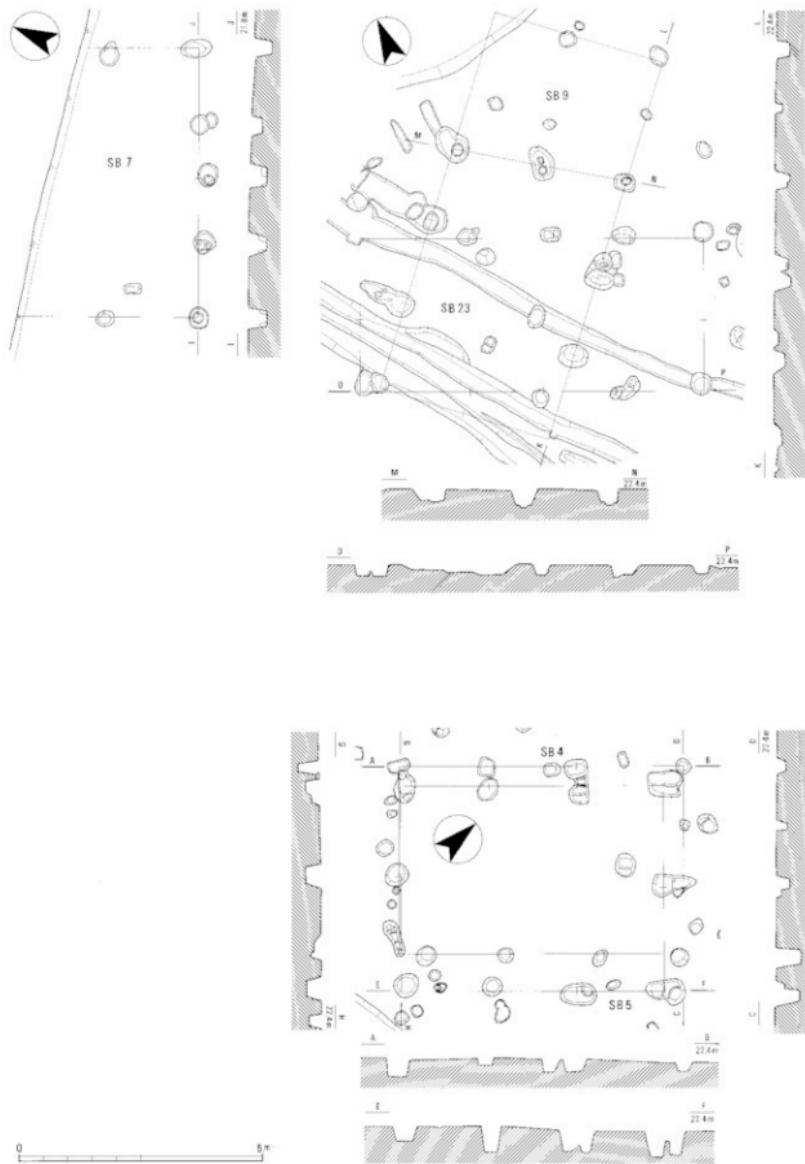
(1) 掘立柱建物

S B 4 (第11図) 調査区北西部で検出した3間×2間の南北棟と考えられ、S B 9、S B 15と棟方向を揃える。同様な規模のS B 5と重複し、建替えの関係にあるものと思われ、S B 5に先行する建物である。桁行柱間は東西で異なり、掘形も一辺30cmの方形のものから円形、長方形、長円形と様々で統



1. 黒褐色粘質土
2. 黒褐色粘質土に黄色砂質土多く混入
3. 黑褐色粘質土
4. 黑褐色粘質土に黄色砂質土混入
5. 黄灰色粘質土
6. 黑褐色粘質土

第10図 SD 8 断面土層図 (1:50)



第11図 SB 4・5・7・9・23実測図 (1 : 100)

一を欠く。北側梁行柱筋に直径20cmの小規模な柱穴があるが、この建物に属するものかどうかは不明である。掘形が他のものと比べ非常に小規模であるため、ここでは当建物とは無関係とした。

東側側柱筋の北端の柱穴から黒色土器の榠(180)が出土している。底部完存で、完形ではないものの他のものより残存度が極めて高く、故意に埋められた可能性もある。

S B 5 (第11図) 調査区北西部で検出した3間×2間の南北棟と考えられ、S B 4を建替えたものと思われる。柱掘形は一辺40~50cmの方形または円形を呈するものが多く、不揃いではあるものの桁行柱間は1.8mの等間に整えられている。南西角の柱穴に沿う位置で小石を検出した。自然石を含まない土壤での検出のため何らかの意味を推測したいが、柱根に添えられていた可能性があるものも確認を欠く。

S B 7 (第11図) 調査区北端で検出した。北端が調査区外のため全体の形態は不明であるが、4間×2間の東西棟と推測した。桁行の柱間は両端が1.5mであるが、他は不等間である。掘形は一辺40~50cmの方形または円形で、当遺跡では比較的大型のものである。柱筋から外れるものもあるが、直径20cmの柱痕跡を3基の柱穴から検出している。

律令期の土師器小片が出土したのみで、この時期とする根拠に乏しいが、奈良時代のものとは方向や形態が明らかに異なるため、一応、平安時代として扱う。

S B 9 (第11図) 調査区西部で検出した3間×2間の掘立柱建物である。南北棟で、北側には庇が付くものと思われるが、他の遺構との重複等により検出できなかった柱穴も多く、不明確な部分も多い。

桁行柱間は不等間で、しかも東西で桁行長が異なり歪んだ平面形を呈するが、柱掘形は一辺40~50cmの方形または不整形形を呈する。当遺跡としては大型のもので、直径20~25cmの柱の沈下痕跡を検出できたものもある。

柱掘形からは、奈良時代と考えられる土師器片も多数出土しているが、棟方向をS B 4・5、S B 15と揃えることから一連の遺構と考えた。

S B 10 (第6図) 調査区中央部で検出した桁行3間×梁行2間の東西棟の掘立柱建物である。柱掘

形は形の乱れたものもあるが、直径40cm前後の円形または梢円形を呈する。深さは検出面から30cm程度を測るが、桁行の一部には10cm前後の浅いものもある。東側1間分には間仕切がある。

平安時代と思われる土師器小片が出土しており、近接するS B 12、S B 23と棟方向を揃えるため、この時期とした。

S B 11 (第12図) 調査区中央部で検出した3間×2間の東西棟である。柱掘形は、一辺30~40cmの方形にちかい円形を呈し、柱間は桁行・梁行とともに不等間である。

S B 12とは棟方向を違えるものの同様な規模であり、建替えの関係にある可能性がある。南東角の柱穴が重複し、その切り合いからS B 12に先行するものと考えられるが、確認はない。

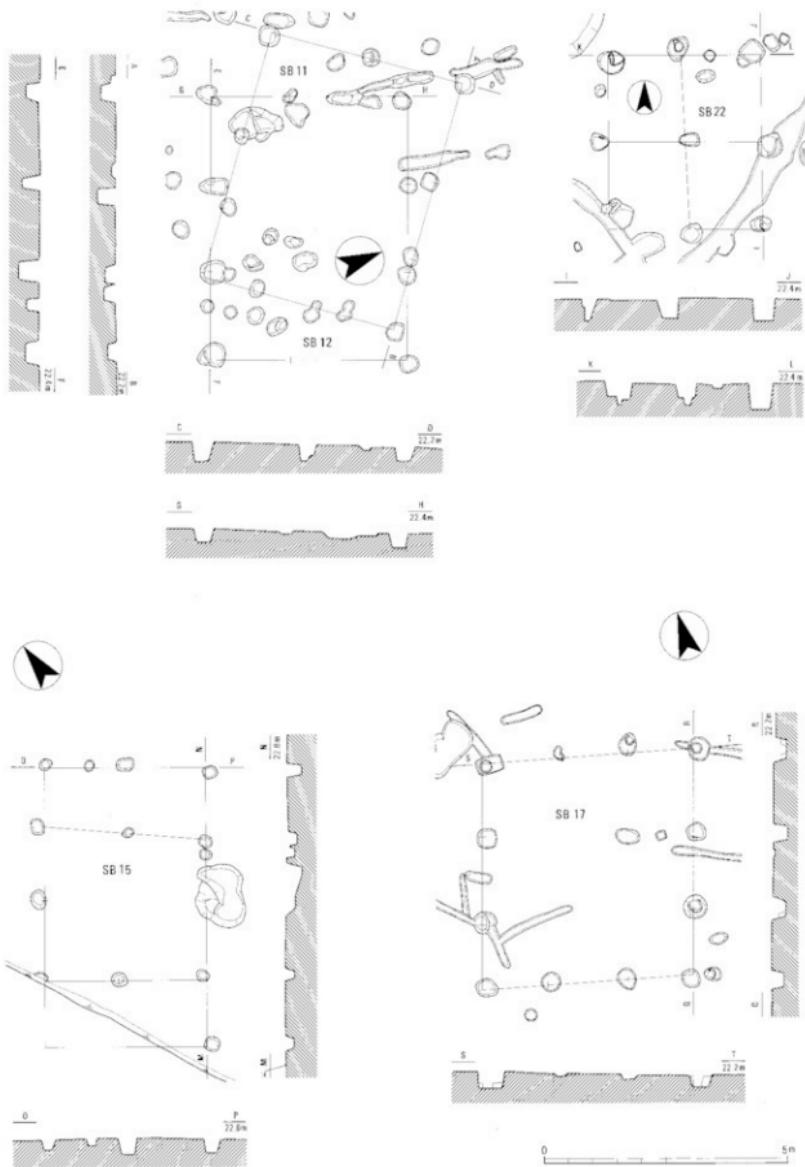
S B 12 (第12図) 調査区中央部で検出した3間×2間の東西棟である。柱掘形は、一辺35~45cmの方形にちかい円形を呈し、桁行柱間は1.8mの等間である。梁行柱間は不等間であるが、東側の妻柱は検出できず、西側のものも小型の不整形なもので浅く、妻柱とするに疑問の残るものである。西側梁行の柱筋には他にも柱穴があり、3間とする可能性も考えられなくなく、梁行についてはひとつ可能性を示すに止める。

前述したようにS B 11とは建替えの関係にあるものと推測され、S B 11を若干規模を大きくして建替えられたものと推測する。平安時代の土師器片や黒色土器片が出土しており、近接するS B 10、S B 23と棟方向を揃える。

S B 13 (第9図) 調査区西部で検出した3間×2間の東西棟である。柱掘形は、直径30~40cmの円形または不整形形を呈する小型のものであるが、検出面から60cm以上掘り込まれている。ただし、北側桁行に極端に浅く小型のものがあり、柱穴とするに疑問も残す。柱間は桁行・梁行とも不等間で桁行長が南北で異なる歪んだ形態である。

平安時代末期に降る土師器皿(189・190)が出土しているが、やや離れるもののS B 12と棟方向を揃える。

S B 15 (第12図) 調査区南西部で検出した。調査区外へ続く可能性もあるが、4間×2間の南北棟



第12図 SB11・12・15・17・22実測図 (1 : 100)

とした。柱掘形は、直径30cm前後の円形または方形を呈する不揃いなもので、柱間も不等間である。北側と南側の1間分に間仕切が認められる。しかし、南側の東柱掘形は側柱掘形と同様な規模であり、また、南東角の柱が柱筋からやや外れるため、これを別建物の柱穴とすれば、3間×2間の南北棟とする見方もできる。いずれにしても当遺跡のものとしては小型の部類であり、雑舎的な建物であったものと推測する。

S B 4・5、S B 9と棟方向を揃えており、S B 9東側桁行の延長上にS B 15の妻柱が位置する。このため、出土遺物は皆無であるが、この時期とした。

S B 17 (第12図) 調査区南部で検出した3間×3間の掘立柱建物である。棟方向は不明であるが一応、東西棟としておく。柱掘形は、一辺40cm前後の方形または円形を呈するが、長方形のものや不整円形のものもあり不揃いである。柱間も桁行・梁行ともに不等間で疊んだ平面形を呈する。したがって、建物とするに疑問とする選択肢もあるが、造構密度の薄い地点で柱列状に検出できたものであり、掘立柱建物として相違ないものと考えている。柱痕跡を検出できたものもあり、直径20cm程度の柱であったようである。

律令期の土師器小片が出土しているものの時期決定の根拠に乏しい。やや離れるもののS B 12と棟方向が概ね直交するため、この時期とした。

S B 22 (第12図) 調査区北西端で検出した2間×2間の総柱の南北棟と考えられる。柱掘形は、一辺45cm前後の方形または不整円形を呈する不揃いなものである。柱掘形の底部が部分的に沈下しているものがあり、柱の重圧による沈下と推測される。このことにより、柱の直径は20cm程度のものであったことが分かる。梁行の柱間は北側と南側で異なり、南西角の柱穴は検出されていない。S D 28により欠損したものと考えるが、S D 28は20cm程度の深さしかなく、溝底に痕跡が求められてもよいものと思われる。近隣に同様な規模の柱穴状造構があるが、これを柱穴とする柱通りが悪く、相当疊んだ建物とせざるを得ない。現状においても柱通りが悪い状態ではあるものの、南西角の柱穴はS D 28により消滅したものとしておきたい。

出土遺物が皆無で、他に類似する棟方向をもつ建物もなく、時期決定の根拠を持たない。しかし、柱掘形の埋土の状態から中世に降ることはないと考えられる。奈良時代とする可能性も残るが、柱掘形の規模に対する柱間が狭い当遺跡の奈良時代の建物の特徴に合致しないため、平安時代のものとして扱う。

S B 23 (第11図) 調査区西部で検出した桁行4間の東西棟である。妻柱は検出できず、梁行の柱間は不明であるが、一応2間としておく。桁行柱間は不等間で、柱掘形は、直径40cm前後の円形または不整楕円形を呈する不揃いなものである。柱穴も他のものより比較的浅く、建物として疑問も多い。しかし、S B 10、S B 12、S B 13と棟方向を揃えており、一応、可能性として建物としておく。

S B 24 (第6図) 調査区中央部で検出した桁行3間×梁行2間の東西棟である。柱掘形は直径35cm程度の円形を呈する小型のもので、深さも検出面から20cm程度の浅いものである。柱通りも悪く、建物とするに疑問も残るものである。

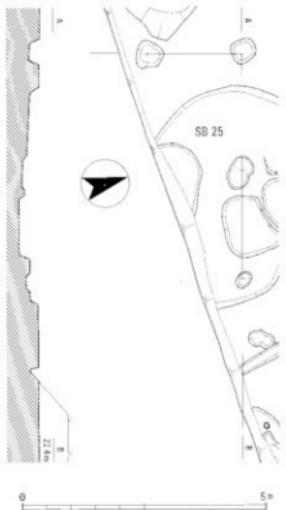
律令期の土師器片が出土するものの時期決定の根拠が乏しい。棟方向はやや異なるもののS B 10、S B 12、S B 23等と建物の形状や大まかな棟方向が揃うため、この時期とした。

S B 25 (第13図) 調査区南端で検出した。調査区端での検出のため、全体の形態は不明であるが、桁行3間以上×梁行2間以上の東西棟と推測する。S K 21との重複のため不明確な部分もあるが、一辺50cm前後の方形を呈する柱掘形をもち、柱間も長く、今回検出した掘立柱建物のなかで最も大規模なものである。

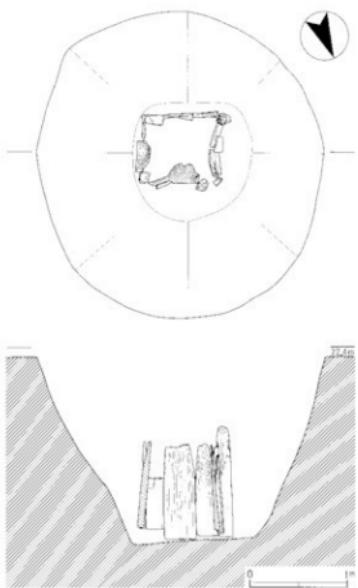
出土遺物が皆無であるが、S B 12、S B 23等と概ね棟方向を揃えるため、一応、この時期とする。

(2) 柱列

S A 41 調査区南東端で直径20~30cmの小型の柱穴状造構が南北方向に帯状に群集する。この方向は、平安時代の建物群の方向と大きく矛盾するものではなく、集落の境を限る柵列のようなものを可能性として想定した。柱穴の分布状況から柵列は整然としたものではなく簡易なもので、何度も建替えや部分改修が行われた結果と推測する。奈良時代の遺物が出土するもの多いため、前述した状況や、平安時代



第13図 SB25実測図（1：100）



第14図 SE 1 実測図（1：50）

に降る遺物が出土したものもあることから、この時期とした。特に、ほぼ完形の土師器皿（186）が出土したものもある。

（3）井戸

S E 1（第14図） 調査区北西端で検出した。掘形は直径3mの円形を呈する。埋土は黒褐色の有機質土、検出面から45cmで湧水点に達する。検出面から1.7mほどで直径20cm程度の小石の混入が多くなり、検出面から1.8mで小石と砂質土の混在する良く締まった土層に達し、ここを底と判断した。掘形の壁面は、比較的緩やかな傾斜をもち、底部では一辺1mの不整形の平面形を呈することになる。この上面に木製の井戸枠が残存していた。枠板は、縦方向に直接底に差し込まれ、一辺80cmの方形を形成している。幅30cm程度の板を一辺に2枚配置するが、一枚の幅は不統一である。四隅には角材を配置するが、西隅は丸太、南隅は幅20cm、厚さ10cmの長方形の材で、これも不統一である。丸太にはホゾ穴状の窪みもあり、有り合わせの材で組上げた様子がうかがえる。これら四隅の材は立板の固定に機能していたものと推測されるが、横棟の存在を示すものは検出できなかった。また、底部が疊層のためか、井戸底に石敷等を施した様子も認められなかった。

S E 20 調査区南端で検出した直径1.8mの円形を呈する。埋土は黒褐色土で分層は不可能であった。礫を含まない埋土であるが、長径30cmの石が数個、混入していた。しかし、遺構との関係は認められない。検出面から1.5mほど掘り下げたが、湧水が激しく崩落の危険があるため完掘を断念した。S E 1 の深さとの比較により、底近くまで掘削できたものと考えているが、井戸枠等の施設は検出できなかった。S E 1 と比較すると掘形が一回り小さく、壁も垂直にちかいため、元来、井戸枠等の施設は無く素掘りの井戸であったようである。土師器や黒色土器等が出土したが、いずれも小片で、埋納されたものは検出できなかった。

（4）土坑

S K 42 調査区北端で検出した長径80cm、短径40cmの不整形な小型の土坑であるが、検出面からの深さは40cmを測る深いものである。1/2残存の土師器皿（175）が出土しているが、埋納されたものと

は思えない。

(5) 溝

S D36 調査区南部で検出した。幅20cmであるが検出面からの深さは15~20cmを測る深いものである。調査区外から蛇行して北上し、S B24等の建物群へ向かう様子を示しながら途絶える。したがって、これららの建物群の排水に関係する溝かもしれない。

奈良時代の遺物を多く含むが、重複するSK19等からの混入と考えられる。

3. 中世の遺構

検出したものは全て溝である。下記に示すもの他に東西、南北に延びる小溝が並列し、耕作に伴うものと推測される。また、出土遺物が少なく、詳細な時期決定が困難なものが多い。

S D26 調査区北西端で検出した幅20cm、検出面からの深さ5cm程度の浅い溝である。調査区外から南下しSE1の掘形を巻き込むように進み途絶える。埋土も黒色土で奈良~平安時代のものと相違なく、当初はSE1との関連を想定した。しかし、中世の土師器鍋・皿片が出土していることから、これと無関係と判断した。むしろ、これと直交するかのごとく延びるSD27とは規模や埋土も類似するため、これと同時期の室町時代とした。

S D27 調査区北西端で検出した幅20cm、検出面からの深さ5cm程度の浅い溝である。調査区外から西進しSD26を意識するかのように40cmほど手前で突然止まり、これと何らかの関連が推測される。埋土は黒色土で奈良~平安時代のものと相違ないが、施釉陶器小片が出土しているため、室町時代に属するものと考えられる。

S D29 調査区中央部で概ね直角に向きを変える溝である。南北両端ともに徐々に深さを減じ、消滅しているが、本来は調査区外へ続いていくものと推測される。幅40cm、検出面からの深さ10~30cmで、屈曲部分が最も深くなっている。少なくとも4条の溝が重複しており、同じ箇所で何回か掘りなおされているようである。屈曲する状況から何かを区画していた可能性もあるが、他に関連する遺構はなく、既述した性格をもつとしても耕作に関連する区画を表しているものと思われる。

中世の遺物としては山茶碗小片が出土しており、鎌倉時代に属するものとしておく。

S D30 SD29の東側におよそ1.4mの間隔を空けて併走する溝である。規模も類似しており、SD29と同じ性格のものと考えられる。

S D33 調査区東部で検出した幅20cm、検出面からの深さ10cm程度の小規模な溝である。2本の溝が重複した状態でU字状に延びる。中世を示す遺物は出土していないが、埋土が暗褐色土であるためこの時期と思われる。伊賀市「羽根中島遺跡」でもU字状に延びる耕作痕が検出されており、SD33もこれと同様に耕作に伴うものと考えられる。

S D34 調査区東部で南北に16mほど延びる溝である。幅20cm、検出面からの深さ10cm程度を測る。耕作溝群とは方向を違え、規模もやや大きいかどちら耕作溝と断定できない。出土遺物はないが、埋土の状況から中世に属するものと考えられる。

S D35 調査区東部を南北に延びる溝である。調査区外から17mほど北上し、SD33と重複して止まる。埋土の観察からSD33に先行するものであることが分かる。規模・特徴はSD34に類似し、同様にその性格は不明である。律令期の土師器小片が出土しているが、埋土の状況から中世に属するものと考えられる。

【註】

- ① 三重県埋蔵文化財センター『羽根中島遺跡発掘調査報告』2001.3

V. 遺 物

今回の調査で出土した遺物は、縄文時代・古墳時代～室町時代のものがあるが、奈良時代と平安時代前半の土師器杯・皿類が多くを占める。中でも奈良時代のものが中心で、その大半がSK21及びその付近の包含層から出土している。さらに、これらには記号を付けるものが多く確認できる。

1. 奈良時代の遺物

今回の調査で出土した遺物の中心はこの時期のものである。堅穴住居、土坑からまとめて出土している。

(1) SH3出土遺物（第15図）

堅穴住居と推測する土坑埋土からの出土である。埋土上端を焼土層が覆っており、一括性は比較的高いものと考えられる。

1～5は土師器の杯、6は皿、7は椀、9は高杯、10～15は甕である。杯には深いもの（1・2）と浅いもの（3・4）があるが、全て底部外面をヘラケズリで調整する。1は内面に放射及びラセン暗文、外面を工具ナデとするが、一部ハケメ状を呈している。外面全面をヘラケズリで調整する意向であったものと思われる。5は高台の付くものである。摩滅が激しく調整等が不明瞭で、須恵器の酸化焼成の可能性も残る。6は小片のため、口径を16cmと仮定し図化した。底部外面は未調整であり口縁部も外傾し、新相を示す。9の外面のヘラケズリは意識としてはヘラミガキだが、ヘラの当たりが強く、結果的にヘラケズリとなっている。11の外面はナデとしたが、ハケメをナデ消している。

8は製塙土器、16～20は須恵器である。須恵器には、蓋（16・17）、杯（18）、甕（19）、鉢（20）がある。18の底部外面はロクロケズリで調整され、16と対になる可能性がある。

(2) SK18出土遺物（第15図）

図示できたものは土師器の杯（21～24）、皿（25・26）、甕（27）である。杯は口径に対して器高が高いものが多いが、22は小片のため口径を18cmに仮定して図化を行った。21の内面調整はヘラミガキとし

たが、放射暗文施文時のヘラの速度が非常に遅いため、放射暗文とするには勢いのないものになっていく。22の内面にも暗文があるようだが、摩滅により不明確である。

25は小片のため口径を20cmに仮定して図化を行った。26の口縁端部外面には沈線が施されるが、極めて浅いものである。また、内面には焼成後、鋭利な工具により不定方向に沈線が刻まれるが、その意味するところは不明である。

(3) S X40出土遺物（第15図）

埋納遺物の須恵器蓋（28）である。口縁端部の屈曲部外面を板状工具により強く面取り状にヨコナデする。

(4) SK32出土遺物（第15図）

土師器の皿（29）、甕（30・31）、須恵器の杯（32）を図示し、他に製塙土器の小片が出土している。

29の底部外面はヘラケズリ、31の内面はナデで調整される。32は受部をもつ杯で、前代の混入と考えられる。一見、底部外面を一周ロクロケズリを施すようにみえるが、ヘラ切りの際の最初の当たりがロクロケズリ状になったものと考えられ、改めての調整とは考えられない。

(5) SK2出土遺物（第16図）

土師器の杯（33）、皿（34）、高杯（35）を図示したが、いずれも残存度の低いものである。34・35は摩滅が激しく、調整が不明確である。

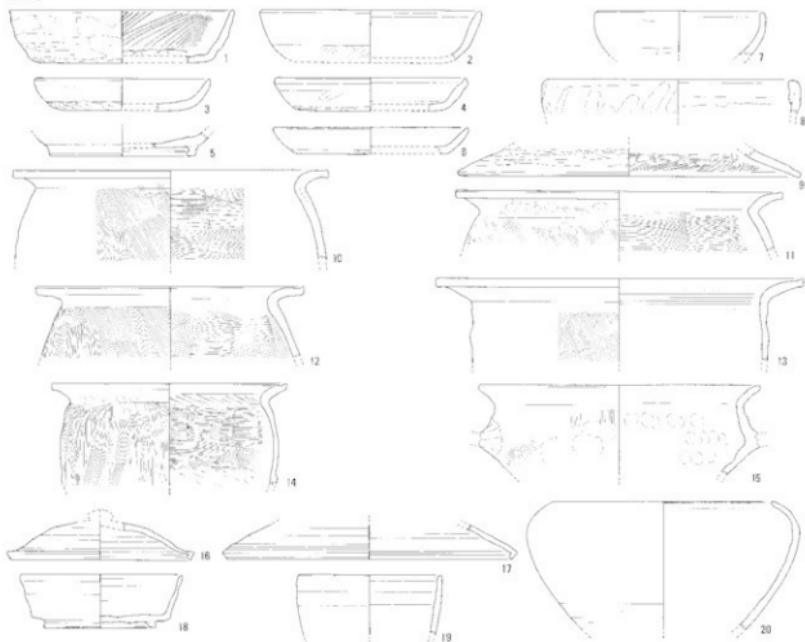
(6) SK19出土遺物（第16図）

土師器杯・皿・椀・甕、製塙土器が出土したが、土師器杯・皿類は他の遺構に比べ非常に少ない。しかも、残存度の低いものであり、図化できたものは土師器の杯（36）、皿（37・38）である。36の口縁部ヨコナデは、下段が非常に弱く、指頭圧痕が残る。37の底部外面はヘラケズリで調整されるに対し、38は未調整である。

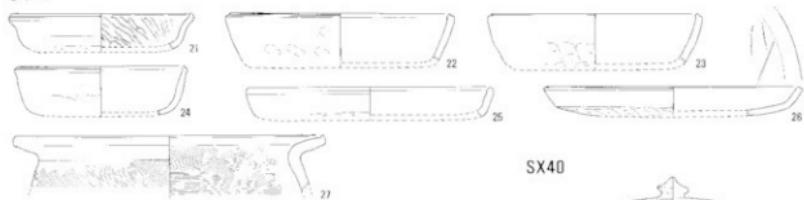
(7) SK38出土遺物（第16図）

土師器甕（39）と須恵器蓋（40）を図示した。39は小型の甕であるが、他に長胴甕片も出土している。40は還元がやや不十分である。

SH 3



SK 18



SX40



SK 32



0 20cm

第15図 SH 3、SK18・32、SX40出土遺物実測図（1：4）

(8) SH16出土遺物（第16図）

出土遺物のほとんどが土師器であり、カマド近辺から残存度の良好なものが出土している。41は土師器の杯、42～47は土師器の甕、48は土師器の羽釜、49は須恵器の壺である。

41は、カマド内出土で、底部外面のヘラケズリと口縁部外面のヨコナデを同一工具により同一工程で行っている。ヘラケズリがヨコナデに先行する箇所もあれば、その逆もある。

42は小型の甕であるが、肩の張る体部形を呈し、後代に通じる特徴が現れている。43～47は長胴甕と思われ、47は今回の調査で全体の形態が分かる唯一のものである。粘土紐の接合痕やハケメの変換点から体部を3段階に分けて作成したことが分かる。43の体部外面はハケメをナデにより消している。

48は一応、土師器の羽釜としたが、疑問も多いものである。一見、やや胎土が粗いものの中世の羽釜として差し支えない。しかしカマド内からの出土で、混入が想定し難い出土状況である。この時期のものとしては、斎宮跡SK5200から鰯付の筒状土師器が出土し、津市の六大A遺跡からも類似品が出土している。しかし両者の口径は20cm程度であるが、当遺跡のものは40cm以上を測り、中世後期の羽釜のそれにはちかい。畿内地方では長胴甕に鰯を付けた形状の羽釜が報告されている。それらの多くは口径が20cm程度のものであるが、大阪府柏原市の高井田遺跡井戸2からは飛鳥時代の口径が40cm以上を測るものが出土している。³⁾ 48がこの形式の羽釜である可能性もあるが、いずれとも断定し難い。48が鰯部分の小片であることもあり、結論は保留しておく。

(9) SK21出土遺物（第17・18図）

多量の遺物が出土したが、多数の土坑が重複した遺構であり、その一括性は乏しいとせざるを得ない。大半が土師器の杯・皿類で、須恵器の出土は極めて少なく、杯皿類の多くに「#」または格子状の記号が付けられている。

土師器 50～82は杯である。口径19cm前後の大型のものと口径15cm以下の比較的小型のものに分かれると、明確な法量分化を示していない。50・51は口径に対し器高が高く古相を示すものである。両者とも内面をヘラミガキするが、51は放射暗文風を呈し

ている。対して69・70・82等は外頬が大きい口縁部で器壁も薄く、これらの中では新相を示すものである。73の口縁端部外面には沈線が巡るが、浅いためか途中で切れている。74も同様に沈線状のものがあるが、摩滅のため不明確である。64の口縁端部は、成形が一旦完了した後、5mmほど繙ぎ足されて形成されており、接合部分が沈線状に残っている。

底部外面の調整は、一部摩滅のため不明瞭なものもあるが、73・74・80・82がナデの他は全てヘラケズリである。ただし、ケズリの範囲は多様であり、50・78が口縁端部まで外面全体にヘラケズリを施すのに対し、55・56は口縁部から底部への屈曲部付近の円周状の範囲のみをヘラケズリしている。77はヘラケズリの範囲が狭いため、指頭圧痕が残る範囲が口縁部下端に見える。76が非常に丁寧にヘラケズリするのに対し、65・66のヘラケズリは浅く弱いものである。特に66は、摩滅が激しく不明確であるが、むしろナデとしたほうが良いかもしない。63も一応ヘラケズリとしたが、摩滅が激しく不明確である。板上で作成した際の圧痕の可能性もあり（写真図版14）、そうであれば未調整とすべきだが、器形も古相を示すため、ここではヘラケズリとしておく。

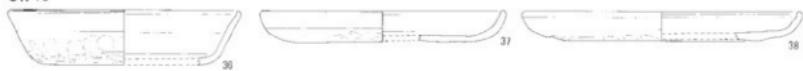
内面の調整は、記述したように50・51がヘラミガキ、他はナデであるが、53・65・67・68・81にはラセン暗文が認められる。ナデを工具により行った痕跡を示すものもあり、62の工具幅は8mmである。58の内面は工具により丁寧に仕上げられ、52の口縁部外面は工具により2段にヨコナデしている。特に上段のナデは非常に強い。82の口縁端部内面は棒状工具による強いナデのため沈線状になっている。

焼成後、鋭利な工具により線刻を施すものが多くあり、56・66・68は「#」を底部内面に施している。他にも55・67・76・81の底部内面にも同様な線刻があり、破損のため全体の形態は不明であるが、おそらく「#」を表すものと推測される。61・75の内面、69の底部外面にも直線状の線刻を確認できるが、「#」の一部かどうか不明である。81は内面に加えて外面にも線刻がある。しかし、外のものは他のものと異なり、「#」にはなり得ず、不定形なものである。54の内面にも不規則な直線状の細い線刻が多数重なるが、記号とは思えない。63は摩滅により

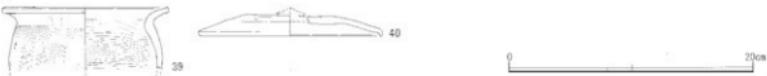
SK 2



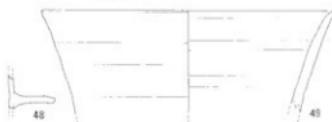
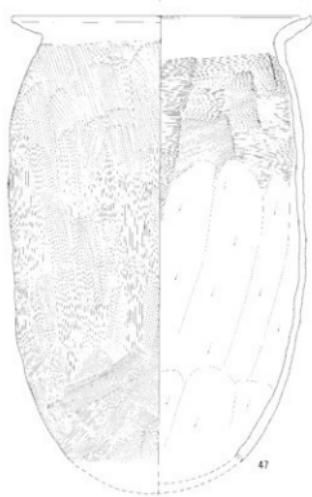
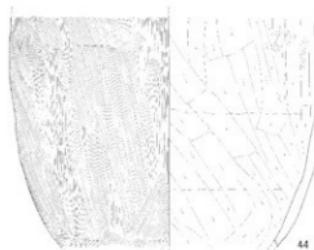
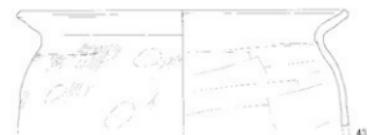
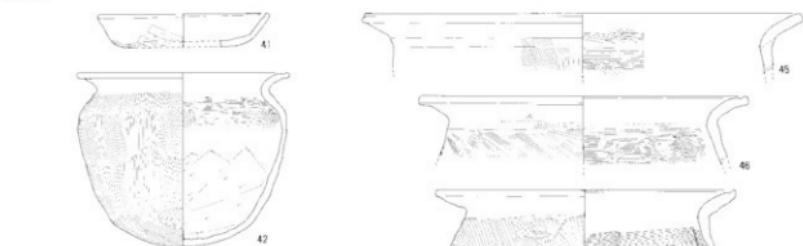
SK 19



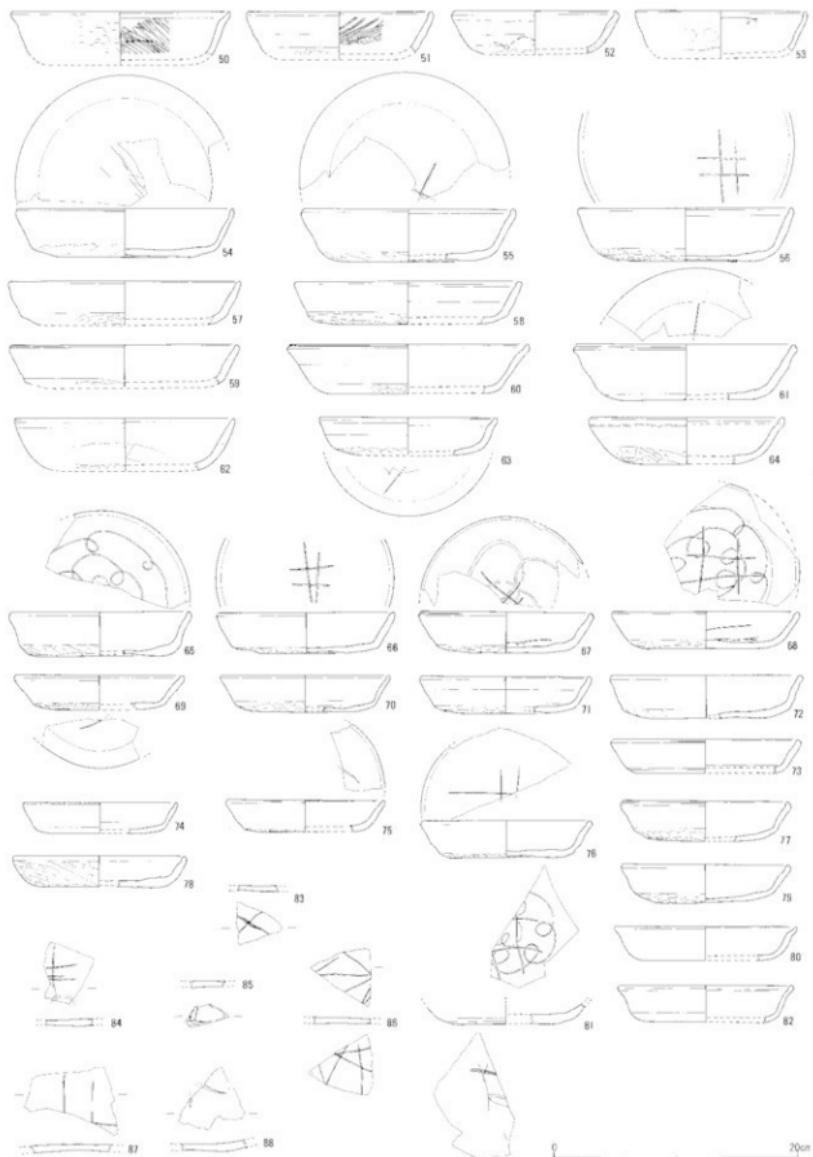
SK 38



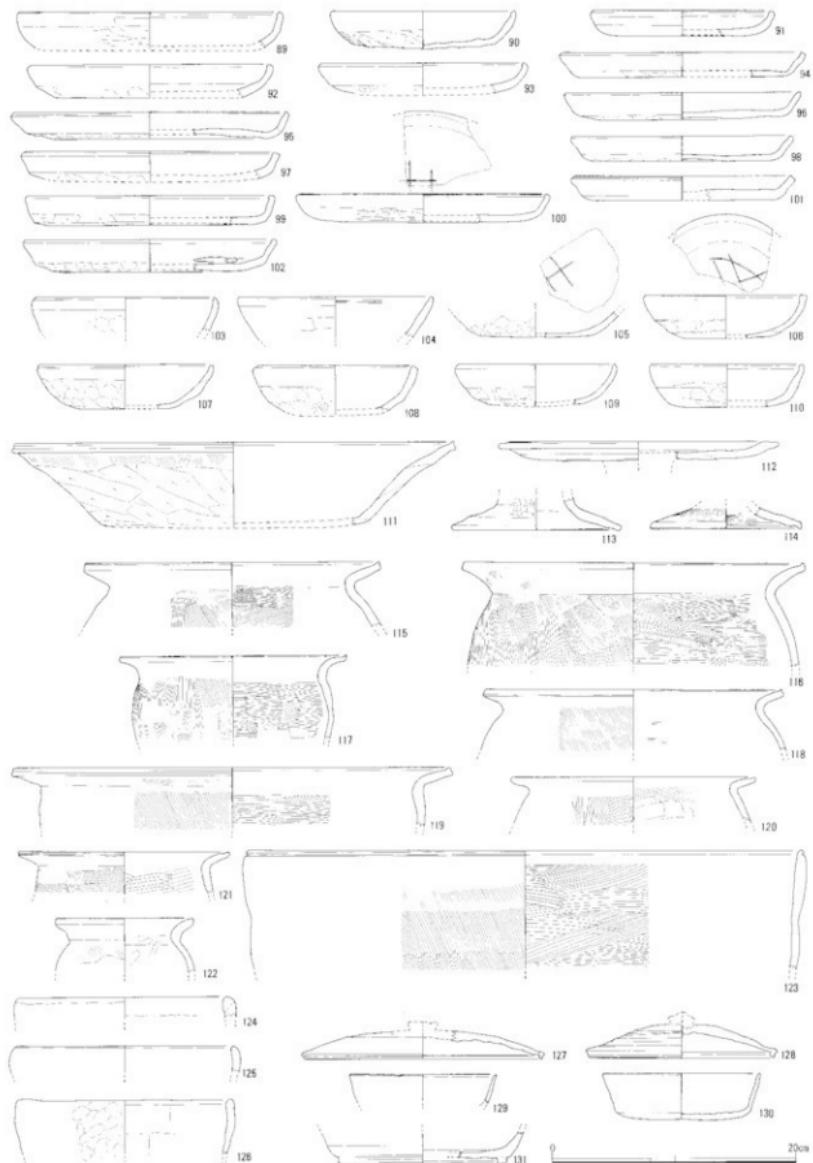
SH 16



第16図 SK 2・19・38、SH16出土遺物実測図（1：4）



第17図 SK21出土遺物実測図（1：4）



第18図 SK21出土遺物実測図（1：4）

不明確であるが、焼成前に施された直線状の浅い沈線がある。一応図示したが、記号というよりは植物圧痕の可能性も高いものである。

83～88は記号が付けられた小片である。器種を確定することができないが、一応、杯として扱う。記号は、「#」と推測できるものが多いが、86は内外面に複雑に交差する線刻を施す。85は小片のため調整が不明確である。内面へラミガキ、外面へラケズリとして、外面に線刻されるものとしたが、内外面ともナデ調整の可能性もあり、線刻が内面とする可能性も若干残る。焼成後に鋭利な工具により線刻されるものが多いが、84は焼成前に施されている。

89～102は皿である。底部から内窯して立ち上がる口縁部をもつものの（89～93）と屈曲して立ち上がるものの（94～102）がある。前者には口径15cm～17cm程度の小型のものがある。95の口縁端部外面には浅い沈線があるが、一周しない。89の口縁端部外面では指による強いヨコナデのため凹線状となるが、これも一周することはない。底部外面は未調整のものが多いが、89・90・99・100・102はヘラケズリで調整する。102のヨコナデはヘラケズリ範囲まで及んでおらず、両者の間には指頭圧痕が残る。96の底部内外面のナデは工具によるものであることが分かる。100の底部内面には焼成後、鋭利な工具により記号が施されている。おそらく「#」を表すものであろう。

103～110は粗製の椀である。104の口縁端部内面には二叉状工具による沈線が施されるが、一周していない。外面は工具によるナデとしたが、浅いへラケズリとすることも可能である。108の口縁端部外面にも浅い沈線があるが、やはり一周しない。また、底部外面の一部にヘラミガキが観察される。106の口縁上端は浅い凹線状となるが不明瞭である。109の外面の指押さえは、器壁が薄いために内面に影響し、器形が重なものとなっている。粗製椀にも底部内面に記号を施したものがある。記号の全体形は不明であるが、105は「#」、106は「#」に○を重ねたものと推測される。

111は盤、112～114は高杯である。114は全体をナデで調整するが、ハケメが多く残る。

115～122は甕、123は瓶である。いずれも口縁部付近の破片であるため、全体の形態は不明であるが、

116・119は長胴甕の可能性が高いものと思われる。いずれもハケメにより調整されるが、122のみ未調整やナデで、ハケメは施されない。121の頸部屈曲部は特に強いヨコナデが施され、凹線状となっているが、ハケメとの前後関係から成形時のものと考えられる。

製塙土器 124～126は図化したが、124・125は小片のため口径を推測できず、18cmと仮定しておく。いずれも内面のみをナデで調整するが、126は工具によるものであることが分かる。

須恵器 須恵器で図化できたものは5点のみである。127・128は蓋で、両者ともつまみを欠損している。128の天井部外面のロクロケズリは弱く、板ナデ状である。

129～131は杯である。130は高台をもたず、131には付けられる。底部外面の調整は、前者がロクロケズリであるのに対し、後者は未調整である。129の口縁部には棒状の圧痕がある。製作過程の乾燥時に他の個体との接着防止工具の圧痕と推測される。

(10) SD 8 出土遺物 (第19回)

出土の中心は土師器で、墨書き器や墨痕のあるものがある。

132～136は土師器の杯であるが、135は小片のため器種を確定できない。口径は15cm～18cmまで多様であるが、136を除き、底部外面をヘラケズリで調整する。しかし、その範囲は底部から口縁部への屈曲部付近に限定したものである。132と135には内面にラセン暗文が認められ、135は内面に線刻、外面に墨書きが認められる。小片のため線刻の表すものは不明であるが、墨書きは「世」と読める。線刻は136の内面にも焼成後に刻まれ、「#」を表す。134の外面には焼成前に刻まれた直線状の記号がある。133の底部外面にも墨痕が微かに認められるが、判読できない。

137～139は土師器の皿である。137・139の口縁部のヨコナデは板状工具により行われている。139の底部外面には墨書きがあり、「世」と読めなくもないが、他にも墨痕が認められるので、旁の一部か2文字以上の可能性がある。

140は土師器の粗製椀である。口縁部下端に1条の沈線がみえるが、板状工具でヨコナデを施した際に

工具端の当たりが沈線状になったものと考えられる。

141～143は土師器の高杯である。141は杯部内面にラセン暗文を施し、外面のヘラケズリは工具ナデ風の浅いものである。143の外面には、焼成前に二又状工具による浅い2条の蛇行する沈線を施し、焼成後に鋭利な工具による非常に細い線刻を不定形に多數しているが、その意図するところは不明である。

144・145は土師器の甕、146・147は土師器の鉢である。144の頸部屈曲部は非常に強くヨコナデされる。146の体部内面上半は板状工具によるナデであるが、下端は同様な工具によるヘラケズリである。147の調整は外面とともにナデとしたが、摩滅が激しく不明確である。

148～150は須恵器で、148は蓋、149は長頸壺、150は壠である。149には櫛による刺突文と沈線が施されるが、頸部下端の沈線は二又状工具による浅いものである。150は前代からの混入と考えられる。体部の沈線は鋭さに欠ける。

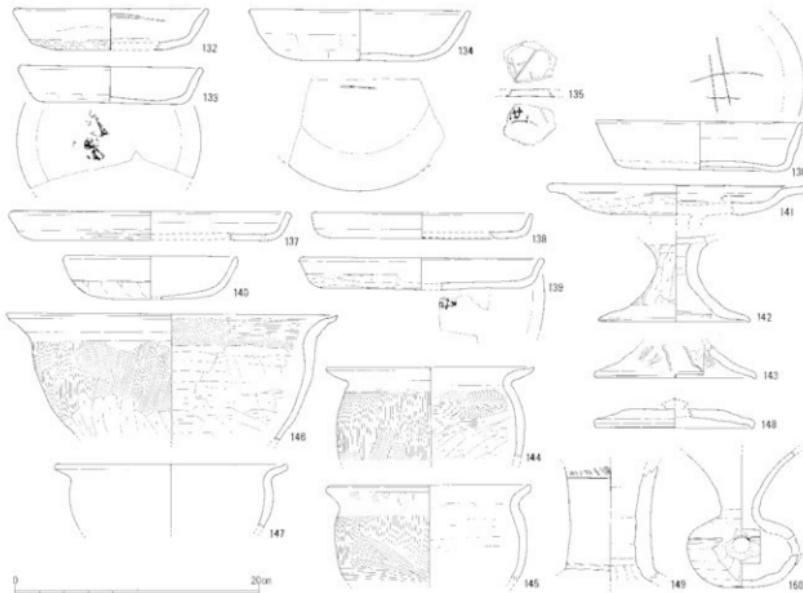
2. 平安時代の遺物

(1) S E 1 出土遺物 (第20図)

土師器の杯・碗・高杯・甕、製塩土器、須恵器、灰釉陶器が出土しているが、完形またはそれにちかいものはない。出土遺物の大半が土師器の杯や甕である。

151～157は土師器の杯、158は土師器の粗製碗である。杯は口径14cm前後のものであるが、156は大型である。底部外面が未調整のものが多いが、151はヘラケズリを施し、口縁部も内窓気味であることから、前代からの混入と考えられる。153の口縁部は底部から屈曲気味となるほど強くヨコナデされており、152とともにやや古相を示す。

159～162は土師器の甕、163は土師器の高杯である。いずれも残存度が低く、全体の形態が分かるものは161のみである。肩の張る体部で、外面下半をヘラケズリ、内面を板状工具によりナデを施す。160の内面は板ナデ状の非常に細かいハケメである。163



第19図 SD 8出土遺物実測図 (1 : 4)

は長脚化しておらず、脚部に面取り状のヘラケズリを施す。

164は製塙土器、165は灰釉陶器の壺、166は須恵器の椀である。164は小片のため、底部径を17.8cmに仮定して図化を行った。

(2) S E 20出土遺物（第20図）

土師器、須恵器、黒色土器等が出土しているが、いずれも小片で、混入も多い。

167～170は土師器で、167は杯、168・169は皿、170は甌であるが、169以外は前代の混入と思われる。167は全体的に丁寧な仕上げで、内面には細かいラセン暗文が僅かに認められる。

171は黒色土器の杯である。A類で、内外面共にヘラミガキで調整されるが、外面はヘラケズリの後に施している。

172は須恵器の杯、174は壺か甌、173は埴輪である。174は小片のため、頸部径を23.4cmに仮定して図化を行った。やや酸化焼成氣味である。173は明らかに混入である。円筒埴輪と考えられ、外面に粗く深いハケメを施す。酸化焼成しているが、硬質である。

(3) S K 42出土遺物（第20図）

土師器の皿（175）・高杯（176）、製塙土器（177）、須恵器の壺（178）が図化できたが、175が1/2の残存の他は小片である。176の脚部外面は、指により強く面取り風にナデを施す。177は小片のため、口径を18cmに仮定して図化を行った。

(4) S B 4出土遺物（第20図）

土師器の杯（179）、黒色土器の椀（180）、製塙土器（181）を図示した。掘立柱建物柱穴からの出土であるため、残存度が低いものが多いが、180は底部完存である。A類で、底部内面に簡略なラセン暗文を施すが、体部内面のヘラミガキは摩滅のため確認できない。181は製塙土器として全体の形態を表すことができる希少なものであるが、小片のため口径を18cmに仮定して図化を行った。

(5) S B 5出土遺物（第20図）

土師器や製塙土器の小片が出土した。図示したものは全て土師器で、182・183は杯、184は皿、185は高杯である。182は疊らな放射暗文を施すが、底部外面は未調整である。184は外面を口縁部ちかくまでヘラケズリで調整し、前代からの混入と考えられる。

(6) S A 41出土遺物（第20図）

土師器の杯・甌の小片が出土しているが、図示できたものは杯（186）と皿（187）である。なかでも186はほぼ完形で出土した。両者とも底部外面未調整である。

(7) S B 12出土遺物（第20図）

土師器杯・甌、製塙土器、黒色土器片が出土しているが、図化できたものは188のみである。188は土師器で、一見鉢状の形態であるが、底部を形成せず、筒状を呈する。小片のため、口径等は仮定にちかい推定で、体部の傾きも推定である。摩滅のため調整は不明であるが、粘土紐接合痕を残す粗い仕上げのため、未調整か簡単なナデと思われる。

(8) S B 13出土遺物（第20図）

土師器・須恵器の小片が出土しているが、図示したものは土師器杯（189）・皿（190）、製塙土器（191）である。189は杯としたが、皿状の形態、190は小型の器高が低いもので、今回出土した土師器皿では新しい部類である。191は小片のため、底部径を15cmに仮定して図化を行った。

3. 包含層出土遺物

(1) 繩文土器（第21図）

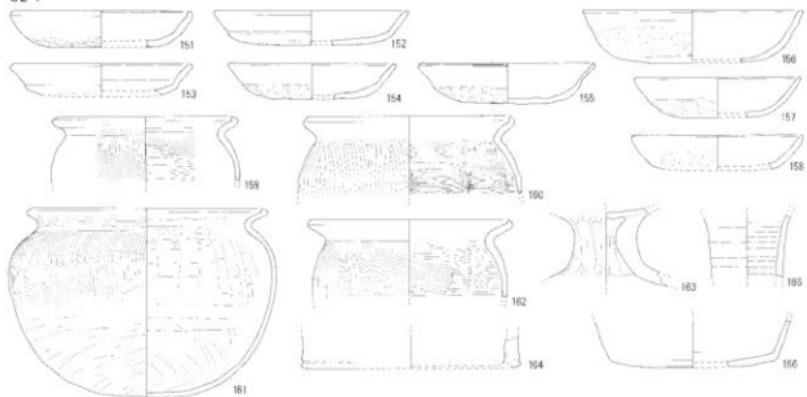
今回の調査で出土したものは192のみである。小片に加え摩滅が激しく、不明確な部分も多いが、一応、波状口縁を呈する口縁端部として図化した。外面に突堤を巡らす他は、器形・調整とともに不明である。

(2) 土師器（第21～24図）

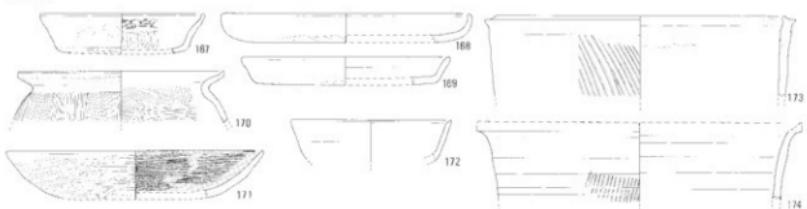
蓋（193・194） 194は杯状の形態であるが、つまみが付くことを推測させる割れ口で天井部外面をヘラミガキで調整するため、蓋と断定した。天井部と口縁部の境をクロケズリ風にヘラケズリすることや、天井部内面に不定方向のヘラケズリを施す等、特異な調整を施すものである。

杯（195～232） 底部と口縁部の境が明瞭なもの（195～212・214・215・217・218・222・224）と緩慢なもの（213・216・221・225～227・229～232）があり、両者とも一部には口径15cmを超える大型のものがある。前者の大半は底部外面をヘラケズリで調整するが、後者の多くは未調整である。しかし、227は底部外面をヘラケズリし、221には内面にヘラ

SE 1



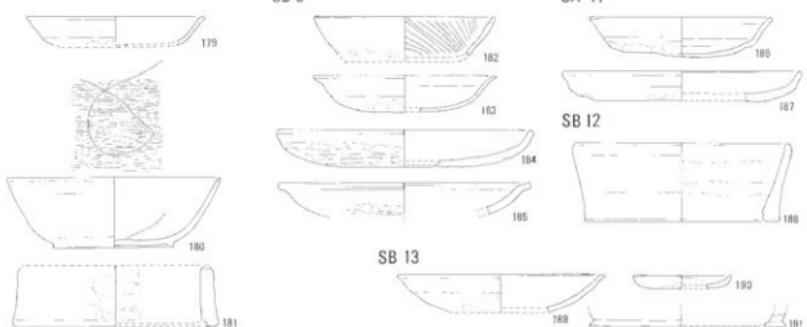
SE 20



SK 42



SB 4



第20図 SE 1・20、SB 4・5・12・13、SA41、SK42出土遺物実測図（1:4）

ミガキを施す等、比較的丁寧に調整を加えるものも散見される。226も底部外面をヘラケズリし、内面に粗いラセン暗文を施すが、ヘラケズリは浅く弱いもので、指頭圧痕が残る。225・229・232には内面に煤の付着が認められ、杯を灯明皿として使用していたことがうかがえる。202の底部外面は工具によるナデで調整されるが、ヘラミガキ状に丁寧に施している。212の口縁部外面の一ヶ所をヘラ状工具により縦方向の強いナデを施すが、調整上の機能は認め難く、その意図は不明である。

焼成後に鋭利な工具により記号を記すものが多くある。203・204は内面に「#」、196も同様と思われる。218は外面に格子状に施す。197は判然としないが、「#」を○で囲むものかもしれない。

219・220・223・228は小片のため器種が明確でないが、一応、杯として扱う。いずれも焼成後に鋭利な工具により内面に記号を記すもので、228は外面にも記す。小片のため明確ではないが、219は格子を○で囲むように見え、228の外面のものは「#」を○で囲むように見える。

皿（239～254） 底部から屈曲して立ち上がる口縁部をもつために底部と口縁部の境が明瞭なもの（241・242・246～248）、底部から内窓気味に立ち上がる口縁部をもつもの（239・243・245・249～252）があるが、中間的形態のものもあり、その分類は明瞭でない。253・254は小型で器壁の薄いものである。239・240の口縁端部外面には弱い沈線が施されるが、一周しない。243の口縁端部内面には沈線状の弱い窪みがあるが明瞭でない。239～247は底部外面をヘラケズリで調整するが、他のものは未調整である。239の底部外面のヘラケズリは指頭圧痕が残る浅いものである。240は底部外面にヘラケズリを施した後、部分的に指によるナデを施す。241の内面の工具によるナデは強く、一部ヘラケズリ状となっている。246の内面にはハケメ状の掻き取り痕があるが、調整の一環である。240の内面には焼成後、鋭利な工具により「#」と刻まれる。

盤（233） 口縁端部外面に沈線を巡らし、底部外面にヘラケズリを施すが、ヨコナデとの間に指頭圧痕が残る。

高杯（234～238） 234・235は杯部片、236は脚

部、237・238は脚柱部である。237・238共に短脚の脚柱部である。237は面取り状にヘラケズリするが、238はハケメ調整の後、簡単なヨコナデを施す。

椀（255～261） 全て粗製であるが、口縁端部外面に沈線を施すもの（255・258・260）がある。258は小片のため、口縁部の傾きや口径に疑問の残るものである。外面は黒斑となり、焼成不良の皿の可能性も残る。261の内面には、焼成後、鋭利な工具による線刻が施される。「○」を表現しているようであるが確認はない。

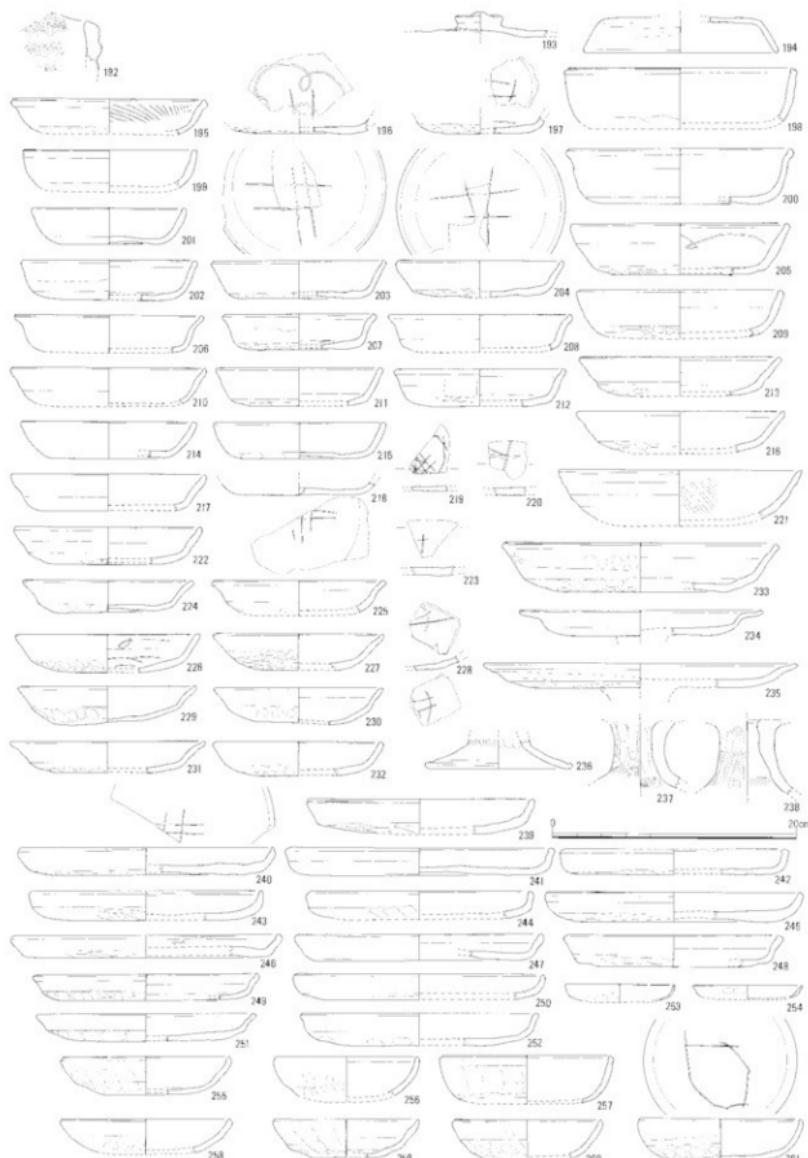
鉢（262） 粗製の鉢である。外面のハケメは非常に細かく弱いもので、未調整にちかい状態である。残存が少なく明確ではないが、体部外面下半にヘラケズリを施す可能性がある。

甌（263～285） 大半が口縁部片であり、全体の形態が明確なものはない。265は球形にちかい体部をもつものと考えられ、275・276・279・281は長胴甌と推測できる。多くが体部から「く」字に屈曲する口縁部をもつものであるが、273～278は水平立ちくまで外反する口縁部をもつものである。274は鉢とすべきかもしれない。口縁端部外面に沈線を巡らすもの（275・276・279・280・282）があるが、275は棒状工具により施している。

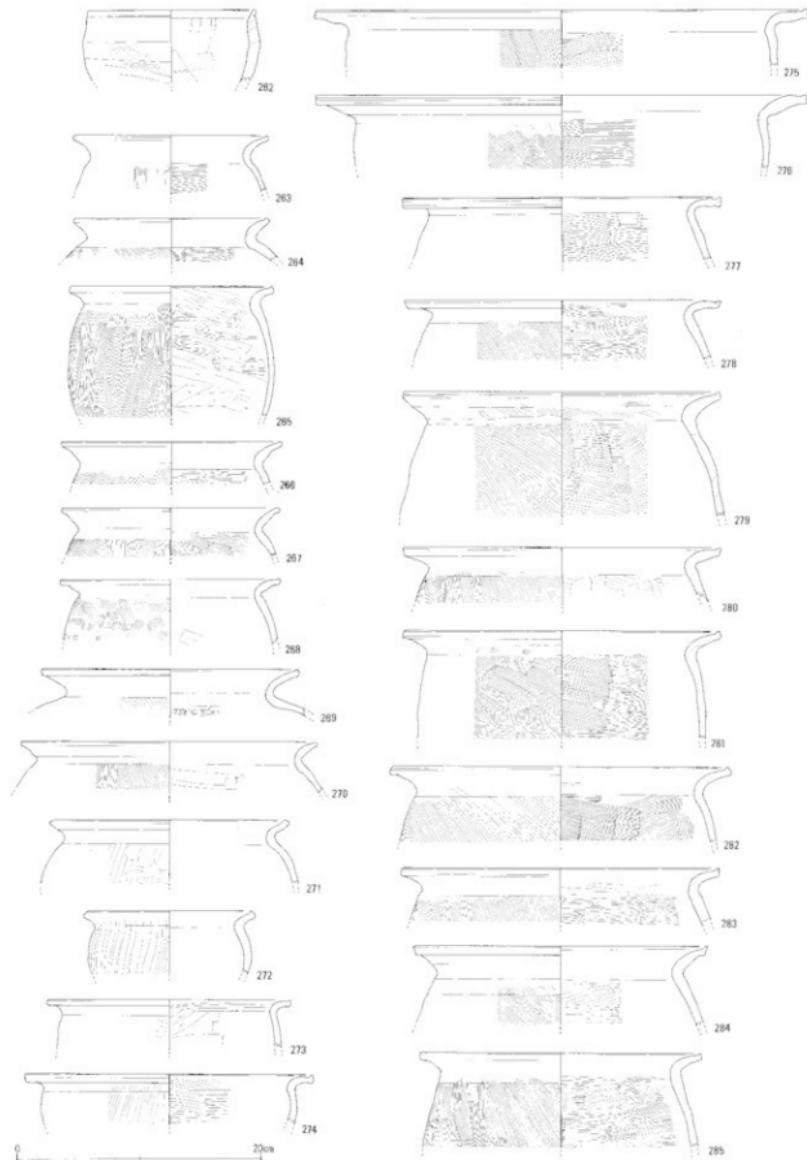
ハケメで調整するものが多いが、273・277はハケメをナデ消している。268の外面のハケメは非常に浅く、これもナデ消している可能性がある。271・272は粗いハケメで、271は指頭圧痕が残る。内面の調整もハケメのものが多いが、270・273は工具によるナデ、280も工具によるが、一部ヘラケズリ状となっている。273は口縁部ちかくの一部をナデの後ヘラケズリするが、調整上の必要性が認められない。276のヨコナデは頸部屈曲部で特に強く、凹線状になる。

瓶（286～292） 口縁部片と底部片である。286は小片のため口径を34cmに仮定して図化を行った。286～288は直立する口縁部で、287の口縁端部外面には深い沈線が細い棒状工具により刻まれている。290の底部孔は円形であることが分かる。

289は瓶として扱ったが、器種・器形ともに仮定である。口縁部片ではあるが、明和町の北野遺跡で多数出土している「有孔広口筒型土器」と似た形態である。しかし、北野遺跡のものは口縁部が外反し、



第21図 包含層出土遺物実測図 (1 : 4)



第22図 包含層出土遺物実測図 (1 : 4)

端部はそのまま丸くおさめるものが一般的である。対して当遺跡のものは口縁が内弯気味となり、端部も若干肥厚し面をもち、脚端部の可能性も残る形態である。そうした場合、上下逆となり、カマドの脚部等を想定することになるが、脚部とするには器壁が薄く貧弱である。全体から受ける印象では土器の一種と推定され、一応、口縁部片としてここで紹介しておく。

鍋（293・294） 両者とも口縁片で、294は小片のため口径を48cmに仮定して図化をおこなった。両者とも口縁端部が断面三角形状を呈するものである。

羽釜（295） 小片のため口径を32cmに仮定して

図化を行った。小片ではあるが口縁部の形態から羽釜と推測する。

（3）製塙土器（第23図）

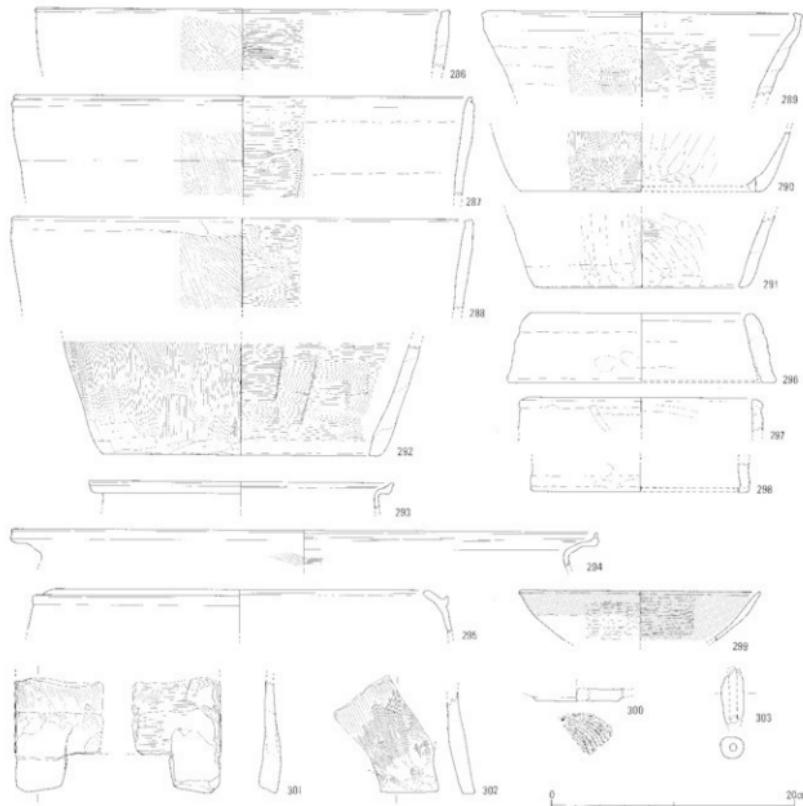
296・297は口縁部片、298は体部下端片である。296は器高が明確な希少なものであるが、口径は小片のため18.3cmに仮定している。297の口径も同様である。

（4）黒色土器（第23図）

299は椀の口縁部である。外面ともヘラミガキで調整され、内面を焼すA類であるが、焼しの範囲は口縁端部外面にも及ぶ。

（5）ロクロ土師器（第23図）

300は底部の小片のため、楕円皿かは判別できな



第23図 包含層出土遺物実測図（1：4）

い。底部外面には糸切の痕跡が明瞭に残る。

(6) 土製品(第23図)

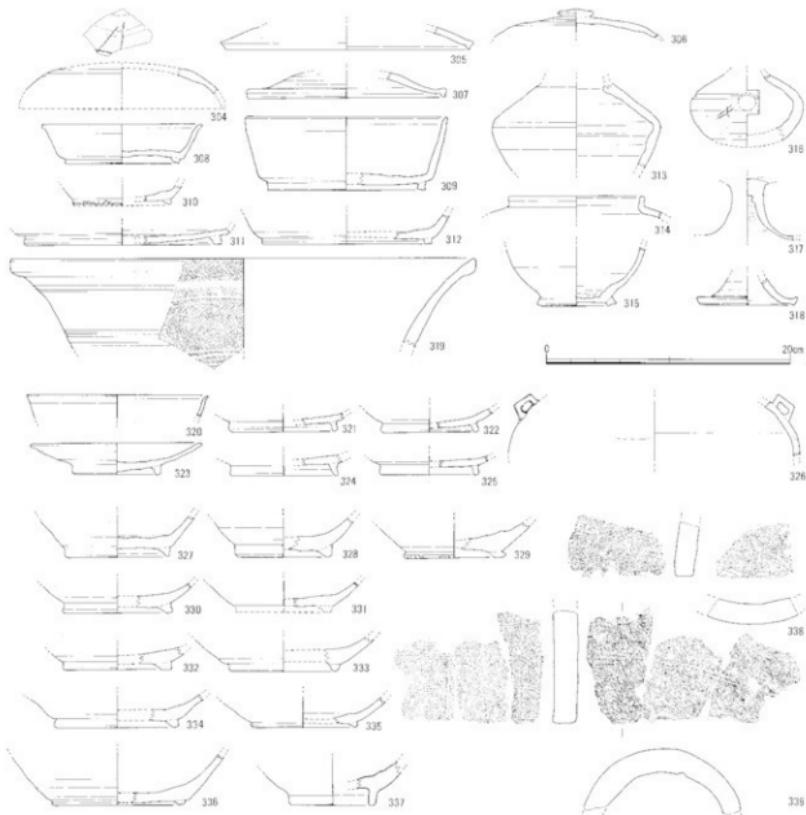
301・302はカマド片と推定され、303は土錘である。301・302は共に小片のため確証はないものの、301はカマドの前下端部とみてよいであろう。カマド下端に2cmほどの通空部を形成するため、短い脚が体部を包み込むように接合されている。302も同様にカマドの脚部としたが、その場合、下端の通空部は6cmを超えることになり、疑問である。カマドとしては精巧性も高すぎるようと思え、何かの造形品の一部かもしれない。

(7) 須恵器(第24図)

304～307は蓋、308～312は杯、313～315は盃、316は卮、317・318は高杯、319は甌である。

蓋にはつまみの無いもの(304)とあるもの(305～307)がある。306のつまみは扁平なものであり、焼成不良のためか、軟質で焼けている。304の天井部外面には焼成前に記号が刻まれているが、その表すものは不明である。

杯は、全て高台の付くもので、312は焼成不良ではあるが、ロクロナデの後、底部内面を不定方向にナデを施す。310の高台はその外面を故意に打ち欠



第24図 包含層出土遺物実測図(1:4)

かれ、剥離面が連続する形態を呈するが、その意図するところは不明である。

316の体部外面には焼成前に「×」と刻まれている。また、318は高杯の脚としたが、壺や甌の脚の可能性もある。

319の口縁部外面には装飾がある。端部ちかくにはヘラによる羽状刻目を上段から下段、左から右の順に施している。その下に二叉状工具により2段に2条一組の沈線を施し、その間に3条一組の櫛状工具による浅い沈線を右から左に施している。欠損のため不明確であるが、下段沈線の直ぐ下に3段目の沈線があるようである。したがって、2段目と3段目の沈線間は相対的に尖帯状を呈することになる。

(8) 灰釉陶器（第24図）

320は椀、323は皿、326は壺である。他のもの（321・322・324・325）は底部片のため不明確であるが、一応、椀として扱う。320・323の灰釉はハケ塗り、底部外面の調整は323・324がロクロケズリ、322・325は未調整、321はナデである。323の底部外面には直接重ね焼きの痕跡がある。

(9) 山茶椀（第24図）

図示したもの（327～336）は、全て椀の底部である。331・332・334・336の底部内面は磨耗しており、硯に転用された可能性がある。また、329・333の高台には糊殻痕が認められる。

(10) 青磁（第24図）

図示できるものは337のみである。施釉のため不明瞭であるが、削り出し高台と思われる。

(11) 瓦（第24図）

両者とも小片であるが、338は平瓦、339は行基式の丸瓦である。339の凸面は甌叩の後、ヘラケズリ状の調整を加える。

【註】

- ① 三重県教育委員会・三重県考古学調査事務所『三重県考古学調査事務所年報1988 史跡・古墳・発掘調査概報』平成元年3月
- ② 三重県埋蔵文化財センター『六大A遺跡発掘調査報告』2002年3月
- ③ 古代の土器研究会『古代の土器4 煮炊具（近畿編）』1996年9月21日
- ④ 柏原市教育委員会『高井田遺跡III—国民年金健保センター建設に伴う』1989年
- ⑤ 三重県埋蔵文化財センター『北野遺跡（第2・3・4次）発掘調査報告』1995.3

番号	実物番号	遺構	計上 位置	断面 形状	底面 形状 (1:100縮尺) [cm]	調整法の特徴	色 調	胎土	保存度	備 考
1	6-4	300	D-2	土器脚 部	18.1 4.3	外面ハケタクリ、内面削 除紋	褐(3387/8)	緑黄	口縁部1/8残	
2	18-4	300	D-2	土器脚 部	17.7 4.4	外面ハケタクリ、内面ナ ダ	褐(3386/9)	緑黄	口縁部1/12残	
3	6-5	300	D-2	土器脚 部	14.1 2.6	底面外側ハケタクリ、他 削除	褐(3386/9)	砂粒青土質	口縁部1/4残	
4	17-4	300	D-2	土器脚 部	15.8 2.7	底面外側ハケタクリ、内 面ナダ	褐(3386/6)	緑黄	口縁部1/12残	
5	17-5	300	D-2	土器脚 部	—	高台付 ナダ	—	—	—	口縁部が強しく、調整不正確。
6	18-5	300	D-2	土器脚 部	16.8 2.2	外面未調整、内面ナダ	褐(2-3386/6)	緑黄	小片	口縁部は仮定。
7	13-6	300	D-2	土器脚 部	13.4 —	外面下フチカタリ、他 削除	赤・白・黒(3387/4)	無彩色若干青	口縁部1/12残	
8	14-5	300	D-2	土器脚 部	20.1 —	内面一部ナダ、他2本削 除	内・にぶ・白(3387/4) 内・にぶ・白(3386/6)	3mmの砂粒多合	口縁部1/12以 下残	
9	18-1	300	D-2	土器脚 部	—	削除	外面ハケタクリ、内面ハ ケタクリ	褐色	口縁部1/12残	
10	17-2	300	D-2	土器脚 部	25.6 —	ハケメ	内・にぶ・白(2-3386/4) 内・にぶ・白(3387/4)	緑黄	口縁部1/6残	
11	13-1	300	D-2	土器脚 部	28.6 —	外面ナダ、内面ハケメ	内・にぶ・白(3387/3) 内・にぶ・白(3388/4)	3mmの砂粒多合	口縁部1/6残	
12	6-3	300	300-№3	土器脚 部	21.8 —	ハケメ	淡黄褐(3380/4)	3mmの砂粒多合	口縁部1/6残	
13	17-1	300	D-2	土器脚 部	30.0 —	外面ハケメ、内面ナダ	内・にぶ・白(3387/3)	3mmの砂粒多合	口縁部1/12残	
14	13-2	300	D-2	土器脚 部	19.1 —	外面ハケメ、内面上半 ハケメ、下半ナダ	内・にぶ・白(3387/2)	緑黄	口縁部1/12残	
15	17-3	300	D-2	土器脚 部	23.6 —	内面ナダ	褐色(3387/8)	緑黄	口縁部1/6残	
16	6-2	300	300-№2	土器脚 部	14.7 4.1	底面外側一箇所ハケタ クリ、他はロクロナダ	白(3386/7)	緑黄	口縁部2/5残	
17	18-2	300	D-2	土器脚 部	24.6 —	底面外側ハケタクリ、他 はロクロナダ	白(3386/1)	無彩色含	口縁部1/12残	
18	6-1	300	300-№1	土器脚 部	13.6 4.4	高台付 外側ハケタクリ、内 面ナダ	白(3386/7)	緑黄	口縁部1/12、底部 2/3残	
19	13-4	300	D-2	土器脚 部	11.8 —	ロクロナダ	内・底面(2-3384/1) 内・底面(1-3385/1)	3mmの砂粒多合	口縁部1/6残	
20	5-4	300	D-2	土器脚 部	17.8 —	底面外側下半ロクロナ ダ、他はロクロナダ	内・底面(2-3384/1) 内・底面(3-3385/1)	3mmの小片含	口縁部1/14残	
21	15-2	300	D-2	土器脚 部	15.0 3.1	底面外側ハケタクリ、内 面ナダ	内・底面(2-3384/1) 内・底面(3-3385/1)	緑黄	口縁部1/6残	内面ハラミガキは埋文風。
22	15-6	300	D-2	土器脚 部	18.0 4.5	ロクロナダ	褐(3387/8)	緑黄	小片	口縁部仮定。施釉が強く調節不 確。

第1表 遺物観察表

番号	実測 番号	遺構 名	出土 位置	断面 形状	出 量 (t)	調査法の特徴	北 調	粘土	残存度	備 考
23	15-5 SK18	0-9 土壌層 082	17.0	4.6	外面へラクゼリ、内面ナ ド	標(0387/6)	1mmの砂粒・黒母 石	口縫部1/12残		
24	16-4 SK18	0-9 土壌層 082	14.0	6.0	ナ	浅黄褐色(10YR6/4)	Damの砂粒含	口縫部1/12残		
25	15-7 SK18	0-9 土壌層 082	20.0	3.7	底面外面へラクゼリ、内 面ナ	標(2,0387/6)	黒母石若干	小片	口縫は仮定。	
26	16-2 SK18	0-9 土壌層 082	21.0	2.4	底面外面へラクゼリ、内 面ナ	標(2,0387/6)	黒母石含	口縫部1/12残	内面に難別。	
27	15-8 SK18	0-9 土壌層 082	25.0	—	ハケメ	外・浅黄褐色(10YR6/4) 内・にじみ・黒褐色(10YR7/4)	黒母石	口縫部1/8残		
28	32-2 S340	K-10 P1	17.3	4.5	天井部外面ロクロカゼ リ、地盤ロクロナ	黄灰(2,5Y5/1)	1mmの砂粒含	泥炭		
29	25-7 SK32	0-4 土壌層 081	24.0	2.4	底面外面へラクゼリ、内 面ナ	明赤褐色(2,5YR6/4)	黒砂粒含	口縫部1/12残		
30	25-1 SK32	0-4 土壌層 081	15.0	—	ハケメ	外・標(2,5YR6/6) 内・標(7,5YR6/6)	積良	口縫部1/6残		
31	20-2 SK32	0-4 土壌層 081	21.0	—	外面ハケメ、内面ナ	灰黄褐色(10YR6/2)	Damの砂粒含	脚部1/12残		
32	26-1 SK32	0-4 土壌層 081	9.3	3.4	受持付 底面外面未調査。地盤は IL系	白灰(2,5Y7/1)	黒砂粒含	口縫部1/4残		
33	56-1 SK2	0-2 土壌層 081	15.0	3.1	ナ	標(0387/6)	積良	口縫部1/6残		
34	56-8 SK2	0-2 土壌層 081	18.8	2.3	ナ	標(2,0387/6)	積良	口縫部1/6残	掌状が難しく調査不明。	
35	36-1 SK2	0-2 土壌層 081	22.0	—	ナ	標(2,0387/6)	積良	口縫部1/2残	掌状のため調査不明。	
36	22-6 SK19	1-9 土壌層 081	19.1	4.5	底面外面へラクゼリ、内 面ナ	標(2,0386/6) 内・標(7,0386/6)	積良	口縫部1/6残	掌状が難しく調査不明。	
37	24-1 SK19	1-9 土壌層 081	20.0	2.6	底面外面へラクゼリ、内 面ナ	標(2,0387/6)	積良	口縫部1/12残		
38	19-2 SK19	1-9 土壌層 081	23.0	0.6	外面未調査、内面ナ	標(0387/6)	1mmの砂粒含	口縫部1/6残		
39	55-7 SK38	2-8 土壌層 080	13.0	—	ハケメ	にじみ・標(2,0387/4)	黒母石含	口縫部1/6残		
40	55-6 SK38	2-8 土壌層 080	15.0	2.3	天井部外面ロクロカゼ リ、地盤ロクロナ	標(2,5Y6/1)	0.5mmの砂粒含	口縫部1/6残	運元や不良。	
41	29-3 SH16	0-7 土壌層 081	14.0	2.7	底面外面へラクゼリ、内 面ナ	外・標(10YR6/4) 内・標(7,0386/4)	黒母石含	口縫部1/2残	カマド内出土。	
42	5-1 SH16	0-7 土壌層 081	17.5	14.2	外面ハメ、内面上半ハ メと下半へラクゼリ	浅黄褐色(10YR8/3)	Damの砂粒若干含	口縫部1/3残、体 積充完		
43	31-1 SH16	0-7 土壌層 081	27.1	—	外面ナ、内面工具ナ	内・にじみ・黒褐色(10YR8/3) 内・にじみ・黒褐色(10YR8/4)	Damの砂粒含	口縫部1/4残		
44	52-1 SH16	0-7 土壌層 081	—	—	外面ハメ、内面ハメ	外・標(2,0386/4) 内・標(2,0386/5)	Damの砂粒含	体部1/残		
45	50-4 SH16	0-7 土壌層 081	26.0	—	ハケメ	内・にじみ・標(7,0386/0) 内・にじみ・標(2,0386/4)	1.5mmの砂粒・黒 母石含	口縫部1/12残		
46	50-3 SH16	0-7 土壌層 081	27.0	—	ハケメ	内・にじみ・標(7,0386/0) 内・にじみ・標(2,0386/3)	黒砂粒・黒母石含	口縫部1/6残		
47	7-1 SH16	0-7 土壌層 081	24.4	30.3	体部内面下半ロクロカ ゼリ、地・ハケメ	灰白(0386R-2)	Damの砂粒若干含 地盤はぼけ存在	口縫部1/6残、体 積はぼけ存在	カマド内出土。	
48	30-3 SH16	0-7 土壌層 081	—	—	碧	62.0	ナ	Damの砂粒含	標(2,5Y8/2)	カマド内出土。掌状が難しく調査不 明。
49	29-4 SH16	0-7 土壌層 081	24.0	—	ロクロナ	灰白(5Y7/)	黒砂粒含	口縫部小片		
50	19-4 SK21	0-9 土壌層 082	18.0	6.4	外面へラクゼリ、内面へ ナ	にじみ・標(2,0386/4)	積良	口縫部1/12残		
51	12-5 SK21	0-9 土壌層 081	15.2	3.9	底面外面へラクゼリ、内 面ナ	にじみ・標(7,0386/3) 内・灰褐色(3,0386/2)	積良	口縫部1/6残	内面へナ・ガキは難文。	
52	27-4 SK21	0-9 土壌層 081	13.8	3.6	底面外面へラクゼリ、内 面ナ	にじみ・黄褐色(10YR7/4)	Damの砂粒含	口縫部1/12残		
53	15-4 SK21	0-9 土壌層 083	14.0	3.9	底面外面へラクゼリ、内 面ナ	標(0387/6)	黒母石含	口縫部1/6残	内面一部にラセン暗文。	
54	33-1 SK21	0-9 土壌層 081	17.8	6.0	底面外面へラクゼリ、内 面ナ	標(0386/6)	積良	5/12残	内面に不定形な難文、底面黒褐色 化。	
55	1-3 SK21	0-9 土壌層 081	17.1	6.2	底面外面へラクゼリ、内 面ナ	標(2,0386/6)	積良	1/2残	内面に難別、掌状が難しく調査不明。	
56	5-3 SK21	0-9 土壌層 081	17.4	6.3	底面外面へラクゼリ、内 面ナ	標(2,0386/6)	積良	はぼ穴形	内面に難別「#」。	
57	23-6 SK21	0-9 土壌層 081	18.0	3.6	底面外面へラクゼリ、内 面ナ	標(0386/6)	積良	口縫部1/12残		
58	27-4 SK21	0-9 土壌層 081	18.2	3.5	底面外面へラクゼリ、内 面ナ	標(0386/6)	Dam以下の砂粒含	口縫部1/6残		
59	23-5 SK21	0-9 土壌層 081	18.4	3.5	底面外面へラクゼリ、内 面ナ	標(2,0386/6)	積良	口縫部1/12残		
60	23-2 SK21	0-9 土壌層 081	19.8	6.0	底面外面へラクゼリ、内 面ナ	標(0387/6)	積良	口縫部1/12残		
61	1-1 SK21	0-9 土壌層 083	17.0	6.6	底面外面へラクゼリ、内 面ナ	標(2,0386/6)	積良	1/6残	内面に難別、掌状が難しく調査不明。	
62	19-3 SK21	0-9 土壌層 081	18.0	4.3	底面外面へラクゼリ、内 面ナ	にじみ・標(7,0386/3)	黒砂粒・黒母石含	口縫部1/6残		
63	15-1 SK21	0-9 土壌層 083	14.5	3.1	底面外面へラクゼリ、内 面ナ	白灰(2,037/1)	1mmの砂粒若干含	口縫部1/6残	掌状が難しく調査不明。	
64	22-3 SK21	0-9 土壌層 081	16.0	3.8	底面外面へラクゼリ、内 面ナ	標(0386/6)	積良	口縫部1/6残	口縫部を難別したため、複合 層が洗浄時に残る。	
65	4-1 SK21	0-9 土壌層 081	14.5	3.7	底面外面へラクゼリ、内 面ナ	標(0387/6)	積良	1/4残	内面にラセン暗文。	
66	3-1 SK21	0-9 土壌層 081	14.3	3.3	底面外面へラクゼリ、内 面ナ	標(0387/6)	積良	はぼ穴形	内面に難別、掌状が難しく調査不明。	
67	8-5 SK21	0-9 土壌層 081	13.8	3.3	底面外面へラクゼリ、内 面ナ	にじみ・標(2,0387/4)	積良	1/2残	内面に難別「#」、ツヤン短丈。	

第1表 遺物観察表

番号	実験番号	遺構	出土位置	断面 寸法 厚さ	断面 形態 内面 ナダ	出 量 (cm)	調査該当の特徴	色 調	粘土	残存度	備考
68-35-3	SK21	土壌層 土	15.4	3.0	底面外側へラケズリ、内 面ナダ	内に赤い縁(10786/4) 内に黒縁(10786/4)	穠良	0.5cm	内面にランゼ文+縁削「B」。		
69-22-4	SK21	土壌層 土	13.9	2.8	底面外側へラケズリ、内 面ナダ	内に赤い縁(10786/4) 内に赤い縁削(10786/4)	3cmの砂粒含	0.5cm部1/6残	底面外側に縁削。		
70-22-5	SK21	土壌層 土	14.8	3.0	底面外側へラケズリ、内 面ナダ	内に赤い縁(10786/4)	穠良	0.5cm部1/6残	縁削が強しく調査不明確。		
71-48-6	SK21	土壌層 土	14.0	3.0	底面外側へラケズリ、内 面ナダ	内に赤い縁(10786/4)	1mm以下の砂粒 含	0.5cm部1/12残			
72-4-4	SK21	土壌層 土	15.2	3.6	外面不明、内面ナダ	縁削(10787/4)	2mmの砂粒若干	1/4残	縁削が強しく、底部外側調査不明。		
73-23-1	SK21	土壌層 土	15.5	2.8	底面外側ナダ。内面ナ ダ	内に赤い縁(10786/4)	穠良	0.5cm部1/12残	底部小片のため調査不正確。		
74-23-3	SK21	土壌層 土	13.7	3.1	ナダ	内・赤い縁(10787/4) 内・黒縁(10787/4)	1mmの砂粒含	0.5cm部1/12残	壁のため調査不正確。		
75-28-4	SK21	土壌層 土	13.0	2.6	底面外側へラケズリ、内 面ナダ	内に赤い縁(10786/4)	1mm以下の砂粒 含	0.5cm部1/6残	内面に縁削。		
76-4-6	SK21	土壌層 土	13.6	3.0	底面外側へラケズリ、内 面ナダ	内に赤い縁(10786/4)	穠良	0.5cm部1/8残	内面に縁削「#」。		
77-22-1	SK21	土壌層 土	13.9	2.3	底面外側へラケズリ、内 面ナダ	内に赤い縁(10786/4)	3mmの砂粒含	0.5cm部1/8残			
78-3-2	SK21	土壌層 土	13.9	2.5	外面へラケズリ、内面ナ ダ	内に赤い縁(10786/4)	1~2mmの砂粒含	1/2残			
79-4-2	SK21	土壌層 土	13.5	3.2	底面外側へラケズリ、内 面ナダ	内に赤い縁(10786/4)	1mmの砂粒含	2/3残	縁削が強しい。		
80-23-4	SK21	土壌層 土	14.9	2.8	ナダ	内に赤い縁(10786/4) 内に黒縁(10786/4)	1mmの砂粒含	0.5cm部1/12残			
81-36-5	SK21	土壌層 土	—	—	底面外側へラケズリ、内 面ナダ	内に赤い縁(10786/4) 内に黒縁(10787/4)	穠良	底部1/3残	内面にランゼ文+縁削「B」。外 面に縁削。		
82-22-2	SK21	土壌層 土	14.4	3.0	ナダ	内に赤い縁(10786/4)	穠良	0.5cm部1/4残			
83-25-8	SK21	土壌層 土	—	—	底面外側未調査。内面ナ ダ	内に赤い縁(10786/4)	微砂粒・赤色粒 含	小片	内面に縁削。		
84-28-7	SK21	土壌層 土	—	—	底面外側へラケズリ、内 面ナダ	内に赤い縁(10786/4) 内に黒縁(10786/4)	1mm以下の砂粒 含	底部小片	内面にヘア記号。縁削は調査不 明確。		
85-16-6	SK21	土壌層 土	—	—	底面外側へラケズリ、内 面へタガタナ	内に赤い縁(10787/4)	穠良	底部小片	内面に縁削。		
86-28-8	SK21	土壌層 土	—	—	底面外側へラケズリ、内 面ナダ	内に赤い縁(10787/4)	微砂粒・赤色粒 含	底部小片	内面に縁削。		
87-19-6	SK21	土壌層 土	—	—	外面へラケズリ、内面ナ ダ	内に赤い縁(10787/4)	1.5mmの砂粒若干	小片	内面に縁削「#」か。		
88-28-6	SK21	土壌層 土	—	—	ナダ	内に赤い縁(10786/4)	微砂粒含	底部小片	内面に縁削。外刃摩擦して調査不 明確。		
89-27-2	SK21	土壌層 土	21.8	3.2	外面へラケズリ、内面ナ ダ	内に赤い縁(10787/4)	赤色粒含	0.5cm部1/12残			
90-4-5	SK21	土壌層 土	14.9	3.0	底面外側へラケズリ、内 面ナダ	内に赤い縁(10787/4)	穠良	2/4残			
91-19-1	SK21	土壌層 土	15.0	2.1	ナダ	内に赤い縁(10787/4)	穠良	0.5cm部1/12残			
92-16-1	SK21	土壌層 土	20.0	2.7	底面外側未調査。内面ナ ダ	内に赤い縁(10787/4)	1mmの砂粒含	0.5cm部1/12残			
93-24-2	SK21	土壌層 土	17.0	2.6	底面外側未調査。内面ナ ダ	内に赤い縁(10786/4)	穠良	0.5cm部1/12残			
94-24-3	SK21	土壌層 土	20.0	3.1	底面外側未調査。内面ナ ダ	内に赤い縁(10786/4)	穠良	0.5cm部1/12残			
95-28-2	SK21	土壌層 土	22.8	2.2	底面外側未調査。内面ナ ダ	内に赤い縁(10786/4) 内に黒縁(10786/4)	1.5mm以下の砂 粒・赤色粒含	0.5cm部1/6残			
96-36-2	SK21	土壌層 土	19.4	2.2	底面外側未調査。内面ナ ダ	内に赤い縁(10787/4)	穠良	ほぼ完形	縁削のため調査不正確。		
97-16-3	SK21	土壌層 土	21.0	2.4	底面外側未ナダ。内面ナ ダ	内に赤い縁(10787/4)	穠良	0.5cm部1/12残	縁削が強しく調査不正確。		
98-35-4	SK21	土壌層 土	18.2	2.1	底面外側未調査。内面ナ ダ	内に赤い縁(10786/4) 内に黒縁(10786/4)	穠良	1/6残	縁削のため調査不正確。		
99-33-2	SK21	土壌層 土	20.4	2.4	底面外側へラケズリ。内 面ナダ	内に赤い縁(10787/4)	穠良	0.5cm部1/6残			
100-27-7	SK21	土壌層 土	20.8	2.4	底面外側へラケズリ。内 面ナダ	内に赤い縁(10786/4) 内に黒縁(10786/4)	1.5mm以下の砂 粒・赤色粒含	0.5cm部1/12残			
101-24-4	SK21	土壌層 土	18.3	2.0	底面外側未調査。内面ナ ダ	内に赤い縁(10787/4)	穠良	0.5cm部1/12残			
102-1-3	SK21	土壌層 土	20.5	2.6	外面へラケズリ。内面ナ ダ	内に赤い縁(10787/4)	1mmの砂粒含	1/8残			
103-12-3	SK21	土壌層 土	15.4	—	外面未調査。内面ナダ	内に赤い縁(10788/3)	微砂粒含	0.5cm部1/12残			
104-12-4	SK21	土壌層 土	16.0	—	外面未調査。内面ナダ	内に赤い縁(10786/4)	穠良	0.5cm部1/6残			
105-16-5	SK21	土壌層 土	—	—	底面外側未調査。内面ナ ダ	内に赤い縁(10786/4)	穠良	底部1/4残	内面に縁削「#」か。		
106-19-6	SK21	土壌層 土	12.5	3.5	外面未調査。内面ナダ	内に赤い縁(10787/4) 内に黒縁(10788/3)	2mm以下の砂粒含	0.5cm部1/4残			
107-25-2	SK21	土壌層 土	14.3	3.6	外面未調査。内面ナダ	内に赤い縁(10787/4)	3mm以下の砂粒含	0.5cm部1/4残			
108-25-4	SK21	土壌層 土	13.4	4.1	外面未調査。内面ナダ	内に赤い縁(10787/4)	2.5mm以下の砂 粒含	0.5cm部1/6残			
109-27-5	SK21	土壌層 土	13.2	3.5	外面未調査。内面ナダ	内に赤い縁(10787/4)	3.5mm以下の砂 粒含	0.5cm部1/6残			
110-40-4	SK21	土壌層 土	12.7	3.5	外面未調査。内面ナダ	内に赤い縁(10787/4)	穠良	0.5cm部1/12残			
111-2-4	SK21	土壌層 土	35.9	7.0	外面へラケズリ。内面ナ ダ	内に赤い縁削(10787/4)	穠良	1/10以下残			
112-28-1	SK21	土壌層 土	23.0	—	底面外側未調査。内面ナ ダ	内に赤い縁削(10787/4)	1mm以下の砂粒 含・赤色粒含	0.5cm部1/4残	縁削が強しく調査不正確。		

第1表 遺物観察表

番号	実測 番号	遺構 名	出土 状況	断面 形状	出 土 量 (m)	調整試抜の特徴	色 調	出土	残存度	備 考
113	19-7	土塁壁 高所	0-9 3m	土塁壁 高所	—	脚部 柱4.	内面ハケタツリ、内面ナ ジ	標(2, SYE7/6)	稚民	口縁部1/12残
114	28-9	土塁壁 高所	0-9 3m	土塁壁 高所	—	直筒 柱3.	ハケメが残るテグ	標(3SYE6/6)	1m以下の中粘土	隙部部1/6残
115	11-2	土塁壁 便	0-9 3m	土塁壁 便	24.2	—	ハケメ	に広い槽(7, SYE7/4)	微砂粒含	口縁部1/12以下 残
116	21-2	土塁壁 便	0-9 3m	土塁壁 便	28.0	—	ハケメ	外・浅黄壁(2, SYE8/2) 内・広い槽(7, SYE7/3)	墨母含	口縁部1/6残
117	20-1	土塁壁 便	0-9 3m	土塁壁 便	18.6	—	ハケメ	外・浅黄壁(2, SYE8/4) 内・浅黄壁(1, SYE8/3)	Dmの砂粒・雲母 含	口縁部1/12残
118	11-1	土塁壁 便	0-9 3m	土塁壁 便	24.5	—	ハケメ	浅黄壁(1, SYE8/4)	1mの砂粒含	口縁部1/6残 内面剥離強しく調査不確
119	21-1	土塁壁 便	0-9 3m	土塁壁 便	36.0	—	ハケメ	浅黄壁(7, SYE8/4)	Dmの砂粒含	口縁部1/12残
120	12-2	土塁壁 便	0-9 3m	土塁壁 便	20.0	—	ハケメ	に広い槽(7, SYE7/4)	Dmの砂粒含	口縁部1/12残
121	12-1	土塁壁 便	0-9 3m	土塁壁 便	17.2	—	ハケメ	に広い槽(7, SYE7/3)	微砂粒含	口縁部1/12残
122	10-4	土塁壁 便	0-9 3m	土塁壁 便	11.3	—	外面部調査、内面ナ ジ	外・に広い葉根(10SYE6/4) 内・浅黄壁(1, SYE8/2)	1mの砂粒含	口縁部1/6残
123	11-3	土塁壁 便	0-9 3m	土塁壁 便	45.4	—	ハケメ	外・灰白(10SYE6/3) 内・浅黄壁(1, SYE8/3)	Dmの砂粒含	口縁部1/12以下 残
124	20-2	剣士跡 便	0-9 3m	剣士跡 便	18.0	—	チグ	に広い槽(7, SYE7/6)	7m以下の小石多 含	口縁部1/6残
125	18-3	剣士跡 便	0-9 3m	剣士跡 便	18.0	—	外面部調査、内面ナ ジ	標(2, SYE6/6)	2mの砂粒含	小片 口縁部は仮定
126	19-5	剣士跡 便	0-9 3m	剣士跡 便	18.0	—	外面部調査、内面ナ ジ	標(2, SYE6/6)	Dmの砂粒・雲母 含	口縁部1/12残
127	2-5	聚落壁 便	0-9 3m	聚落壁 便	19.4	3.0	外井戸面ハコタケズ リ、他はロクナ	灰(NR)	稚民	1/6残
128	5-3	聚落壁 便	0-9 3m	聚落壁 便	15.1	3.7	外井戸面ハコタケズ リ、他はロクナ	灰(NR)	稚民	口縁部2/3残 天井部外側に自然軋の跡 有する
129	10-3	聚落壁 便	0-9 3m	聚落壁 便	12.0	—	ロクロナ	外・灰(SH7/) 内・灰(SM7/)	微砂粒・雲母含	口縁部1/12残 口縁部に隙間防止工の痕 跡
130	5-2	聚落壁 便	0-9 3m	聚落壁 便	12.8	3.8	底井外側ハコタケズリ、 他はロクナ	灰(NR)	1m縦部3/4残、体 微化成灰床	2mの砂粒若干含
131	26-4	聚落壁 便	0-9 3m	聚落壁 便	—	高台付 底井外側調査。他Dmの 柱ナラ	外・浅黄(2, SYE8/3) 内・浅黄(2, SYE7/2)	1, 1m以下の中粘 灰(NR)	1, 1m以下の中粘 灰(NR)	礁不成良。
132	37-1	東西大溝 便	0-4	土塁壁 便	16.0	3.4	底井外側一部ハコタケズ リ、内面ナジ	標(3SYE7/4)	微砂粒・雲母若干 含	口縁部1/12残 内面にラセン埋込み。
133	39-4	東西大溝 便	0-4	土塁壁 便	15.1	3.0	底井外側一部ハコタケズ リ、他ナジ	標(3SYE7/4)	稚民	1/2残
134	39-2	東西大溝 便	0-4	土塁壁 便	18.1	6.2	底井外側ハコタケズリ、他 ナジ	標(3SYE7/6)	1mの砂粒含	口縁部1/6残 底井外側にヘラ記号。口縁部に隙 間防。
135	20-1	東西大溝 便	0-4	土塁壁 便	—	底井外側ハコタケズリ、 内面ナジ+端子	標(3SYE6/6)	1m以下の中粘含	小片 内面に縫隙、外面上に墨。	内面に縫隙、外面上に墨。
136	33-6	東西大溝 便	0-4	土塁壁 便	17.0	6.0	チグ	外・黄壁(7, SYE7/8) 内・黄壁(5, SYE8/2)	0, 1mの砂粒若干 含	口縁部2/3残 内面に縫隙「#」。
137	25-6	東西大溝 便	0-4	土塁壁 便	23.0	2.4	底井外側ハコタケズリ、 内面ナジ端子	標(2, SYE6/4)	1m以下の中粘含	口縁部1/12残
138	29-1	東西大溝 便	0-4	土塁壁 便	18.6	2.1	チグ	外・浅黄壁(7, SYE8/6) 内・黄壁(7, SYE8/6)	1mの砂粒若干含	口縁部1/6残
139	30-1	東西大溝 便	0-4	土塁壁 便	20.0	3.6	底井外側ハコタケズリ、 内面ナジ	標(2, SYE8/8)	稚民	口縁部1/6残 底井外側に墨。
140	25-3	東西大溝 便	0-4	土塁壁 便	14.3	3.5	外面部調査、内面ナ ジ	外・に広い槽(7, SYE7/3) 内・浅黄壁(10SYE8/4)	2m以下の砂粒含	口縁部1/3残
141	53-7	東西大溝 便	0-4	土塁壁 便	21.2	—	外面部ハコタケズリ。他はナ ジ	標(3SYE6/6)	赤色粒・微砂粒 含	口縁部1/6残 内面にラセン埋込み。
142	30-2	東西大溝 便	0-4	土塁壁 便	—	脚部 柱2.3	脚部外側ハコタケズリ、内 面ナジ	標(2, SYE7/8)	0, 1mの砂粒若干 含	脚部外側、脚部 柱1/3残
143	38-3	東西大溝 便	0-4	土塁壁 便	—	脚部 柱2.2	脚部外側ハコタケズリ、 他ナジ	標(2, SYE7/8)	稚民	脚部1/6残 脚部外側に不定形崩れ。
144	29-5	東西大溝 便	0-4	土塁壁 便	17.6	—	外面部ハコタケズリ、内 面ナジ	外・灰(ナマハ)、内面工ナ ジ、ハコタケズリ	微砂粒若干含	口縁部1/6残 外側に復活着。
145	31-2	東西大溝 便	0-4	土塁壁 便	16.7	—	外面部ハコタケズリ、内 面ナジ	外・灰(ナマハ)、内面工ナ ジ、ハコタケズリ	2mの砂粒含	口縁部2/3残
146	34-1	東西大溝 便	0-4	土塁壁 便	26.9	—	外面部ハコタケズリ、 外面上ハナメ	底井壁(7, SYE8/6)	0, 1mの砂粒若干 含	口縁部2/4残
147	29-2	東西大溝 便	0-4	土塁壁 便	19.0	—	チグ	外・槽(7, SYE7/4) 内・槽(5, SYE7/4)	微砂粒若干含	口縁部1/6残 壁面が強しく調査不確。
148	37-3	東西大溝 便	0-4	土塁壁 便	13.0	2.4	底井外側面ハコタケズ リ、他ナジ	底井(2, SYE7/1)	稚民	口縁部1/6残 口縁部に復活着。
149	26-5	東西大溝 便	0-4	土塁壁 便	—	脚部 柱5.1	脚部	ロクロナ	0, 1m以下の砂粒 含	脚部完全 外面上に刻文+沈線。
150	37-6	東西大溝 便	0-3	土塁壁 便	—	脚部 柱5.1	脚部外側ハコタケズリ、 他ナジ	標(3SYE6/6)	2mの砂粒含	脚部完全 外面上に刻文+沈線。
151	56-3	SII	0-3	土塁壁 便	14.6	2.9	底井外側ハコタケズリ、他 ナジ	標(2, SYE7/6)	微砂粒若干含	口縁部1/6残
152	56-4	SII	0-3	土塁壁 便	16.0	2.8	底井外側面調査。他ナジ ナラ	外・槽(5SYE7/6) 内・浅黄壁(10SYE8/4)	稚民	口縁部1/6残
153	56-2	SII	0-3	土塁壁 便	14.8	2.7	底井外側面調査。他ナジ ナラ	標(2, SYE7/6)	1mの砂粒・雲母 含	口縁部1/6残 非常に強いヨコナラ。
154	8-2	SII	0-3	土塁壁 便	13.5	2.9	底井外側面調査。他ナジ ナラ	底白(10SYE8/2)	微砂粒若干含	口縁部1/3残
155	8-1	SII	0-3	土塁壁 便	14.1	3.3	底井外側面調査。他ナジ ナラ	底白(7, SYE8/1)	微砂粒含	2/4残
156	56-5	SII	0-3	土塁壁 便	18.0	4.4	外面部調査。他ナジ ナラ	標(2, SYE7/6)	雲母若干含	口縁部1/6残
156	56-4	SII	0-3	土塁壁 便	13.6	3.3	底井外側面調査。他ナジ ナラ	標(3SYE6/6)	稚民	口縁部1/6残

第1表 遺物観察表

番号	実験 番号	遺構 名	出土 位置	断面 形式	出 土量 (m)	調査段位の特徴	色 調	粘土	残存度	備考
158-5-1	SH1	B-3 土壁脚 部	14.6	3.4	—	底面外側調査。他はナ ジ	外: 黄(3887/7) 内: 淡黄(10808/2)	粗良	口縫部1/6残	焼成や不具で体部は無理状。
159-5-7	SH1	B-3 土壁脚 部	15.2	—	—	外: にじる黃茶(10937/3) 内: 淡黄(7.3164/2)	粗良	口縫部1/6残		
160-5-1	SH1	B-3 土壁脚 部	16.5	—	ハケメ	底白(1088/2)	微砂粒若干含	口縫部3/4残	外面に厚い付着層。	
161-5-1	SH1	B-3 土壁脚 部	18.8	15.4	—	外面上ハケメ、下へ カケズリ、内面工具ナ ジ	外: 薄(022/2) 内: 淡緑(7.3163/3)	粗良	1/4残	外面側のため調査不明點。
162-8-4	SH1	B-3 土壁脚 部	16.2	—	ハケメ	底白(1088/2)	白色砂粒多含	口縫部1/4残		
163-5-5	SH1	B-3 土壁脚 部	—	—	脚柱付 ハケメ	内: 淡綠(1088/3) 外: 砂利(5.3164/2)	0.5mmの砂利若干 含	脚柱完存		
164-5-2	SH1	B-3 陶製土器 高脚	—	—	—	底白(1087/6)	—	—	底柱は仮定。	
165-5-4	SH1	B-3 灰釉陶器 脚柱	—	—	脚柱付 6.5	内: 浅オリーブ(385/3) 外: 黄(387/7)	粗良	脚柱1/4残		
166-5-5	SH1	B-3 灰釉陶 瓶	—	—	底柱	底面外側カコケズリ、 内: にじる黃茶(10935/3) 外: 淡白(2.337/1)	1mmの砂利・黒母 含	直筒部1/4残		
167-14-2	S220	B-9 土壁脚 部	13.4	3.3	—	底面外側ハケズリ、内 面ベニガタ・暗緑	煙(387/6)	粗良	口縫部1/6残	
168-14-4	S220	B-9 土壁脚 部	20.8	2.3	—	底面外側ハケズリ、内 面ナジ	底白(387/4)	粗良	口縫部1/12以下 直筒部	
169-14-1	S220	B-9 土壁脚 部	17.6	2.3	—	底面外側調査。他はナ ジ	煙(387/6)	粗良	口縫部1/6残	
170-10-3	S220	B-9 土壁脚 部	16.8	—	ハケメ	煙(387/6)	2mmの砂利含	口縫部1/12残		
171-33-5	S220	B-9 陶製土器 脚柱	21.0	3.9	ハラミガキ	外: 淡綠(1088/6) 内: 黃(022/2)	1mmの砂利・黒母 含	口縫部1/4残	A類。	
172-14-3	S220	B-9 陶製土器 脚柱	13.0	—	ロクロナジ	底白(387/4)	粗良	口縫部1/6残		
173-10-2	S220	B-9 陶製土器 脚柱	25.3	—	—	外側ハメナジ、内面ナジ にじる煙(388/4)	2mmの砂利含	口縫部1/12以下 直筒部	被覆埴物の焼成感か。	
174-10-1	S220	B-9 陶製土器 脚柱	26.8	—	脚柱付 20.4	ロクロナジ	外: 淡緑(7.3167/2) 内: 布紋(7.3167/3)	粗良	小片 焼成感成気味。脚柱移は仮定。	
175-33-4	S842	E-2 土壁脚 部	16.8	1.9	—	底面外側調査。他はナ ジ	煙(387/6)	粗良	口縫部1/2残	
176-13-6	S842	E-2 土壁脚 部	—	—	テヅ	煙(2.387/6)	粗良	脚柱上半完存		
177-14-6	S842	E-2 陶製土器 脚柱	18.0	—	—	外側未調査、内面ナジ にじる煙(388/4) 内: 淡緑(388/4) 外: にじる煙(3937/4)	2mmの砂利含	小片 口縫部	口縫部は仮定。	
178-13-3	S842	E-2 紙張脚 部	—	—	高台付 (2.7)	ロクロナジ	外: 淡緑(388/4) 内: 淡緑(5.3167/3)	1mmの砂利・黒母 含	口縫部1/4残	
179-60-1	S842	P-3 土壁脚 部	14.5	2.5	—	底面外側調査。他はナ ジ	煙(387/6)	1mmの砂利含	口縫部1/4残	口縫部に保材。
180-32-1	S842	P-3 黑色土 脚柱	17.5	3.8	高台付 9.8	底面内側ハケズリ、 底全削除し、赤色ナジ	明褐色(7.3165/6)	2mmの小石含	口縫部1/4残、黃 色にはげ付含	
181-32-3	S842	P-3 脚柱	15.3	5.0	底面 19.6	底面工芸ナジ、外側未 調査	にじる煙(7.3166/4)	2mmの小石含	小片 口縫部は仮定。	
182-40-2	S880	E-3 脚柱	14.7	2.7	—	底面外側未調査。内面施 新焼成	煙(388/6)	2mmの砂利含	口縫部1/6残	
183-51-3	S880	E-3 土壁脚 部	15.6	3.0	—	底面外側未調査。他はナ ジ	底白(388/6)	2mmの砂利含	口縫部1/3残	
184-51-2	S880	P-3 土壁脚 部	20.6	3.0	—	底面外側未調査。他 はナジ	煙(387/6)	粗良	口縫部1/12残	
185-5-8	S880	P-3 土壁脚 部	20.6	—	—	底面外側ハケズリ、他 はナジ	煙(387/6)	微砂粒若干含	口縫部1/6残	
186-31-3	S841	W-10 P1	14.9	3.3	—	底面外側未調査。他はナ ジ	煙(389/6)	2mmの砂利含	ほぼ完形	
187-51-1	S841	W-10 P1	18.6	2.4	—	底面外側未調査。他はナ ジ	煙(387/6)	微砂粒・黒母含	口縫部1/6残	
188-51-6	S812	L-6 P1	17.8	6.4	底面 19.6	底面工芸ナジ、 内面工具ナジ	外: 黄(2.3196/6) 内: 淡緑(7.3167/6)	2mmの砂利含	口縫部1/12以下 直筒部	口縫部は仮定。
189-51-4	S813	L-6 P10	17.6	3.1	—	底面外側未調査。他はナ ジ	煙(387/6)	2mmの砂利含	口縫部1/6残	
190-51-5	S813	L-6 陶製土器 脚柱	8.0	1.0	テヅ	にじる煙(7.3167/4)	黒母含	口縫部1/6残		
191-50-1	S813	L-6 陶製土器 脚柱	—	—	底柱 15.0	テヅ	煙(2.387/6)	微砂粒含	底部小片 直筒部は仮定。	
192-69-5	—	B-9 陶製土器 包含層	—	—	—	外側実調、内面ナジ にじる煙(387/4)	2mm以下の砂利 多含	口縫部小片		
193-22-7	—	B-9 陶製土器 包含層	—	—	—	瓦井頭面ハケズリ、 内面工具ナジ	煙(386/6)	粗良	瓦井部1/6残	
194-43-2	—	B-8 陶製土器 包含層	—	—	—	瓦井頭面ハケズリ、 内面工具ナジ	煙(387/6)	粗良	瓦井部1/4残 口縫部と瓦井部の間にハケズリ。	
195-54-7	—	B-8 陶製土器 包含層	—	—	—	瓦井頭面ハケズリ、 内面工具ナジ	にじる煙(388/4)	1.5mm以下の砂利 多含	口縫部1/6残	
196-28-5	—	B-9 陶製土器 包含層	—	—	—	底面外側未調査。他はナ ジ	内: 陶赤褐色(2.3195/9) 内: 淡白(2.3196/0)	1mm以下の小石、 赤色含	直筒部1/4残	内面に難解。
197-69-9	—	B-9 陶製土器 包含層	—	—	—	内面ハケズリ、内面ナ ジ	煙(387/6)	微砂粒・赤色含	直筒部小片	内面に難解。
198-57-5	—	B-1-9 陶製土器 包含層	18.6	6.0	—	底面外側ハケズリ、他 はナジ	煙(387/6)	1mmの砂利若干含	口縫部1/6残	焼成不良のため無理状。
199-69-8	—	B-9 陶製土器 包含層	14.2	3.5	テヅ	にじる煙(388/4) 内: 灰(386/6)	微砂粒含	口縫部1/12残	焼成不良のため無理状。	
200-69-2	—	B-9 陶製土器 包含層	18.6	6.5	—	テヅ、底面外側ハケズ リ	煙(386/6)	赤色含	口縫部1/12残	層理が僅しく調査不明感。
201-60-4	—	—	12.7	3.0	—	底面外側未調査、内面ナ ジ	内: 灰(387/6)	2mmの砂利多含	1/3残	層理が僅しく調査不明感。
202-27-3	—	B-9 陶製土器 包含層	14.4	3.3	テヅ	煙(386/6)	2mm以下の砂利含	口縫部1/6残		

第1表 遺物観察表

番号	実験 番号	遺構 形態	出土 位置 状況	断面 寸法 高さ その他の 特徴	出土量 (kg)	調査法の特徴	色・調 色	粘土	残存度	備考
203	9-1	—	土壌層 土壌層 既存層	14.1 3.1		遺漏外側へラクタリ、他 はナダ	褐色(2.0386/6)	粗良	口縁部1/6周	内面に施刻「8」。 内面に施刻「8」。摩耗により調査 不鮮明。
204	9-2	—	土壌層 土壌層 既存層	13.5 3.0		遺漏外側へラクタリ、他 はナダ	褐色(3.0376/6)	粗良	口縁部1/6周	内面に施刻「8」。摩耗により調査 不鮮明。
205	27-6	—	土壌層 土壌層 既存層	13.0 6.2		遺漏外側へラクタリ、内 外に漆(3.0386/6) 漆タシ等埋入		1mm以下の砂粒含 有	口縁部1/6周	
206	47-4	—	土壌層 土壌層 既存層	15.4 3.1		—	褐色(3.0386/6)	粗良	口縁部1/6周	摩耗が進んで調査不鮮明。
207	59-4	—	土壌層 土壌層 既存層	12.6 2.9		遺漏外側へラクタリ、他 はナダ		1.5mm以下の砂 粒+赤色粘土	口縁部1/6周	内面にランセン等文。
208	42-4	—	土壌層 土壌層 既存層	15.0 3.1		ナダ	浅黒(7.0386/6)	粗良含	口縁部1/6周	
209	54-6	—	土壌層 土壌層 既存層	17.0 6.0		遺漏外側へラクタリ、他 はナダ	褐色(3.0386/6)	微砂粒+赤色粘 土	口縁部1/12周	摩耗が進んで調査不鮮明。
210	65-4	—	土壌層 土壌層 既存層	16.0 3.2		既存外側未調査段、他は ナダ	褐色(3.0386/6)	1mm以下の砂粒含 有	口縁部1/6周	摩耗が進んで調査不鮮明。
211	66-5	—	土壌層 土壌層 既存層	13.5 3.1		遺漏外側へラクタリ、他 はナダ	褐色(3.0386/6)	1mmの砂粒含	口縁部1/6周	摩耗が進んで調査不鮮明。
212	48-1	—	土壌層 土壌層 既存層	14.0 3.1		ナダ	褐色(2.0386/6)	1mm以下の砂粒+ 赤色粘土	口縁部1/6周	
213	54-2	—	土壌層 土壌層 既存層	16.5 3.2		遺漏外側未調査、他はナ ダ		1mm以下の砂粒+ 赤色粘土	口縁部1/12周	
214	54-11	—	土壌層 土壌層 既存層	14.4 3.0		—	褐色(3.0386/6)	1mm以下の砂粒+ 赤色粘土	口縁部1/6周	摩耗が進んで調査不鮮明。
215	40-3	—	土壌層 土壌層 既存層	14.1 3.0		遺漏外側へラクタリ 他はナダ	褐色(3.0386/6)～褐 色(3.0386/6)	2mmの砂粒含 有	1/3周	
216	57-8	—	土壌層 土壌層 既存層	17.0 3.5		遺漏外側へラクタリ、内 外に漆(7.0386/6) 内にぶら下垂(3.0386/6)		1mmの砂粒若干含 有	口縁部1/12周	器内外に漆斑、保付書か。
217	67-3	—	土壌層 土壌層 既存層	16.0 3.0		遺漏外側へラクタリ、他 はナダ	褐色(7.0386/6) 内に漆(2.0386/6)	0.5mmの砂粒含 有	口縁部1/6周	摩耗が進んで調査不鮮明。
218	28-3	—	土壌層 土壌層 既存層	—	—	遺漏外側未調査、内側ナ ダ	褐色(3.0386/6)	2.5mm以下の砂 粒+赤色粘土	口縁部1/6周	内面に擦子状斑見、摩耗が進んで調 査不鮮明。
219	48-10	—	土壌層 土壌層 既存層	—	—	内面へラクタリ、内側ナ ダ	褐色(3.0386/6)	2mm以下の砂粒+ 赤色粘土	高麗小片	内面に擦子。
220	42-7	—	土壌層 土壌層 既存層	—	—	既存外側へラクタリ、内 外に漆(2.0386/6) 内に漆(3.0386/6)		粗良	高麗小片	内面に擦子。
221	65-7	—	土壌層 土壌層 既存層	20.0 6.6		既存外側未調査、内側ナ ダミガタ	褐色(3.0386/6)	粗良	口縁部1/12周	
222	54-5	—	土壌層 土壌層 既存層	15.4 3.1		既存外側へラクタリ、他 はナダ	褐色(3.0386/6)	微砂粒+赤色粘 土	口縁部1/6周	摩耗が進んで調査不鮮明。
223	66-6	—	土壌層 土壌層 既存層	—	—	既存外側未調査、他はナ ダ	褐色(3.0386/6)	粗良	高麗小片	
224	62-3	—	既存層 既存層 既存層	14.0 2.6		既存外側未調査、他はナ ダ		金留物、1mm以下 の砂粒含	口縁部1/6周	内面に擦子。
225	54-4	—	土壌層 土壌層 既存層	14.2 2.9		既存外側未調査、他はナ ダ		微砂粒含	口縁部1/12周	内面に擦子。
226	64-3	—	土壌層 土壌層 既存層	15.0 3.2		既存外側へラクタリ、内 外に漆タシ等埋入	褐色(2.0386/6)	粗良含	口縁部1/6周	
227	67-6	—	土壌層 土壌層 既存層	14.0 2.0		既存外側へラクタリ、他 はナダ	褐色(3.0386/6)	粗良	口縁部1/6周	
228	42-6	—	土壌層 土壌層 既存層	—	—	既存外側未調査、内側ナ ダセンヒタ	褐色(2.0386/6) 内にぶら下垂(1.0387/3)	粗良	高麗小片	内外面に擦子。
229	33-2	—	土壌層 土壌層 既存層	14.5 3.0		既存外側未調査、他はナ ダ	褐色(3.0386/6)	1mmの砂粒+銀 箔含	口縁部3/4周	内外面に保付書。
230	58-4	—	土壌層 土壌層 既存層	14.0 2.9		既存外側未調査、他はナ ダ	内にぶら下垂(2.0387/3) 内にぶら下垂(3.0387/4)	1.5mmの砂粒+銀 箔含	1/3周	
231	65-5	—	土壌層 土壌層 既存層	16.0 2.5		既存外側未調査、他はナ ダ		微砂粒若干含	口縁部1/6周	
232	54-3	—	土壌層 土壌層 既存層	14.0 2.8		既存外側未調査、他はナ ダ		微砂粒+赤色粘 土	口縁部1/12周	内面から縁端部外側に保付書。
233	59-5	—	既存層 既存層 既存層	12.1 4.0		既存外側へラクタリ、他 はナダ	褐色(3.0386/6)	1mm以下の砂粒+ 銀箔含	口縁部1/12周	
234	57-7	—	土壌層 土壌層 既存層	—	—	—	浅黒(7.0386/6)	粗良	口縁部1/12周	摩耗が進んで調査不鮮明。
235	47-3	—	既存層 既存層 既存層	25.8 —		ナダ、工具ナダ	内にぶら下垂(1.0386/4)	粗良	口縁部1/12周	
236	54-9	—	既存層 既存層 既存層	—	—	既存外側未調査、内 外に漆タシ等埋入	褐色(3.0386/6)	赤色粘土含	脚部1/6周	摩耗が進んで調査不鮮明。
237	63-3	—	土壌層 土壌層 既存層	—	—	既存外側へラクタリ、内 外に漆タシ等埋入	褐色(2.0386/6)	脚部既存		
238	53-8	—	既存層 既存層 既存層	—	—	既存外側へラクタリ、内 外に漆タシ等埋入	褐色(3.0386/6)	赤色粘土含		
239	9-3	—	土壌層 土壌層 既存層	18.4 2.9		既存外側へラクタリ、他 はナダ	褐色(2.0386/6)	1mmの砂粒含	口縫既存	
240	9-4	—	土壌層 土壌層 既存層	20.7 2.3		既存外側へラクタリ、他 はナダ	褐色(2.0386/6)	1mmの小石含	口縁部1/6周	内面に施刻「8」。摩耗により調査 不鮮明。
241	59-2	—	既存層 既存層 既存層	22.0 2.3		既存外側へラクタリ、内 外に漆タシ等埋入	褐色(3.0386/6)	2mm以下の砂粒+ 赤色粘土含	口縁部1/12周	
242	68-3	—	既存層 既存層 既存層	18.7 2.1		既存外側へラクタリ、他 はナダ	褐色(3.0386/6)	1mm以下の砂粒+ 赤色粘土含	口縁部1/6周	
243	27-1	—	既存層 既存層 既存層	18.2 2.4		既存外側へラクタリ、内 外に漆タシ等埋入	褐色(3.0386/6)	1mm以下の砂粒含	口縁部1/6周	
244	54-8	—	既存層 既存層 既存層	18.6 2.3		既存外側へラクタリ、内 外に漆タシ等埋入	褐色(3.0386/6) 内にぶら下垂(1.0387/4)	1.5mm以下の砂 粒含	口縁部1/12周	
245	47-1	—	既存層 既存層 既存層	23.1 2.5		既存外側へラクタリ、他 はナダ	褐色(3.0386/6)	1mmの砂粒含	口縁部1/12周	
246	59-3	—	既存層 既存層 既存層	22.2 1.8		既存外側へラクタリ、他 はナダ	褐色(3.0386/6)	1mm以下の砂粒+ 赤色粘土含	口縁部1/12周	内面にハケメ状の積き取り痕。
247	68-4	—	既存層 既存層 既存層	20.4 2.1		既存外側へラクタリ、他 はナダ	褐色(3.0386/6)	微砂粒+赤色粘 土含	口縁部1/6周	摩耗が進んで調査不鮮明。

第1表 遺物観察表

番号	実験 番号	遺構 形態	出土 状況	断面 形状	出 量 (cm)	調査該段の特徴	色 調	土 質	残存度	備 考	
248	59-7	包含層	土師器 底	口徑 底高 その他	18.6	2.6	泥質外表面調査。他ロナ ジ	明赤褐色 (SYR5/6)	1mm以下の砂粒・ 母岩含	口縁部1/6塊	
249	59-6	包含層	土師器 底	口徑 底高 その他	18.6	2.2	泥質外表面調査。他ロナ ジ	明赤褐色 (SYR6/6)	1mm以下の砂粒含	口縁部1/6塊	
250	59-8	包含層	土師器 底	口徑 底高 その他	20.7	2.1	泥質外表面調査。他ロ ナジ	橙 (T, SYR7/6)	黄色相・微細粒 含	口縁部1/12塊	
251	39-1	—	—	—	17.9	2.3	泥質外表面調査。他ロナ ジ	棕 (SYR6/6)	稍良	口縁部1/6塊	
252	39-3	—	C-1 包含層	土師器 底	18.5	2.6	泥質外表面調査。他ロナ ジ	棕 (SYR7/6)	稍良	口縁部1/4塊	
253	42-5	—	C-4 包含層	土師器 底	9.0	1.4	泥質外表面調査。他ロナ ジ	浅黄褐色 (SYR8/4)	稍良	口縁部1/6塊	
254	42-8	—	C-4 包含層	土師器 底	9.0	1.2	外表面調査、内面ナ ビ等	灰白・櫻 (T, SYR7/4)	稍良	口縁部1/6塊	
255	82-4	—	包含層	土師器 底	14.0	3.2	泥質外表面調査。他ロナ ジ	灰白・黄褐色 (SYR9/7/3)	2mm以下の砂粒含	口縁部1/4塊	
256	85-6	—	E-4 包含層	土師器 底	12.0	3.7	泥質外表面調査。他ロナ ジ	浅黄褐色 (SYR9/3)	稍良	口縁部1/6塊	
257	48-5	—	E-9 包含層	土師器 底	13.7	3.9	ナゲ —	浅黄褐色 (T, SYR6/4)	微砂粒含	口縁部1/6塊	
258	48-2	—	F-7 包含層	土師器 底	14.0	2.9	泥質外表面調査。他ロナ ジ	浅黄褐色 (SYR8/3)	稍良	口縁部1/6塊	
259	48-7	—	F-9 包含層	土師器 底	12.6	3.1	外表面調査、他ナゲ 等	灰白・櫻 (T, SYR7/4)	微砂粒・色彩相 合	口縁部1/6塊	
260	49-4	—	F-9 包含層	土師器 底	12.4	3.4	外表面調査、内面ナ ビ	浅黄褐色 (SYR8/3)	微砂粒・色彩相 合	口縁部1/4塊	
261	33-1	—	I-2 包含層	土師器 底	13.4	3.4	泥質外表面調査。他ロナ ジ	浅黄褐色 (SYR9/3)	3mmの砂粒含	完形	内面に麻斑。
262	58-5	—	I-4 包含層	土師器 底	13.8	—	外表面ナメル・鉄工具ナ ビ、内面工具ナビ	内:灰白・紫褐色 (SYR7/3) 外:灰白・紫褐色 (SYR7/4)	1mmの砂粒・紫母 岩含	口縁部1/12塊	外側のナメルは非常に繊かく弱いもので、未調査にちかい。
263	46-3	—	I-9 包含層	土師器 底	16.0	—	ハケメ	内:灰白・紫褐色 (SYR7/4) 外:灰白・紫褐色 (SYR7/3)	稍良	口縁部1/12塊	
264	45-4	—	I-9 包含層	土師器 底	16.0	—	ハケメ	内:灰白・紫褐色 (SYR7/4) 外:灰白・紫褐色 (SYR7/3)	1mmの砂粒含	口縁部1/12塊	
265	37-5	—	I-2 包含層	土師器 底	16.0	—	外表面ハケメ、内面ナフ タリ	内:灰白・紫褐色 (SYR8/3) 外:浅黄褐色 (SYR8/3)	1mmの砂粒若干含	口縁部1/3塊	
266	66-2	—	I-4 包含層	土師器 底	18.0	—	ハケメ	内:灰白・櫻 (SYR7/3)	2mmの砂粒含	口縁部1/12塊	
267	65-2	—	I-8 包含層	土師器 底	17.8	—	ハケメ	外:灰白・櫻 (SYR7/3) 内:灰白・紫褐色 (SYR8/3)	稍良	口縁部1/6塊	外一面に保村土。
268	43-2	—	I-8 包含層	土師器 底	18.0	—	外表面ナメル・内面ナ フタリ	内:灰白・紫褐色 (SYR8/3)	1.5mmの砂粒・紫 母岩含	縦断面1/4塊	
269	66-1	—	I-9 包含層	土師器 底	21.0	—	ハケメ	内:灰白・黃褐色 (SYR7/4)	稍良	口縁部1/12塊	
270	45-3	—	I-7 包含層	土師器 底	24.1	—	外表面ハケメ、内面工具ナ ビ	内:灰白・黃褐色 (SYR7/3)	2mmの砂粒含	口縁部1/12塊	外一面に保村土。
271	32-6	—	I-2 包含層	土師器 底	18.0	—	外表面ハケメ、内面ナ ビ	内:櫻 (SYR7/2) 外:深黄褐色 (SYR8/3)	2mm以下の砂粒含	口縁部1/12塊	
272	66-1	—	P-3 包含層	土師器 底	14.0	—	外表面ハケメ、内面ナ ビ	内:灰白・紫褐色 (SYR8/3) 外:灰白・紫褐色 (SYR8/3)	1mmの砂粒・紫母 岩含	口縁部1/6塊	
273	45-1	—	S-9 包含層	土師器 底	18.9	—	外表面ナビ、内面工具ナ ビ	内:灰白・櫻 (SYR8/4) 外:灰白・紫褐色 (SYR8/3)	2mmの砂粒含	口縁部1/6塊	外一面に保村土。
274	41-4	—	S-4 包含層	土師器 底	23.6	—	ハケメ	外:櫻 (SYR7/4) 内:灰白 (SYR8/1)	紫母岩含	口縁部1/6塊	
275	44-2	—	S-2 包含層	土師器 底	40.4	—	ハケメ	内:灰白・黃褐色 (SYR7/4)	2mmの砂粒含	口縁部1/12塊	口縁部外面に洗疊。
276	44-1	—	S-4 包含層	土師器 底	45.1	—	ハケメ	浅黄褐色 (SYR9/2)	3mmの砂粒含	口縁部1/12塊	横断面底部を強く洗疊ナ ビ。
277	44-3	—	S-9 包含層	土師器 底	26.0	—	外表面ナビ、内面ハ ケメ	内:灰白・櫻 (SYR8/4)	1mmの砂粒含	口縁部1/12塊	
278	44-2	—	S-2 包含層	土師器 底	13.0	—	ハケメ	内:灰白・櫻 (SYR7/3)	稍良	口縁部1/6塊	
279	62-1	—	包含層	土師器 底	26.0	—	ハケメ	内:灰白・櫻 (SYR7/4)	3mm以下 の砂粒含	口縁部1/6塊	
280	59-1	—	S-8 包含層	土師器 底	26.0	—	外表面ハケメ、内面工具ナ ビ	内:灰白・櫻 (SYR8/4) 外:灰白・紫褐色 (SYR8/2)	1mm以下の砂粒含	口縁部1/6塊	
281	41-5	—	S-4 包含層	土師器 底	26.0	—	ハケメ	内:灰白・櫻 (SYR7/4)	1.5mmの砂粒・紫 母岩含	口縁部1/6塊	
282	64-1	—	S-2 包含層	土師器 底	14.0	—	ハケメ	浅黄褐色 (SYR8/3)	稍良	口縁部1/6塊	
283	41-1	—	S-9 包含層	土師器 底	26.0	—	ハケメ	内:灰白・櫻 (SYR7/4)	紫母岩若干含	口縁部1/6塊	
284	62-2	—	包含層	土師器 底	24.0	—	ハケメ	外:灰白・紫褐色 (SYR8/4) 内:灰白・紫褐色 (SYR8/4)	赤色鉄・2mm以 下の砂粒含	口縁部1/12塊	
285	58-2	—	S-1 包含層	土師器 底	23.0	—	ハケメ	内:灰白・黃褐色 (SYR7/4)	紫母岩若干含	口縁部1/6塊	
286	49-2	—	S-9 包含層	土師器 底	34.0	—	ハケメ	内:灰白・黃褐色 (SYR8/3) 内:灰白 (SYR8/2)	4mm以下の砂粒含	口縁部小片	口縁部は洗疊。
287	60-1	—	S-8 包含層	土師器 底	37.6	—	ハケメ	内:灰白・紫褐色 (SYR8/2) 内:灰白・紫褐色 (SYR8/2)	1.5mm以下の砂粒 含	口縁部小片	
288	60-3	—	S-9 包含層	土師器 底	37.8	—	ハケメ	浅黄褐色 (SYR8/4)	3mm以下の砂粒含	口縁部小片	
289	49-1	—	S-1 包含層	土師器 底	36.3	—	ハケメ	内:灰白・黃褐色 (SYR7/4)	3mm以下の砂粒含 赤色鉄含	口縁部1/12塊	
290	66-5	—	S-4 包含層	土師器 底	—	—	赤色鉄・外表面ハ ケメ	内:灰白・黄褐色 (SYR8/3) 内:灰白 (SYR8/2)	2mmの砂粒含	基盤1/12塊	底部孔は円形。
291	53-5	—	S-4 包含層	土師器 底	—	—	灰褐色 —	内:灰白 (SYR7/4) 内:灰白 (SYR7/4)	3mm以下の砂粒多 含	底面1/6塊	
292	49-3	—	—	土師器 底	—	—	灰褐色 —	内:灰白 (SYR8/3) 内:灰白 (SYR8/4)	4mm以下の砂粒含	基盤1/6塊	

第1表 遺物観察表

番号	実測 番号	遺構 名	出土 位置	断面 形状	出 量 (kg)	調査方法の特徴	色 調	土質	残存度	備 考	
				口付 高さ その他							
290	66-4	包含層	土壌層	25.6	—	テグ	外：灰褐色(7, 0100/2) 内：灰褐色(7, 0100/2)	塊状	口縁部1/12以下	口縁部は既定。	
291	43-4	C-1 包含層	土壌層	48.9	—	外面ハケメ、内面ナガ	外：灰褐色(7, 0100/2) 内：灰褐色(7, 0100/2)	塊状	口縁部小片	口縁部は既定。	
292	54-10	D-6 包含層	土壌層	33.0	—	テグ	浅黄色(10YR10/3)	塊状	口縁部小片	口縁部は既定。	
296	66-2	P-5 包含層	削取土跡 地盤	18.3	4.6	外表面調整、内面ナガ	外：褐(30YR10/0) 内：灰褐色(7, 0100/2)	1.5mm以下の砂粒含	小片	口縁部は既定。	
297	42-9	H-4 包含層	削取土跡 地盤	20.6	—	外表面調整、内面工具ナ ゴ	浅黄色(7, 0100/4)	2mmの砂粒含	口縁部小片	口縁部は既定。	
298	83-1	—	包含層	—	直線	外表面調整、内面ナガ	褐(2, 0100/6)	2mm以下の砂粒含	底面1/12残		
299	59-9	—	包含層	20.0	—	ヘアミガキ	外：灰褐色(10YR5/4) 内：黑(2, 0102/1)	1mm以下の砂粒含 金属含	口縁部1/12残	A解。	
300	66-7	P-4 包含層	ロクロ土跡跡 地盤	—	直線	底面外表面切欠調整、相 当口縁ナゴ	褐(7, 0100/2)	塊状	底面1/4残		
301	43-1	—	土壌層	—	—	ハケメ	浅黄色(10YR10/3)	塊状	脚付近小片		
302	82-5	G-9 包含層	土壌層 カット	—	—	外表面調整ハケメ、内 面ナガ	外：灰褐色(7, 0100/3)	2mm以下の砂粒含	小片	小片のため器種不明。	
303	33-5	C-7 包含層	土壌	1.8	—	埋存量 11.9kg	テグ	浅黄色(10YR10/4)	塊状	口縫丸根	孔径径mm。
304	50-2	E-3 包含層	土壌層	16.8	2.8	天井側外表面クロケズ リ、他ロクロナゴ	外：灰(50YR10/0) 内：灰(50YR10/0)	0.5mmの砂粒含	天井部1/12残	天井部外表面に擦刻。	
305	66-3	F-1 包含層	土壌層	20.0	—	ロクロナゴ	外：灰褐色(7, 0100/2) 内：灰(50YR10/0)	鐵砂粒若干含	口縁部1/12残	内部に自然軸がかかる。	
306	42-10	G-6 包含層	土壌層	—	—	天井側外表面クロケズ リ、他ロクロナゴ	外：灰(50YR10/0)	塊状	天井部1/4残	擦刻が激しい。成不成。	
307	53-3	G-5 包含層	土壌層	16.4	—	天井側外表面クロケズ リ、他ロクロナゴ	外：灰(50YR10/0) 内：黄(2, 0100/1)	鐵砂粒含	口縁部1/12残		
308	37-2	I-9 包含層	高台性 削取土跡 地盤	13.0	3.2	高台性 底面外表面調整、他ロコ ロナゴ	外：灰(2, 0100/1)	0.5mmの砂粒含	底面1/2残		
309	37-4	—	包含層	—	—	高台性 底面外表面調整、他ロコ ロナゴ	灰(40YR10/1)	1mm以下の砂粒含	高台に別体芦軒着。		
310	42-2	C-6 包含層	土壌層	16.5	6.0	高台性 底面外表面調整、他ロコ ロナゴ	灰(40YR10/1)	1mm以下の砂粒含	1/6残		
311	53-1	H-2 包含層	土壌層	—	—	高台性 底面外表面クロケズリ、 他ロコロナゴ	灰(2, 0100/1)	1mmの砂粒含	高台外表面に打ち灰いてる。		
312	33-3	A-6 包含層	土壌層	—	—	高台性 底面外表面調整、他ロコ ロナゴ	外：灰(2, 0100/2) 内：灰(2, 0100/1)	鐵砂粒含	底面1/12残	擦刻が激しい。成不成。	
313	63-5	—	包含層	—	—	埋存量 13.7	ロクロナゴ	灰(2, 0100/1)	3mm以下の砂粒含	体部1/4残	
314	63-4	—	包含層	—	—	埋存量 11.1	ロクロナゴ	灰(50YR10/0)	1mm以下の砂粒含	外表面に自然軸がかかる。	
315	63-6	—	包含層	—	—	高台性 底面外表面調整、他ロコ ロナゴ	灰(50YR10/0)	1mm以下の砂粒含	底面1/2残		
316	38-2	P-4 包含層	土壌層	—	—	高台性 底面外表面クロケズリ、 他ロコロナゴ	灰(2, 0100/1)	2mmの砂粒含	体部1/2残	体部にヘタ記号「×」。	
317	60-2	—	包含層	—	—	埋存量 —	ロクロナゴ	灰(2, 0100/1)	1mm以下の砂粒含	體部完全	
318	53-2	B-2 包含層	土壌層	—	—	直線	ロクロナゴ	灰(2, 0100/1)	1mm以下の砂粒含	底面1/4残	
319	58-1	—	包含層	—	—	直線	ロクロナゴ	灰(2, 0100/1)	1mm以下の砂粒含	口縫部1/12残	口縫部外表面に削剥部1/4+ヘタノ状 高台による抜い洗刷。
320	42-3	C-4 包含層	灰被物 地盤	—	—	ロクロナゴ	灰(2, 0100/1)	1mm以下の砂粒含	口縫部1/12残	灰被物ハケ盛り。	
321	45-6	—	灰被物 地盤	—	—	高台性 底面外表面ナゴ、他ロコ ロナゴ	灰(2, 0100/1)	塊状	底面1/6残		
322	57-1	D-4 包含層	灰被物 地盤	—	—	高台性 底面外表面調整、他ロコ ロナゴ	灰(2, 0100/1)	1mmの砂粒若干含	底面1/4残		
323	6-6	—	灰被物 地盤	—	—	高台性 底面外表面クロケズリ、 他ロコロナゴ	灰(2, 0100/1)	鐵砂粒若干含	口縫部1/4、底面 1/2残	灰被物ハケ盛り。	
324	53-4	D-4 包含層	灰被物 地盤	—	—	高台性 底面外表面クロケズリ、 他ロコロナゴ	灰(2, 0100/1)	1mm以下の砂粒含	口縫部1/6残		
325	64-5	D-6 包含層	灰被物 地盤	—	—	高台性 底面外表面切欠調整、相 当口縫ナゴ	外：灰褐色(10YR6/1) 内：灰褐色(2, 0100/2)	鐵砂粒含	底面1/12残		
326	58-3	A-3 包含層	灰被物 地盤	—	—	ロクロナゴ	外：灰(2, 0100/1) 内：灰(2, 0100/1)	2mmの砂粒含 鐵砂粒含	底面上半1/12残	外表面に灰被。	
327	63-2	—	包含層	—	—	高台性 底面外表面切欠調整、他 ロコロナゴ	灰(2, 0100/1)	1mm以下の砂粒含	底面1/2残		
328	57-3	B-4 包含層	山茶樹 地盤	—	—	高台性 底面外表面調整、他ロコ ロナゴ	灰(2, 0100/1)	鐵砂粒・露生苔 若干含	底面1/6残		
329	57-4	B-4 包含層	山茶樹 地盤	—	—	高台性 底面外表面切欠調整、他 ロコロナゴ	外：灰褐色(2, 0100/1) 内：灰褐色(2, 0100/1)	0.5mmの砂粒若干含	底面1/3残	底面に露生苔。	
330	60-8	—	包含層	—	—	高台性 底面外表面切欠調整、他 ロコロナゴ	灰(2, 0100/1)	塊状	底面1/4残		
331	57-2	D-4 包含層	山茶樹 地盤	—	—	高台性 底面外表面切欠調整、他 ロコロナゴ	灰(2, 0100/1)	1mm以下の砂粒含	底面1/2残		
332	60-1	D-2 包含層	山茶樹 地盤	—	—	高台性 底面外表面切欠調整、他 ロコロナゴ	灰(2, 0100/1)	1mmの砂粒含	底面1/4残	底面内露生苔、硬に転用か。	
333	64-4	D-4 包含層	山茶樹 地盤	—	—	高台性 底面外表面切欠調整、他 ロコロナゴ	灰(2, 0100/1)	1mmの砂粒若干含	底面1/4残	内露生苔、硬に転用か。	
334	62-1	B-4 包含層	山茶樹 地盤	—	—	高台性 底面外表面切欠調整、他 ロコロナゴ	灰(2, 0100/1)	塊状	底面1/4残	内露生苔、硬に転用か。	
335	60-1	B-2 包含層	山茶樹 地盤	—	—	高台性 底面外表面切欠調整、他 ロコロナゴ	灰(2, 0100/1)	1mm以下の砂粒含	底面1/4残	底面内露生苔、硬に転用か。	
336	45-5	B-4 包含層	山茶樹 地盤	—	—	高台性 底面外表面切欠調整、他 ロコロナゴ	灰(2, 0100/1)	塊状	底面1/4残		
337	20-3	—	—	—	—	圓面布 凸面ケズリ	外：灰褐色(80YR6/3) 内：灰褐色(2, 0100/1)	1mmの砂粒含	小片		
338	41-1	B-2 包含層	瓦 瓦瓦	—	—	凸面調打、圓面布	外：灰褐色(010YR6/3) 内：灰褐色(010YR6/3)	1mm以下の砂粒 含	1/3残	行基式。	

第1表 遺物観察表

VI. 結 語

1. 時期

今回の調査で検出された遺構の大半は奈良時代と平安時代のもので、出土遺物は、この時期の土師器杯・皿類が中心である。そこで、この種の遺物を大量に出土している史跡斎宮跡の編年に従って、詳細な時期を検討する。

(1) 奈良時代

奈良時代のものは出土遺物の大半を占め、特に土坑S K21及びその周辺に集中する。S K21出土の遺物は、遺構の状況から一括性には乏しいものの、土師器の杯皿類の多くは底部外面にヘラケズリを施す。しかし、外面にヘラミガキを施すものではなく、斎宮第I期第3段階～第4段階に並行するものと考えられる。堅穴住居S H16出土の土師器杯も同様な特徴をもつが器高が低く、共伴する土師器甕の肩の張る体部形態等から奈良時代でも末頃にちかく斎宮第I期第4段階としておきたい。一方、S H3出土の土師器杯は器高が高く放射暗文を施すものもあり、S H16より古相を示す。共伴する須恵器蓋・杯は猿

投の第IV期に収まるものであり、斎宮第I期第3段階としておきたい。他の奈良時代の遺構出土遺物や包含層出土遺物を加味した結果、奈良時代とした遺構は全て斎宮第I期第3段階～第4段階に相当するものと考えられ、その中心は斎宮第I期第4段階に並行するものである。したがって、若干遡る遺構があるものの奈良時代の後半、8世紀後半の時期が与えられる。

(2) 平安時代

平安時代としたものではS E 1から比較的まとまった出土があった。S E 1出土の土師器杯のうち、混入と考えられる151を除く153～158は、底部外面に指頭圧痕を残すものが多く、口縁端部も内に肥厚する様子がないことから、斎宮第II期第3段階から第4段階とほぼ並行する時期、概ね9世紀後半から10世紀前半の時期が与えられる。これは共伴する土師器甕161や灰釉陶器165の特徴とも矛盾しない。S E 20は混入遺物が多いものの、黒色土器171が出現していることや口径・器高共に縮小し、底部外面未調整、口縁部が外反する特徴の土師器甕169から同様

遺構名	規模			棟方向	柱間寸法 柱×奥 柱×幅(m) 柱行(m)	梁行(m)	柱間寸法 梁行(m)	時期	備考
	柱×奥	柱行(m)	梁行(m)						
SB4	3×2	5.85	3.6	N42° E	18+18+2.25 22.5+1.95+1.65		2.25+1.35	平安	SB5に切られる。
SB5	3×2	5.85	3.6	N42° E		1.8	2.1 2.25+1.35	平安	SB4を切る。
SB6	2×2	2.6	2.4	E8° N		1.3	1.2	奈良	
SB7	4×(2)	5.55	(1.95)	E22° N	1.5+1.35+1.2+1.5		1.95+α	平安	
SB9	3×2	5.1 5.55	3.6	N39° E	1.8+1.8+1.5 1.8+1.65+2.1		1.8	平安	北面に庇。
SB10	3×2	6.0	3.6	E19° S	2.4+1.8+1.8 2.25+1.95+1.8		1.8	平安	東側1間を間仕切。
SB11	3×2	5.25	4.05	E36.5° S	2.1+1.65+1.5 2.25+1.5+1.5		1.95+2.1 1.65+2.4	平安	
SB12	3×2	5.4	4.05	E21° S		1.8	2.4+1.65	平安	
SB13	3×2	5.1 4.65	3.75	E24° S	1.8+1.8+1.5 1.5+1.5+1.65		1.8+1.95 1.65+2.1	平安	SB14に切られる。
SB14	3×2	3.45	2.85	E3° N		1.15 0.9+1.2+1.35	1.35+1.5	奈良	SB13を切る。
SB15	(4)×2	(5.7)	3.3	N38° E	α+1.35+1.65+1.5+1.2 α+1.35+1.65+1.2+1.5		1.65	平安	間仕切あり。
SB17	3×3	4.65	4.35	N16° E		1.35+1.8+1.5 1.35+1.5+1.8	1.65+1.35+1.35 1.35+1.65+1.35	平安	
SB22	2×2	3.6	3.15	N2° E		1.8	1.5+1.65 1.65+1.5	平安	
SB23	4×(2)	7.05	3.15	E23° S	2.25+1.8+1.5+1.5 2.25+1.5+1.5+1.8		(1.65)+(1.5)	平安	
SB24	3×2	5.7	3.45	E9° S		2.1+1.8+1.8	1.5+1.95	平安	
SB25	(3)×(2)	(4.65)	(1.95)	E15° S	2.4+2.25+α		1.95+α	平安	

第2表 標立柱建物一覧表

な時期が与えられる。

建替え関係にある S B 4・5 柱穴出土遺物のうち、S B 5 柱穴から出土した土師器杯183は外反する口縁端部や底部未調整、比較的薄い器壁やヨコナデの範囲等の特徴から斎宮第II期第4段階と並行する時期が与えられる。S B 5 に先行する S B 4 からは、残存度の比較的良好な黒色土器椀180が出土しており、両者は10世紀初頭から中頃の約50年間に建替えられ、その後廃絶したものと考えられる。さらに、これらと棟方向を揃える S B 9・11・15も同時期に推定できる。さらに、S A41柱穴から完形で出土した土師器杯186も S B 5 と同様の特徴をもち、同時期と考えたい。

さて、S B 11 の棟方向を変えて建替えた S B 12 と方向を揃えるものに S B 10・17・21・25があり、これらが一群を構成する。

S B 13 から出土した土師器皿190は小型化したもので器高も限界ちかくまで低下していることから斎宮第III期第3段階に並行するものと考えられ、同じ柱穴から共伴する土師器杯189の特徴とも矛盾はない。したがって、当遺跡検出の掘立柱建物のうち最も新しく、11世紀後半のものとなる。S B 13 の棟方向は、S B 12 の一群とほぼ同じである。このため、その一群の時期を斎宮第III期第3段階まで引き下げ、同じ一群とすべき推測も成り立つ。しかし、既述したように S B 12 が S B 11 を建替えたものならば、両者に100年以上の期間を与えることになり、一般的に掘立柱建物の寿命が20年程度とされることと矛盾する。S B 12 からは黒色土器片が出土していること、斎宮第III期第3段階に並行する遺物の出土が包含層を含めても極めて少ないとから、S B 12 の一群を S B 11 の一群の直後に続くものとして、S B 13 は単独で斎宮第III期第3段階に並行する時期と考えたい。なお、S B 7・22・24については、詳細な時期を決定する根拠を欠き、ここでは平安時代とするに止める。

以上の結果から、平安時代の遺構は平安時代中頃と末頃の2時期に大きく分かれる。前者では井戸出土遺物に若干古い特徴を示すものがあるが、井戸は掘立柱建物に伴うと考え、同時期としておきたい。

2. 記号

今回の調査結果の特徴として、何らかの記号が付けられた土器が39点も出土していることがある。この内、古墳時代の須恵器に付けられたものが2点ある他は全て奈良時代に属するものである。

奈良時代に属するものの出土分布は非常に偏っており、SK21及びその周辺包含層等からの出土が記号を付けた遺物の90%を占める。器種別では、土師器粗製椀に付けられたものが3点の他は全て土師器の杯皿類である。

次に記号の種類としては、「#」と記すものが多く、小片であるが「#」と推測できるものを含めて60%を占めることになる。小片のため直線部分しか確認できなかったものが、それ一部である可能性を秘めると、記号の大半が「#」であったものと推測できる。関東地方出土の墨書き土器の字形を研究した平川南は『各地の墨書き及び線刻の「#」の多くのものが井戸の「井」ではなく、その字形から判断すると、呪符等に用いられるドーマンとよばれる魔除け記号の「#」と理解できる』と結論付けている。³⁾ 斎宮跡出土のものを集成した大川勝宏は、井戸等の湧水関係遺構からの出土がないことに着目し、字形の観察を含め平川の意見に同意している。当遺跡のものの大半は焼成後に鋭利な工具により線刻されており、その形態から井戸の「井」とするよりは、直線を交差させたものと解する方が妥当で、やはり平川に同調できるものである。この他に格子状のもの(218)、「#」を○で閉むもの(106・197・228)、格子を○で閉むもの(219)があるが、斎宮跡でも類似のものが出土しており呪的な記号と理解されている。

このように、奈良時代には当遺跡において魔除け関係の祭祀が行われており、SK21はその際に使用された土器の魔除場所であったようである。また、その祭祀に使用された土器は土師器の杯皿類であったことが分かる。

3. 遺構の変遷と性格

今回の調査では、縄文土器や古墳時代後～末頃の須恵器が出土しており、それぞれの時代に宮ノ沖遺跡での人々の営みが想定できるが、それを示す遺構

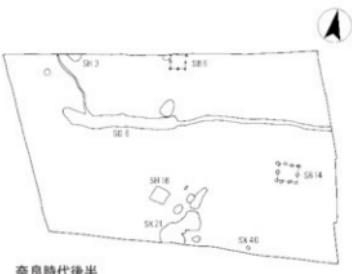
はない。古墳時代の遺物については、隣接する美濃田古墳群や別当垣外遺跡の影響が考えられるが詳細は不明である。ここでは、今回の中心時期である奈良～平安時代について、記述した詳細な時期をもとに当調査区の遺構変遷とその特徴にふれる。

(1) 奈良時代後半=斎宮第Ⅰ期第3～4段階並行
湧水溝 S D 8、堅穴住居、墓、倉庫屋の建物2棟、多数の土坑等で構成される。注目されるのが調査区を東西に横切る SD 8である。SD 8はその西端から湧水し、東へ流れ出る溝であるが、既述したように西側と東側では大きく様相が異なり、東側が排水溝状を呈するのに対し、西側は溝状の湧水池的な状況を呈している。水汲み場とするには長さ20mの規模は過大と思われ、湧水に関する何らかの祭祀を行う場所であったと推測したいところである。一方、調査区南端の SK 21からは、既述したように魔除け関係の祭祀に使用された土器が多く投棄されている。SD 8からの魔除け記号を付けた土器の出土は1点に止まり、他に祭祀を想定できる遺物の出土もない。したがって、今のところ両者を関係付けることは拙速である。また、両者の間に位置する堅穴住居 SH 16は一辺2.5mの小型のものである。この時期の堅穴住居は規模が縮小する傾向にあり、一辆4mほどのものが主流となっている。こうした傾向のなかでも小型の部類にはいり、住居としての機能に疑問のあるものである。したがって、特殊な機能を想定したいところであるが、祭祀関係の遺物は出土していない。

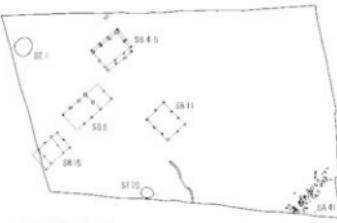
以上、不明確な部分も多いものの、日常的な生活の場とは異なる場であったことを想定しておく。湧水溝や廐塗土坑、小型の堅穴住居、墓とした SX 40等が魔除けの祭祀に結びつくものかどうかは不明とせざるを得ない。

(2) 平安時代中頃①=斎宮第Ⅱ期第4段階並行

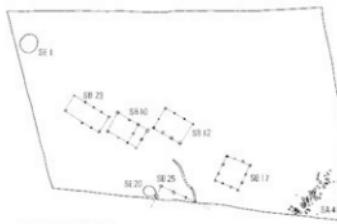
奈良時代の遺構が廐絶の後、100年程度の期間を空け、掘立柱建物と井戸で構成される集落が出現する。建物は建替え関係にある SB 4・5を1棟とすれば4棟で構成される。SB 5の南側柱列の延長上に接して SB 9の北側柱が、SB 9の南側柱列の延長上に SB 15の妻柱がそれぞれ位置し、計画的な配置が窺える。また、柴垣状遺構 SA 41を区画されて



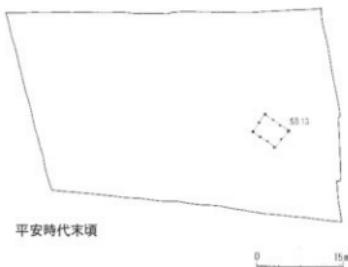
奈良時代後半



平安時代中頃①



平安時代中頃②



第25図 遺構変遷図 (1:800)

おり、建物との間に空間を保有している。建物の配置や規模は官衙的なものではないものの、複数の建物を所有することができる者の屋敷とすることには無理がないものと思われる。なお、前代にみられた祭祀に関連する遺物は、当時期では出土していない。

(3) 平安時代中頃②=斎宮第Ⅱ期第4段階並行

前代のS B11の建替えに伴う一群で、5棟の建物と井戸で構成される。前代との時期差は少ないことが想定され、様相にも大きな変化はない。ただし、棟方向が北東から北西に大きく変更されている。

S B25は比較的規模の大きい建物で、これら的一群の主屋の可能性がある。なお、柴垣状遺構S A41は柱穴の密集状況から、ここでも存続していたものと推測できる。2基の井戸S E 1・20については両者がこの一群に伴うものかどうかは不明である。ただし、S B25とS E 20が接近しすぎており、この一群に伴う井戸はS E 1である可能性が大きい。

(4) 平安時代末頃=斎宮第Ⅲ期第3段階並行

前代から100年程度の間隔を空け、再び建物が出現するが、1棟のみであり集落縁辺部の様相である。それに続く中世では、耕作溝の検出で示されるように耕地として利用されていたことが分かる。再び集落となることはなく、この土地利用が現在まで続いているのである。

【註】

- ① 斎宮歴史博物館『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ』2001
- ② 齊藤孝正「猿投・美濃須衛」『季刊考古学第42号』雄山閣 1993.1
- ③ 平川南「墨書き器とその字形」『国立歴史民俗博物館研究報告第35集』国立歴史民俗博物館 平成3年11月
- ④ 大川勝宏「斎宮跡の祭祀と出土遺物」『三重県史資料編考古2』三重県 平成20年3月31日
- ⑤ 前掲④に同じ
- ⑥ 松阪市教育委員会『松阪市遺跡地図』2008年3月
- ⑦ 森川常厚「古代集落概要」『三重県史資料編考古2』三重県 平成20年3月31日

報告書	調査時	報告書	調査時	報告書	調査時	報告書	調査時	報告書	調査時	報告書	調査時
SE1	B3-SK1	SD8 SB13	O4-SK3 東西大溝	L6-P10 L6-P11	H9-SK1 H9-SK2	SD29 SK21	D3-SD2 C4-SD1	SD35 L9-SD1	L6-SD12 L7-SD2	SD35 L9-SD1	
SK2	B2-SK1		D5-P2 D5-P3 E5-P1				H9-SK3 L7-P1 L7-P3		C4-SD2 C8-SD2		SD36 H8-SD3
SH3	D2-SK1	SB9 SB14	E5-P2 D6-P1 D6-P3 E6-P1	L6-P1 L6-P2	H9-SK5 H9-SK6	SD30 SB22	D3-SD3 C5-SD1	SK37 I8-SK1 SK38 I8-SO2	I8-SK1 I8-SO2	SK39 I9-SK2 SX40 K10-P1	
SB4	E2-P5 E3-P3 E3-P4 F3-P1 F3-P4		F7-P1 F7-P2				—		C5-P1 D6-P4		D6-SD2
		SB10 SB15	F2-P2 F3-P1 F3-P2 F3-P6	H7-SB1	SB23 SB24	E6-P3 G7-P2	E7-SD1 SK31	SA41 N8-SK1 N8-P2 N9-P1 N9-P2 O9-P1 M10-SK1 M10-P2 M10-P3 M10-P4 M10-P5 M10-SK5 M10-P6 M10-P7 N10-P1			
			F7-P3 G7-P1		J8-P1	G7-P2	—		E6-P3 G7-P2	SK32 H4-SK1	
SB5	E3-P9 F3-P2 F3-P6	SB11 SB12	G5-P1	K9-P1	SB25 SK18	A2-SD1 A3-SD1	SK33 J5-SD1 J5-SD2 K5-SD1 K5-SD2 L5-SD1	SK42 E2-SK1	J5-SD1 J5-SD2 K5-SD1 K5-SD2 L5-SD1	SK33 J5-SD1 J5-SD2 K5-SD1 K5-SD2 L5-SD1	
SB6	H2-P2 H2-P3		G6-P4				SD26 SD27	A2-SD2	SD34 —		
SB7	K2-P2		H6-P2	SK19	I9-SK1	SD27	A2-SD2	SD34 —	D3-SD5 D4-SD2	SD34 —	
				SE20	G9-SK1	SD28	D3-SD5 D4-SD2				

第3表 遺構番号対照表



調査区北西側全景（東から）



調査区西側全景（東から）

写真図版 2



調査区南西側全景（東から）



調査区北東側全景（西から）



調査区東側全景（西から）



調査区南東側全景（西から）

写真図版 4



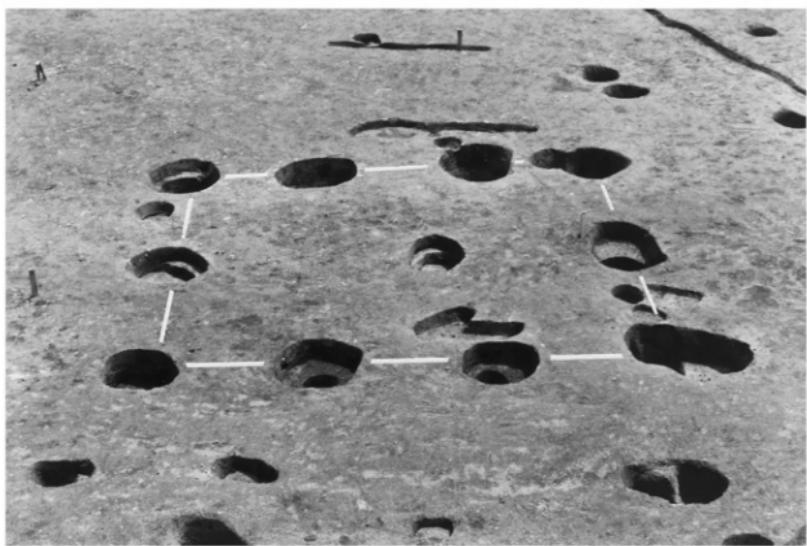
S H16 (南から)



S H16カマド (南から)

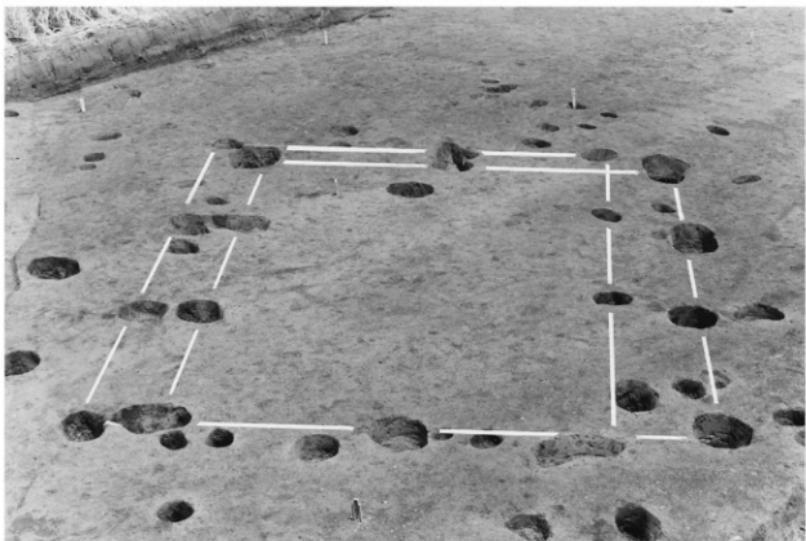


S H16カマド断面（西から）



S B14（北から）

写真図版 6



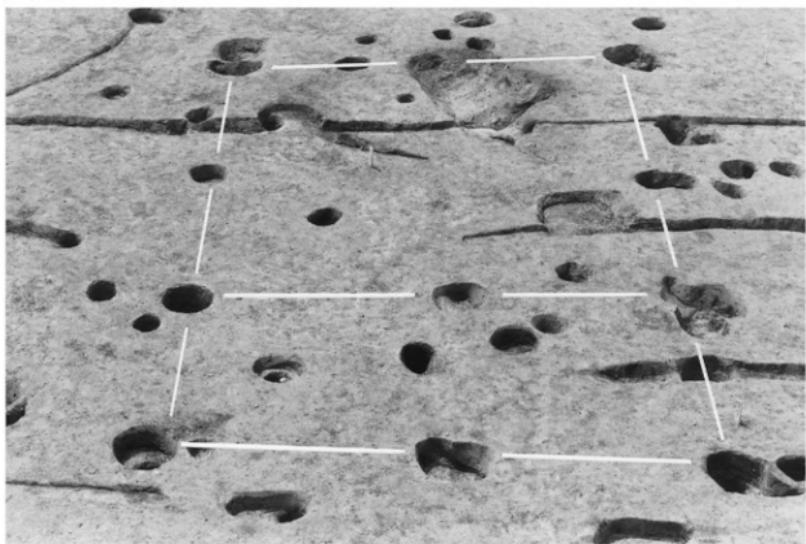
S B 4・5 (南西から)



S B 7 (西から)

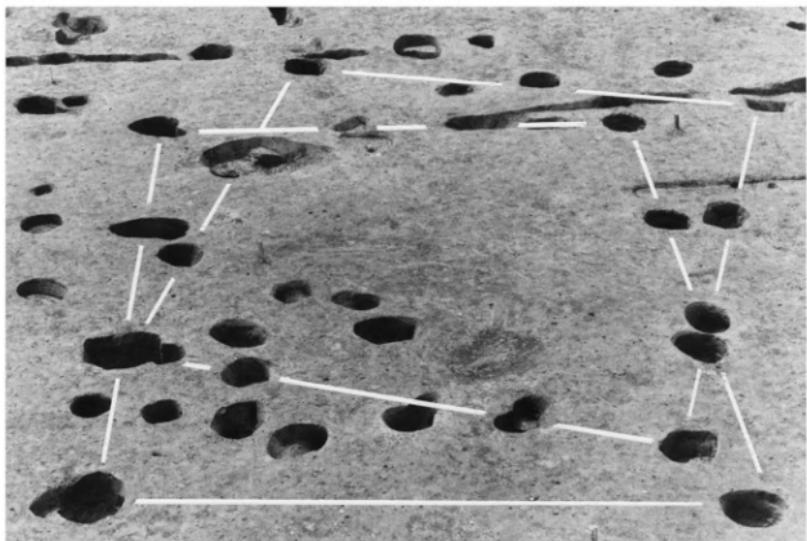


S B 9 (南西から)



S B 10 (東から)

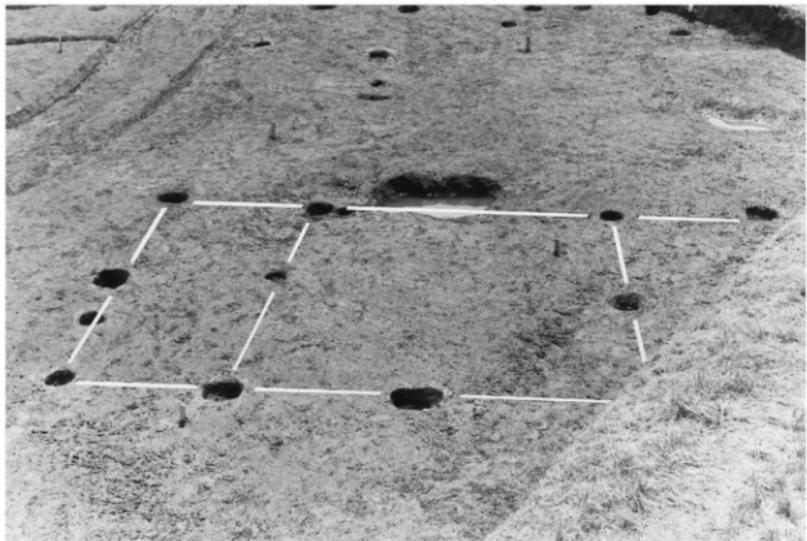
写真図版 8



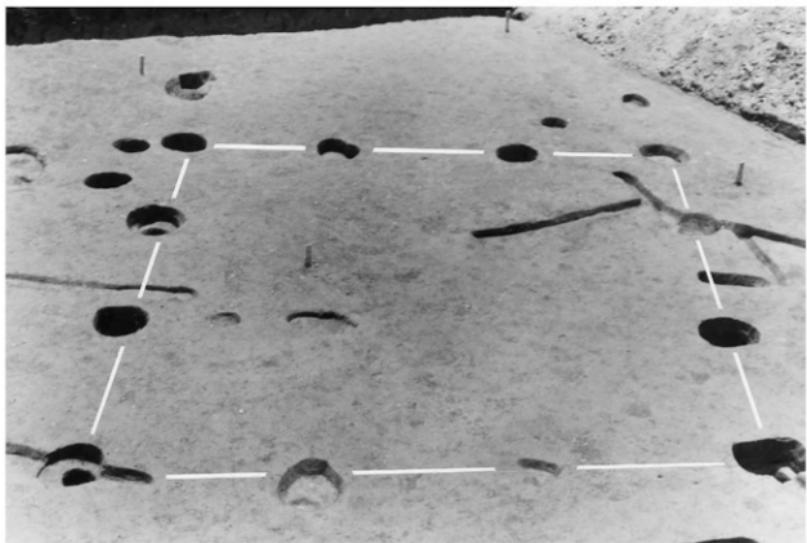
S B11・12 (東から)



S B13 (北から)

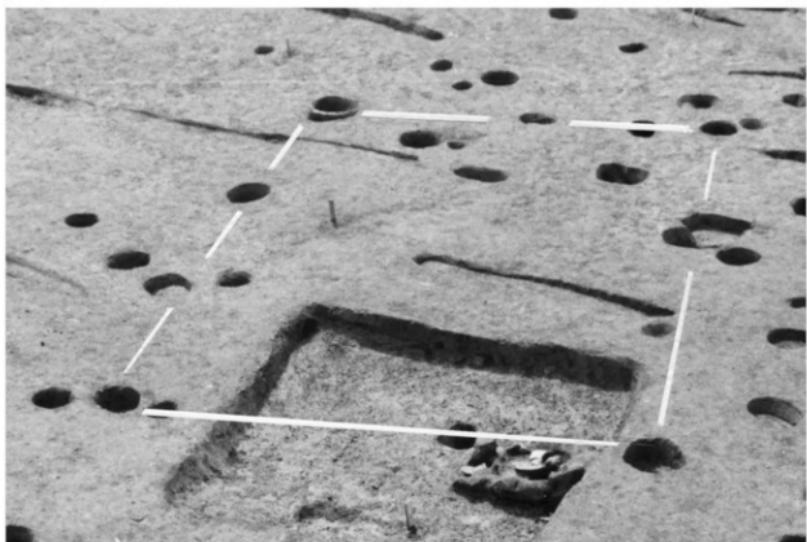


S B15 (北西から)



S B17 (北から)

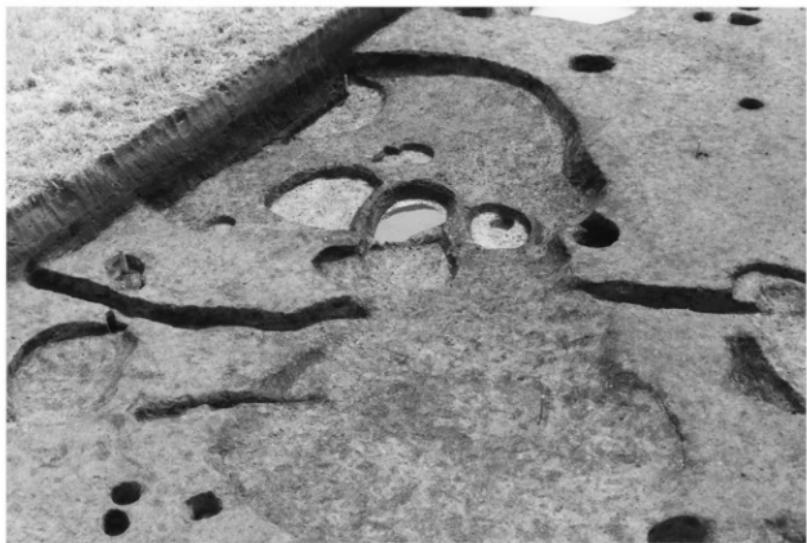
写真図版10



SB24 (東から)



SE1 (南西から)



S K21 (東から)



S X40 (北から)

写真図版12



56



66



79



133



203



204



261



186

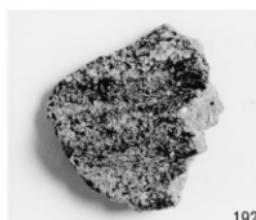


42



47

出土遺物

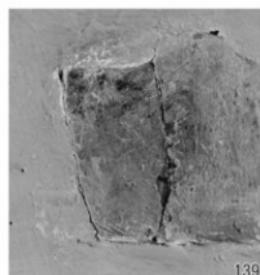


出土遺物

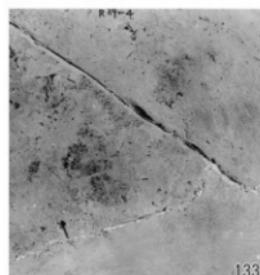
写真図版14



135



139



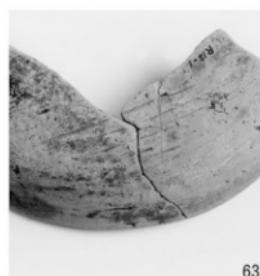
133



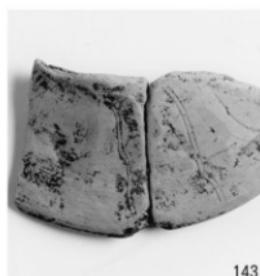
304



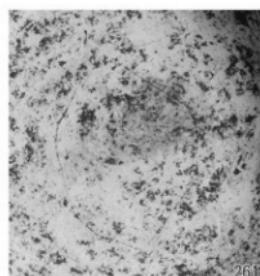
316



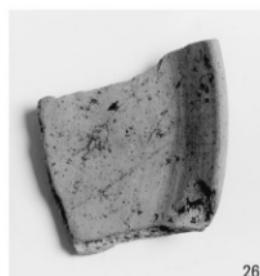
63



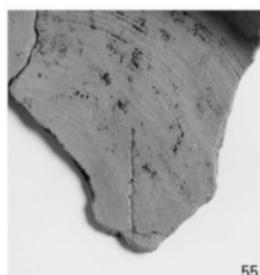
143



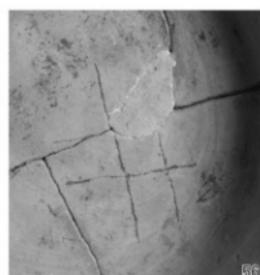
261



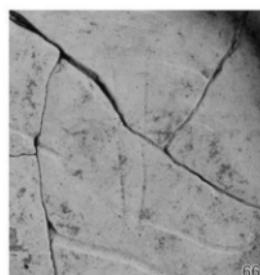
26



55

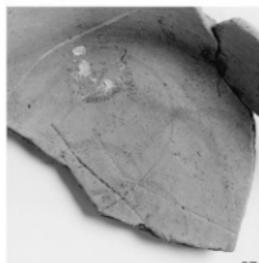


85



66

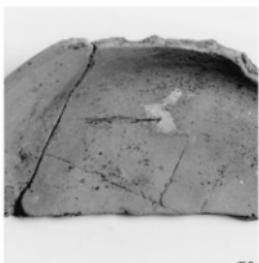
墨書・記号



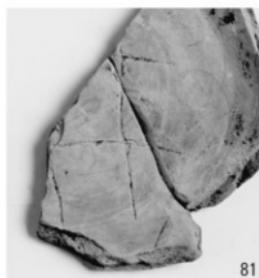
67



68



76



81



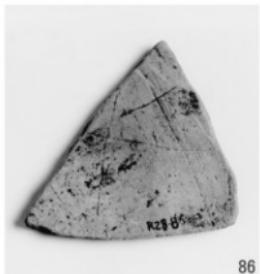
81



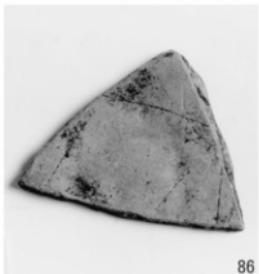
83



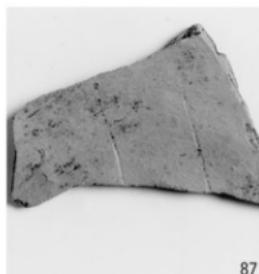
84



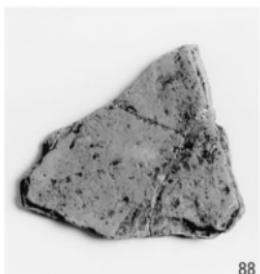
86



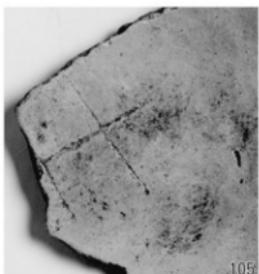
86



87



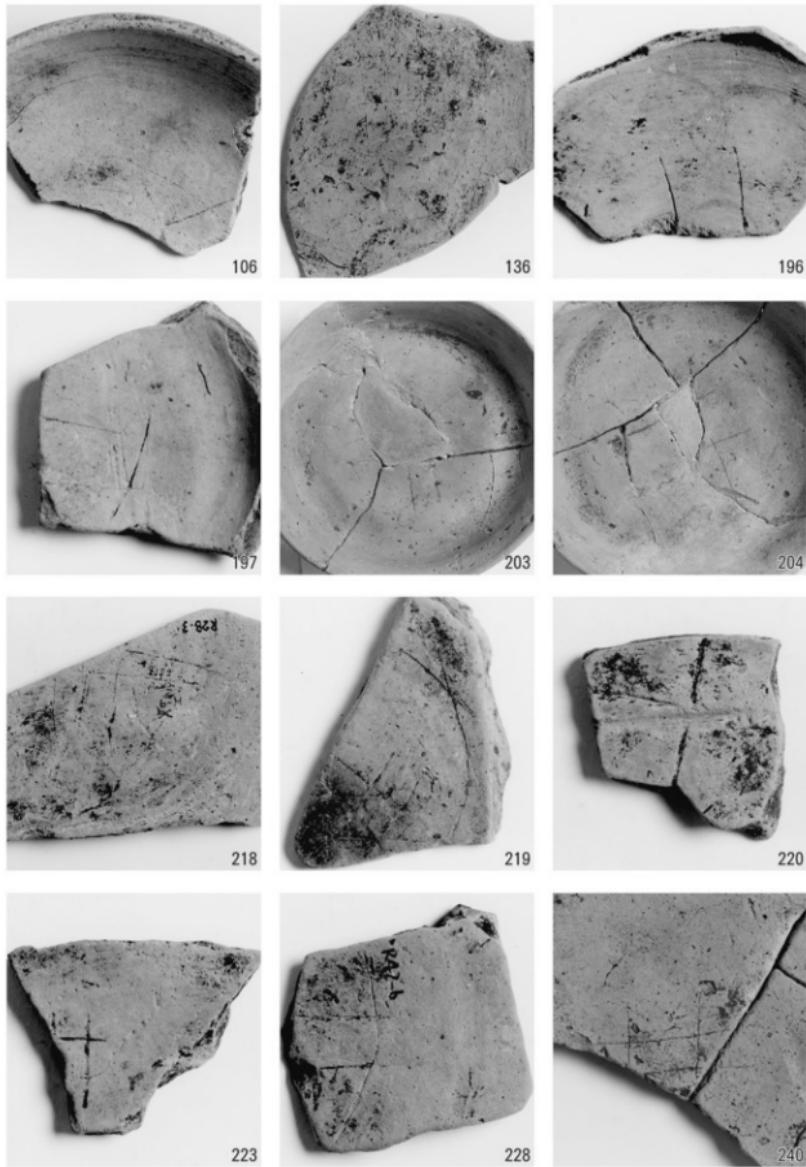
88



105

記号

写真図版16



記号

報 告 書 抄 錄

宮ノ沖遺跡発掘調査報告

研究紀要 第19－3号

2010(平成22)年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印 刷 東海印刷株式会社
